



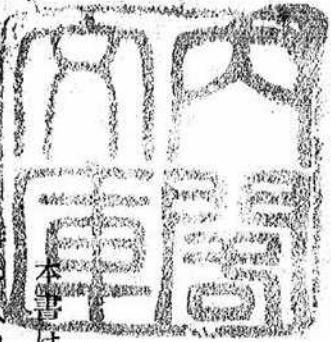
昭和十年四月

朝鮮の人口問題

朝鮮總督府

3
1

内閣文庫	
八三三七号	一冊
和書	



334
122

序

本書は昭和十年一月號雑誌「朝鮮」に掲載せられたる、善生永助氏の論文、朝鮮の人口問題前篇に補正を加へて別刷に附したるものにして、朝鮮の人口動態並に人口動態は、これに依つて明瞭にされて居るから、朝鮮の人口問題の研究を爲す者、及び人口統計事務に従事する者に取りては参考となるものと信ずる。

昭和十年四月

朝鮮總督官房文書課長 鹽田正洪

人口の分布.....(一五〇)
 各道の人口密度.....(一六一)
 郡島の人口密度.....(一六六)

三、婚姻・離婚

婚姻数と婚姻率.....(一八九)
 離婚数と離婚率.....(一九一)
 年齢別配偶関係.....(一九二)
 地方別婚姻率・離婚率.....(一九七)
 内鮮外人別の婚姻・離婚.....(二〇〇)
 婚姻放しと離婚年齢.....(二〇四)
 内地人と朝鮮人との通婚.....(二一〇)

四、生産・死亡

出生率.....(二一五)
 出生数・出生率.....(二二四)
 出生児の體性・月別.....(二二四)
 死産.....(二二七)

死亡数・死亡率.....(二三三)
 死亡者の體性・年齢.....(二三四)
 死亡者の死因・月別.....(二三八)

五、人口の増減

人口の増加趨勢.....(二四六)
 人口の増減地域.....(二五〇)
 人口自然増加.....(二五九)
 將來の人口豫測.....(二八〇)



朝鮮の人口問題

善 生 永 助

は し が き

國勢の伸張を測定する標準としては、先づ國富の増殖、民力の充實、人口の増加、産業の發達、文化の進歩、交通の改善、人心の安定、國防の完備、治安の維持等を擧ぐべきであるが、日韓併合以來茲に二十五年を経過したる今日、われ等は朝鮮に於けるこれ等諸點の躍進に、驚嘆を禁じ得ないものである。とりわけ人口の増加に至りては、國利民福の一反映と見て然るべく、新羅・高麗・李朝を通じて、朝鮮半島には恐るべき旱魃・水害・風害・火災・蟲害・冷害等の凶作饑饉が頻々として襲來し(拙著「朝鮮の」)、また各種の傳染病が蔓延流行して、一時に多數の餓死又は斃死者を出し、これが爲め人口増加の頗る遅々たるのみならず、時には却つて人口の減少を來した時代もあつたのである。(拙著「朝鮮の人口研究」及び「朝鮮の人口現象」参照)然るに日韓併合以來、帝國の半島經營は世界に比類なき好成績を收め、法制の完備、財政の刷新、幣制の改革、金融の改善、産業の開發、交通の普及、文教の發達、衛生の進歩、治安の維持、國防の安全、警備の充實等、全く隔世の感あるに至り、これ等が相與つて人口増加の勢ひを大ならしめ、明治四十三年末には一千三百三十一萬三千十七人であつた總人口が、昭和八

年末には二千七十九萬二千三百二十一人に膨脹し、この間に於て實に七百四十七萬八千三百四人を増加し、明治四十三年末人口を一〇〇とすると、昭和八年末の人口は一五六・一七となつて居る。この一事のみを以てするも、朝鮮統治の効績は長く世界に誇るべきものであると信ずる。しかしながら、人口増加の勢ひと、他の國勢伸張の諸要素とが歩調を一致せず、人口のみ急激に増加し、或は人口増加の勢ひが緩漫となる如き場合は、社會上種々の變調を來した結果であるから、爲政家たるものは深くその原因を探究せねばならない。

凡そ一國一地方に於ける人口の増減は、國勢の推移、國力の消長に重大なる關係を及ぼすものである。云ふ迄もなく、人口は生産及び國防上の最大要素を爲し、如何に文化の進み國富の大なる國家と雖も、その抱擁する人口の増加力が微弱なるか、又はその減少の勢ひを示すに於ては、永く國力を維持して發展することの困難なるは、古來多く歴史の證明せる所である。しかしながら、個人に在りて、充分なる扶養能力無きものが、徒らに多くの子女を有つことは、自らの生活を困難ならしむるのみならず、延いては社會國家に累を及ぼすことの尠くないと同様に、國家に於ても、その國土の狹隘にして、食糧及び原料の生産力の豊富ならざるものが、無制限に人口の増加を來すことは、獨りその國家自體の憂患たるに止まらず、斯かる國家の人口膨脹の壓力を受くる、他の國々の重大なる悩みとなり、二十世紀殊に世界大戰後に於ける人口問題は、實に世界經濟上の重要題目となつて居たのである。従つてこの數年來、内地及び外地を合せて年々百數十萬人宛の人口増加を招きつゝ、ある我國は、北米に、南米に、濠洲に、其他到る所、移民の門戸を閉鎖され、所謂「貧乏者の子澤山」の譬に洩れず、内に人口問題の解決に苦みたると共に、外に列國の猜疑排斥を蒙りたることも尠少でなかつた。

翻つてわが朝鮮の状態を見るに、日韓併合の前後に於ては、一部の識者より、我國の人口及び食糧問題解決の安全籌たるが如くに思惟されたる半島の地が、年々二十萬人内外の人口増加を來し、これが重壓に加ふるに經濟上幾多の原因ありて、國民生活の疲弊困憊漸く甚だしく、豫期の如き内地移民の收容力を有せざるのみならず、却つて朝鮮人の滿洲及び内地への移住出稼は年と共に多くなり、今や在滿朝鮮人は總數約百五十萬人以上と稱せられ、また内地在住の朝鮮人は約七十萬人と算せられて居り、内地の各都市に於ては、最近數年間に於ける朝鮮人の急激なる増加の爲めに、勞働問題及び社會施設等に、實に容易ならざる困難に遭遇して居る始末である。私は命を受けて屢々内地に於ける朝鮮人勞働者の状態を調査したが、就中、最近の昭和八年秋、阪神地方、京濱地方、及び北九州地方に於ける朝鮮人勞働者の勢力の強大なるを視るに及び、當該地方當局の朝鮮人勞働者對策に苦心せる有様を充分に理解することが出來た。更に眼を轉じて、滿洲事變後に於ける朝鮮人の滿洲各地への移住状況を眺めんか、半島に於ける農業移民、及び勞働者供給力が、如何に旺盛なるかは、何人とも必ずや認めざるを得まい。然らば何故に朝鮮は、滿洲及び内地へ向つて、移住出稼者を斯くも多數に出し得るのであらうか、否出さざるを得ないのであらうか、それには遠く且つ深い根因が無くてはならない。

私は朝鮮の人口問題に關して、大正十四年には拙著「朝鮮の人口研究」を、續いて昭和二年には「朝鮮の人口現象」を、更に昭和八年には「朝鮮の聚落前篇及び中篇を公にし、この外にも數種の論文を發表して居るが、其後に於て朝鮮の人口趨勢には多少の變化を見、殊に滿洲事變を契機として、我國の人口問題・食糧問題・原料問題等の對策には、一大轉換が行はれつゝ、あり、また一面朝鮮内に於ても、人口増加の壓迫に基因し、若く

ばこれに關聯して、幾多の經濟問題・生活問題・思想問題・都市問題・社會問題等が相輔して發生しつゝ、あり、今や單なる人口問題と謂はんよりは、寧ろ人口を中心としたる各種の重要問題の解決に當面して居るのである。されば今日更に朝鮮の人口に關する諸問題に就いて、再吟味を行ふも亦強ち徒爾ではあるまい。

惟ふに世界大戰後に於ては、産業・貿易の方針に於ても、貨幣・爲替の政策に在りても、各國は從來の理論を放擲して、或は鎖國主義を執り、或は金本位の停止を行ひ、進んでその本國及び植民地間に一大經濟ブロックを結成して國際經濟戰に備へて居る。この間に在りて我國は、滿洲問題の爲めに國際聯盟を脱退し、世界列強を相手に孤立無援の立場に置かれ、貿易上に於ても、支那市場の日貨排斥に加ふるに、既に日印、日蘭會商に徴するも、日本商品の販路は益々縮小されつゝあり、今後更に國際關係の悪化を見んか、從來に比し一層の重壓を豫想せねばならず、押し迫る千九百三十五年後の重大危機を前にして、われ等國民は一大決心を必要とする秋に際會したのである。獨り人口問題に限らず、我國現下の經濟政策及び朝野の覺悟を以て、果して完全はこの重大なる難局を切り抜け、國運の發展を計り、躍進日本の前途に光明を齎らし得るであらうか。現在各方面に於て盛んに滿洲移民が奨勵され、既に何程かの移住が行はれて居るが、この花火線香に等しい心細き勢ひを以て、年々百數十萬人宛増加し行く帝國の人口問題解決に、將來幾干の寄與貢獻を爲し得るであらう。思へわれ等が同胞よ、日露戰爭後このかた、内に人口の過剰に悶え、外に移民の排斥に脅かされ、憤積せる膨脹力を抑制せられたる結果、大陸發展の必要が頻りに絶叫されながら、事變前の關東州及び滿鐵沿線に於ける日本人の發展、否退要ぶりはどうであつたか。更に併合後二十五年を経過したる朝鮮に於てさへも、東拓其他の

移民事業が色々奨勵し活動したに拘らず、尙ほ且つ内地人の數は僅に五十餘萬人を算するに過ぎないのである。口に國難の非常時との騒がれて居るが、災害地農民の窮乏を餘所にして、早くも都市のそちこちには、泡沫に等しきインフレ景氣に狂氣亂舞して居るものが多く、一般に内地外地を通じ、緊張せざる國民生活の有様は何と見るべきであらうか。日露戦後の國民も、關東大震災後の國民も、將た又今日の國民も同じでありとすれば、その滿洲國に於ける將來も凡そ見當がつくやうな心地がして、轉た寒心に堪へない次第である。

日韓併合の前後に於ては、朝鮮の經濟價値に就いて、超過計算をして居た軍人や政治家が尠くなかつたが、今日また滿洲國の經濟資源に關して、往年の朝鮮と同様に過大の見積を爲し、無暗に有望がつて居る連中が多いのは、洵に遺憾此上もないことである。固より領土の廣大にして、各種の天然資源を包蔵し、しかも人口の寡少なる滿洲國に於ては、幾多の開発すべき有望事業の存するのは事實であるけれども、眞に我が國家の補助保護無くして、充分に獨立し發展し得るものが果してどれ程あるであらうか。貧乏世帯の帝國が滿洲國を指導誘掖し、その産業を開發進展せしむる爲めには、將來に重大なる負擔と責任が加はつて居ることを忘れてはならない。しかしながら、滿洲國の開發は單なる經濟上の利害問題でなく、帝國生命線の確保といふ立場より見て絶體に必要なことであるから、假令算盤を伏せても必ず實行せねばならぬ運命に在る。殊に我國の原料問題及び人口問題の解決上、殘されたる有望地域としては、滿洲國を外にして殆んど期待し得られないとすれば、日滿統制經濟の規畫は、須らく遠大なるを要するが、由來わが内地人の習性は、從來南方の溫帶乃至熱帶地方への移住に成功し、北方の寒地移住に就いては、僅に北海道及び樺太と朝鮮北部以外に經驗なく、殊に滿洲に

對しては、氣候の關係や、生活程度・勞銀・農耕様式等の點より見て、その農業移民として定着する迄には、必ずや多くの歳月を要すべく、わけて現在の如き家族を伴はない單獨移民に多くを期待することは出来ない。模型や標本のやうな移民では、人口問題の解決が出来ないとすれば、畢竟するに滿洲移民の問題は、既に永き歴史をもち、好成績を収めて居る、朝鮮同胞の移住を外にして、多くを待望することは不可能であるまいか。

斯く觀じ斯く考へ來ると、帝國人口問題の前途は依然として困難であり、従つて二千萬人以上の大口を有する朝鮮の人口推移は、政治上及び經濟上重要な關係を有するのである。是れ即ち私が、朝鮮の人口問題及びこれに關係ある諸問題の研究調査の結果を發表し、以て大方の批判を仰ぐ所以である。朝鮮と内地とは統計の様式を異にせるものもあり、本文は問題の性質上、人口統計に關する技術的の取扱等には、尙ほ盡さざる點も多々あること、思はれるから、他日更に機會を得て、殘されたる諸事項に關する研究調査を試みんことを念願して居る。また人口の歴史的及び地理的研究も、「朝鮮の人口研究」、「朝鮮の人口現象」、「朝鮮の聚落」等の既刊の拙著に譲り、こゝでは省略してある。本文を草するに當り、内容の關係から、これを前篇と後篇とに分ち、前篇に於ては、専ら人口靜態及び人口動態を取扱ひ、通常人口問題の一般的考察は略ぼこれで盡して居るが、後篇に於ては、主として人口關係の諸問題、就中、經濟問題、文化問題、社會問題等を、統計事實に立脚して論究して置いた。これを要するに、朝鮮に於ては人口問題の解決は極めて大切であるが、時勢の推移と世相の變化に伴ひ、更に人口關係の諸問題の對策には種々の緊要なるものが横はつて居るから、これに善處する爲めには、官民共に此際一大奮起をせねばならぬと信ずる。

前篇 人口靜態と人口動態

朝鮮の人口問題を論究するに當りては、先づその人口靜態と人口動態とに就いて、一通りの解説をして置く必要がある。李朝時代に於ける人口記録は極めて杜撰にして、専ら徵稅・賦役の必要から調査された爲めか、時代に依りては男の數のみを掲げて女の數を省いたものあり、また小供の數は計上されぬことが多く、その人口數も全部を網羅せざる場合が尠からず、下級官廳が故意に人口調査に加工したと思はるゝものも珍らしくなかつた。併合以來朝鮮の人口統計は全く面目を一新して來たけれども、昔に遡る程不完全を免れない。従つて本文を草するに當りては、主として最近十箇年間の人口状態を検討し、資料としては多く現住戸口調査と、國勢調査の結果表とを併せて用ゐてある。この兩調査は、全然調査の時期と方法とを異にして居るから、その數字は一致しないが、大體の人口趨勢を見るには、彼是對照した方が却つて好都合であらう。拙著「朝鮮の人口研究」及び「朝鮮の人口現象」等に於て叙述してある朝鮮の人口概念に關する説明は、重複を避ける爲め努めてこれを省略してあるから、詳しくは右の二書を參考されんことを希望する。

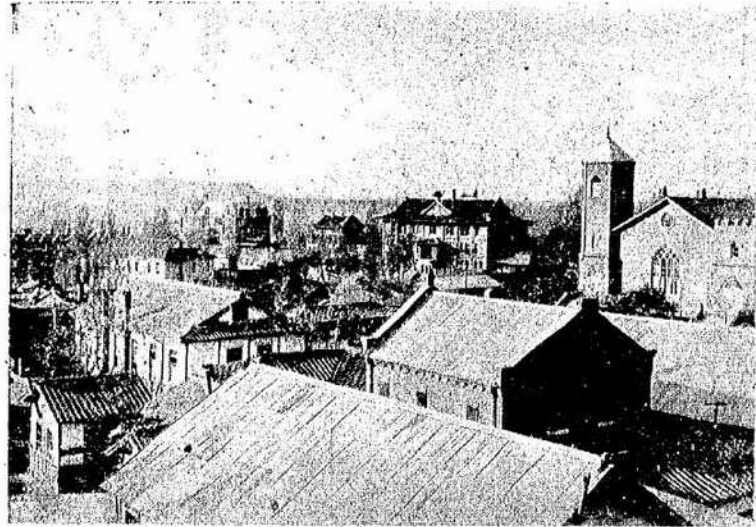
一、人口構成

人口構成に關しては、これを各方面より觀察することが出来るが、私は朝鮮の人口構成を試みに、人種別、體性別、職業別、年齢別、及び世帯別の五項に區分し、順次考察して見やうと思ふ。

人種別構成

朝鮮の人種構成と其總數 朝鮮半島に於ける住民の最大部分を占むる朝鮮人は、アジャヤ人種のウラル・アルタイ種族に屬する朝鮮族にして、その中には種々の系統があり、その中心勢力を爲すものは有史以前より南部朝鮮地方に繁殖發展して居た韓民族であるが、歴史上幾多の治亂興亡と民族の移動消長あり、西部及び北部朝鮮と同じウラル・アルタイ種族の滿洲族、蒙古族が、南部諸地方よりは日本族が、また大同江流域及び黄海方面よりは崑崙種族の漢族が侵入或は移住し來り、これが幾時代も經過して同化融合し、以て今日の朝鮮族を形成して居るのである。されば同じ朝鮮人と謂つても、その朝鮮地方のものと、黄海道・平安道方面、江原道・咸鏡道方面のものでは、風俗民心等に相異なるものがある。今日までにも、歴史家は文獻遺蹟により、考古學者は遺物發掘により、言語學者は言語の分布により、また醫學者は、頭蓋骨や、骨格や、血液型などの比較研究により、半島に於ける民族の分布と人種的系統を明かにせんことを努めて居るが、これ等の諸研究の結果は、大體に於て、朝鮮地方に於ては日本系統に、西北朝鮮地方に於ては滿洲國及び中華民國系統に、影響を受けて居るものが多いことを明かにしたものが尠くない。

昭和八年末現在の朝鮮の總人口は二千七十九萬一千三百二十一人にして、これを内地人、朝鮮人、臺灣人、外國人に分つと、内地人は總人口の二分七厘の五十四萬三千九十九人、朝鮮人は九割七分二厘の二千二十萬五千五百九十一人、臺灣人は五人、外國人は一厘の四萬二千六百二十六人である。



平壤の洋村 平壤の西洋人經營の學校及び教會の多き落

外國人國籍調 (昭和八年末現在)

國籍別	計		
	男	女	
滿洲國及 中華民國	三三、〇五五	八、二一一	四一、二六六
北米合衆國	三二二	三九九	七二一
英吉利	一〇四	一一五	二一九
佛蘭西	五八	二五	八三
ソヴェト聯邦	七七	五八	一三五
獨逸	五二	二九	八一
西瑞	一	一	二
白耳義	一	二	三
和蘭	二	三	五
丁林	二	三	五
瑞典	一	三	四
諾威	七	六	一三
土耳其	三九	二八	六七
加納	五	八	一三
添洲	三	四	七
ツチアキア	二	一	三
總計	三三、七三一	八、八九五	四二、六二六

各道内鮮外人數 最近二十年間に於ける朝鮮人口の種別消長を知る爲め、三期に分ちて各道の内鮮外人數を見ると左の如くなつて居る。これに據ると、内地人は京城府及び仁川府等を包有する京畿道に最も多く分布し、慶尙南道これに亞ぎ、慶尙北道・全羅南道・全羅北道・平安南道等にも多い。また外國人は國境の平安北道に最も多く、京畿道これに亞ぎ、咸鏡南道・平安南道等にも多く分布して居る。これ等外國人の大部分は滿洲國人及び中華民國人であるが、昭和六年の平壤事件以來その數は著しく減少して居る。

各道内鮮外人別人口比較

道	種別	世帯			人口		
		大正三年末	大正十三年末	昭和八年末	大正三年末	大正十三年末	昭和八年末
京畿道	内地人	三,七〇〇	六,四〇〇	三,七〇〇	一〇,〇〇〇	一六,〇〇〇	一〇,〇〇〇
	朝鮮人	三,〇〇〇	三,〇〇〇	三,〇〇〇	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇
	外國人	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇
忠清北道	内地人	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇
	朝鮮人	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇
	外國人	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇
忠清南道	内地人	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇
	朝鮮人	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇
	外國人	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇

道	種別	世帯			人口		
		大正三年末	大正十三年末	昭和八年末	大正三年末	大正十三年末	昭和八年末
全羅南道	内地人	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇
	朝鮮人	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇
	外國人	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇
全羅北道	内地人	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇
	朝鮮人	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇
	外國人	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇
慶尙北道	内地人	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇
	朝鮮人	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇
	外國人	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇
慶尙南道	内地人	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇
	朝鮮人	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇
	外國人	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇
黄海道	内地人	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇
	朝鮮人	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇
	外國人	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇

道	府	縣	住居世帯		人口	
			世帯	人口	男	女
平安南道	計	外国人	2,373	67,752	32,912	34,840
		内地人	3,615,455	1,376,631	1,578,446	1,588,185
		朝鮮人	1,581,561	8,850	1,590,411	1,590,411
	平安南道	計	5,169,389	1,892,333	3,271,059	3,271,059
		外国人	2,373	67,752	32,912	34,840
		内地人	3,615,455	1,376,631	1,578,446	1,588,185
	平安北道	計	3,081,030	1,120,797	1,207,797	1,207,797
		外国人	1,006	1,982	1,982	1,982
		内地人	3,079,024	1,118,815	1,195,815	1,195,815
	江原道	計	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
		外国人	100	100	100	100
		内地人	999,900	999,900	999,900	999,900
成鏡南道	計	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	
	外国人	100	100	100	100	
	内地人	999,900	999,900	999,900	999,900	
成鏡北道	計	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	
	外国人	100	100	100	100	
	内地人	999,900	999,900	999,900	999,900	

道	府	縣	住居世帯		人口	
			世帯	人口	男	女
平安南道	計	外国人	2,373	67,752	32,912	34,840
		内地人	3,615,455	1,376,631	1,578,446	1,588,185
		朝鮮人	1,581,561	8,850	1,590,411	1,590,411
	平安南道	計	5,169,389	1,892,333	3,271,059	3,271,059
		外国人	2,373	67,752	32,912	34,840
		内地人	3,615,455	1,376,631	1,578,446	1,588,185
	平安北道	計	3,081,030	1,120,797	1,207,797	1,207,797
		外国人	1,006	1,982	1,982	1,982
		内地人	3,079,024	1,118,815	1,195,815	1,195,815
	江原道	計	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
		外国人	100	100	100	100
		内地人	999,900	999,900	999,900	999,900
成鏡南道	計	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	
	外国人	100	100	100	100	
	内地人	999,900	999,900	999,900	999,900	
成鏡北道	計	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	
	外国人	100	100	100	100	
	内地人	999,900	999,900	999,900	999,900	

移住内地人の本籍別 移住内地人は大正三年末には二十九萬一千餘人であつたものが、十年後の大正十三年末には四十一萬一千餘人に増加し、更に二十年後の昭和八年末には五十四萬三千餘人に躍進して居るが、朝鮮人の内地移住出稼の旺盛にして、僅に十餘年間に於て、その數約七十萬人に及んで居るに比較せんか、その成績は決して良好なりと稱し難い。尙ほ朝鮮在住内地人の本籍府縣別を見ると、山口縣の五萬一千餘人最も多く、福岡縣の四萬三千餘人、熊本縣の三萬四千餘人、長崎縣の三萬四千餘人、廣島縣の三萬二千餘人等これに並び、佐賀、大分、鹿兒島、岡山の諸縣は、いづれも二萬人以上、愛媛、島根、香川、東京、愛知、兵庫の諸府縣は各一萬人以上であり、地理的關係よりして、九州、中國、及び四國地方のものが多く入り込んで居る。

内地人府縣別戸口表 (昭和八年末現在)

道	府	縣	住居世帯		人口	
			世帯	人口	男	女
平安南道	計	外国人	2,373	67,752	32,912	34,840
		内地人	3,615,455	1,376,631	1,578,446	1,588,185
		朝鮮人	1,581,561	8,850	1,590,411	1,590,411
	平安南道	計	5,169,389	1,892,333	3,271,059	3,271,059
		外国人	2,373	67,752	32,912	34,840
		内地人	3,615,455	1,376,631	1,578,446	1,588,185
	平安北道	計	3,081,030	1,120,797	1,207,797	1,207,797
		外国人	1,006	1,982	1,982	1,982
		内地人	3,079,024	1,118,815	1,195,815	1,195,815
	江原道	計	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
		外国人	100	100	100	100
		内地人	999,900	999,900	999,900	999,900
成鏡南道	計	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	
	外国人	100	100	100	100	
	内地人	999,900	999,900	999,900	999,900	
成鏡北道	計	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	
	外国人	100	100	100	100	
	内地人	999,900	999,900	999,900	999,900	

することが出来ない。男女数及びその割合は、時代に依り、地方に依りて、大小高低あるは當然であるが、昭和八年末に於ける朝鮮の總人口二千七十九萬一千三百二十一人の中、男は一千五十八萬一千五百四十一人、女は一千二十萬九千七百八十人である。即ち男女の割合は女百人に付男一〇三・六人にして、内地の一〇一・一人に比し、二・五人高いことになつて居る。而して男超過の程度は各地一様でなく、平安南道・黄海道等は略ぼ男女数の均衡を保ち、全羅南道・慶尙北道・慶尙南道・平安北道もその男超過の程度が未だ甚だしくないが、江原道・全羅北道等は極めて高くなつて居る。

男女別人口實數並に割合比較

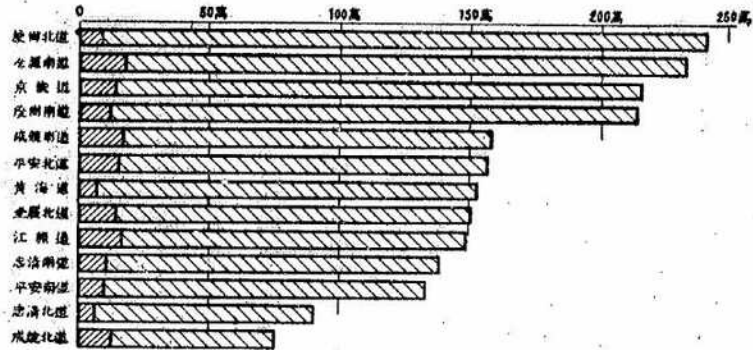
道	大正三年末		大正十三年末		昭和八年末		男女割合(女百に付男)
	男	女	男	女	男	女	
京畿道	8,754,741	8,998,312	10,205,812	10,682,949	11,622,888	12,022,888	106.9
忠清北道	5,566,666	5,666,666	6,333,333	6,433,333	6,800,000	7,000,000	106.9
忠清南道	5,000,000	5,000,000	5,666,666	5,666,666	6,000,000	6,000,000	100.0
全羅北道	5,000,000	5,000,000	5,666,666	5,666,666	6,000,000	6,000,000	100.0
全羅南道	5,000,000	5,000,000	5,666,666	5,666,666	6,000,000	6,000,000	100.0
慶尙北道	5,000,000	5,000,000	5,666,666	5,666,666	6,000,000	6,000,000	100.0
慶尙南道	5,000,000	5,000,000	5,666,666	5,666,666	6,000,000	6,000,000	100.0
黄海道	5,000,000	5,000,000	5,666,666	5,666,666	6,000,000	6,000,000	100.0
平安南道	5,000,000	5,000,000	5,666,666	5,666,666	6,000,000	6,000,000	100.0

各道別男女数及其割合 以上の統計を通じて見ると、各道共に大體十年目毎に、女に對する男の超過割合は漸次減退を示しつゝある。これが主なる原因は、近年に及びて女子の出生率が比較的高まりて男子に接近しつゝあるのと、男の他道乃至鮮外へ移住出稼するものが次第に多くなつた結果に基くものと思はれるが、また幾分か朝鮮の文化及び富力進歩の反映とも見られやう。尙ほ參考の爲め、大正十四年と昭和五年の國勢調査の結果に依る、各道の男女別實數並に割合を見ると左表の通りになつて居り、最近五年間に於ても、漸次男女数の割合が接近しつゝあることを窺ふことが出来る。

國勢調査に於ける男女別人口比較

道	昭和五年		大正十四年		男女割合(女百に付男)
	男	女	男	女	
全道	10,754,741	10,998,312	12,205,812	12,682,949	106.9
京畿道	8,754,741	8,998,312	10,205,812	10,682,949	106.9
忠清北道	5,566,666	5,666,666	6,333,333	6,433,333	106.9
忠清南道	5,000,000	5,000,000	5,666,666	5,666,666	100.0
全羅北道	5,000,000	5,000,000	5,666,666	5,666,666	100.0
全羅南道	5,000,000	5,000,000	5,666,666	5,666,666	100.0
慶尙北道	5,000,000	5,000,000	5,666,666	5,666,666	100.0
慶尙南道	5,000,000	5,000,000	5,666,666	5,666,666	100.0
黄海道	5,000,000	5,000,000	5,666,666	5,666,666	100.0
平安南道	5,000,000	5,000,000	5,666,666	5,666,666	100.0

國勢調査道別人口 昭和五年



昭和五年に増加した人口

内地人 二七六、五五〇
朝鮮人 一〇、五九、三三六
外国人 三、七三三

都鄙別男女割合 都會には労働者、俸給生活者、軍人、學生の如き獨身男子の多く住む關係上、男超過の割合高く、また配偶者の割合は村落に比して遙かに低きを例とし、殊にそ

内鮮外人別男女數及割合

に男子の超過大なる地方に於ては、人心が殺伐粗暴に流れ易く、殺人・傷害・猥褻・姦淫・重婚等の犯罪事件數の多きを常とする。内鮮外人に就いて男女の割合を見ると、土着人に於て、然かも農村住民が大部分を占むる朝鮮人の方が男超過の割合が低く、移住民たる内地人は多く市街地に分布し、且つ壯年男子の單獨出稼せるもの、多き關係上、男超過の割合が朝鮮人よりも遙かに高くなり、外国人はその大部分が男子の労働者及び商人又は農夫たる滿洲國人及び中華民國人である爲め、甚だしく男が超過して居る。

内鮮外人別の男女割合 即ち昭和五年の國勢調査に據ると、全鮮に於ける人口は、男一千七十六萬三千六百七十九人、女一千二十九萬四千六百二十六人にして、女一〇〇人に付男一〇四・五六人となつて居る。各道共に男の數が女の數に超過せるを以て、各地方概ね女の數よりも男の數が多いが、特に府部は男超過の割合高く、昭和五年の國勢調査では女百に付郡部の男一〇四・二八に對し、府部は一〇四・一〇四になつて居る。郡部でも男子勞者の需要盛んなる市街地、新開地、及び邊陲の山地帯には、男超過の甚だしき地方が多いのである。この外鑛山・兵營・工場・漁港等の所在地にも、男超過の地方が尠くないが、一時的には或る地方に、水力電氣・鐵道・山林・土木工事等の爲め、多數に男の入り込みて男女數の均衡を破る場合がある。男女數の不均衡甚だしく特

道	男	女	男に付女
北海道	2,011,210	1,571,710	103.10
青森道	1,069,410	817,910	107.58
岩手道	1,069,410	817,910	107.58
秋田道	1,069,410	817,910	107.58
山形道	1,069,410	817,910	107.58
福島道	1,069,410	817,910	107.58
茨城道	1,069,410	817,910	107.58
栃木道	1,069,410	817,910	107.58
群馬道	1,069,410	817,910	107.58
千葉県	1,069,410	817,910	107.58
東京都	1,069,410	817,910	107.58
神奈川県	1,069,410	817,910	107.58
新潟道	1,069,410	817,910	107.58
富山道	1,069,410	817,910	107.58
石川道	1,069,410	817,910	107.58
福井道	1,069,410	817,910	107.58
山梨道	1,069,410	817,910	107.58
長野道	1,069,410	817,910	107.58
岐阜道	1,069,410	817,910	107.58
愛知県	1,069,410	817,910	107.58
三重道	1,069,410	817,910	107.58
滋賀道	1,069,410	817,910	107.58
京都府	1,069,410	817,910	107.58
大阪府	1,069,410	817,910	107.58
和歌山府	1,069,410	817,910	107.58
奈良府	1,069,410	817,910	107.58
徳島府	1,069,410	817,910	107.58
香川府	1,069,410	817,910	107.58
高松府	1,069,410	817,910	107.58
愛媛府	1,069,410	817,910	107.58
高知県	1,069,410	817,910	107.58
福岡府	1,069,410	817,910	107.58
佐賀府	1,069,410	817,910	107.58
熊本府	1,069,410	817,910	107.58
大分府	1,069,410	817,910	107.58
宮崎府	1,069,410	817,910	107.58
鹿児島府	1,069,410	817,910	107.58
沖縄府	1,069,410	817,910	107.58

の市街の性質が、工場・鑛山・炭坑・漁場・兵營等の所在地では、これが傾向は一府著しいのを普通とする。即ち昭和五年の國勢調査に於ける府部及び郡島部の男女數配偶關係を見ると、府部は郡島部に比し男超過率遙かに高く、また有配偶割合も府部の方が郡島部より幾分低いのである。しかしながら、朝鮮の市街は、未だ製造工業或は商業貿易等の旺盛ならざる爲め、概して郡部配偶關係の割合に大なる差異を認むる迄に至らず、その男女數に於ても、内地の工業都市や商業都市の如く男超過の割合が高くない。

郡部配偶關係別人口 (昭和五年國勢調査)

府部	計	未婚		有配偶		死別		離別		無配偶者 女百に付
		男	女	男	女	男	女	男	女	
府部	計	3,533,773	3,568,686	1,010,079	1,063,070	1,523,694	1,505,610	918	2,226	
郡島部	計	1,500,643	1,500,643	1,100,100	1,100,100	400,543	400,543	138	138	
總數	計	5,034,416	5,069,329	2,110,179	2,163,170	1,924,237	1,906,153	1,056	2,364	

特に男の多い地方と女の多い地方 多くの地方は男の數が女の數に超過して居るが、少數の例外として女の數

が男の數に超過せる地方も無きにあらず、その代表的のものとしては、高麗の末期以來、恰も内地の近江商人の如く、男が盛んに全鮮各地方に行商又は金貨として出掛ける京城道の開城府を擧げることが出来る。これに並いで女の超過せる地方としては、全羅南道の濟州島が有名であるが、同島は既に「東國輿地勝覽」にも女多男少など、誌されて居り、昔から女よりも男が少かつたものと見える。濟州島に於ては女が海女として活動せる結果、男よりも女の方が却つて稼ぎ高が多く、經濟的勢力が強かつたので、自然女の數が多いやうに調節されて來たのかも知れないが、近年の傾向としては、男の内地其他へ出稼の旺盛であることが、一層女超過の勢ひを大ならしめたものであると思はれる。珍島・莞島や、其他南鮮の多嶋海方面の沿海諸郡から島嶼一帯にかけても、女の超過せる地方が多いが、これも他の諸郡と同じく男の他道又は鮮外へ出稼の結果であらう。

女百人に對し男百人以上の府郡島 (昭和五年十月一日現在)

京畿道	京城府	110.1	仁川府	115.9	利川郡	110.3
忠清北道						
忠清南道						
全羅北道	群山府	113.0	金堤郡	110.2		
全羅南道	木浦府	118.8				
慶尙北道	蔚陵島	110.7				
慶尙南道						
黃海道						

年 齡 性 別	昭和五年		大正十四年	
	男	女	男	女
總 數	10,755,699	10,598,809	10,032,485	9,510,003
〇—一四	4,130,178	4,050,400	3,840,801	3,740,766
一五—一九	1,900,360	1,830,035	1,740,331	1,670,337
二〇—二四	2,850,977	2,770,335	2,650,436	2,570,006
二五—二九	2,850,977	2,770,335	2,650,436	2,570,006
三〇—三四	2,850,977	2,770,335	2,650,436	2,570,006
三五—三九	2,850,977	2,770,335	2,650,436	2,570,006
四〇—四四	2,850,977	2,770,335	2,650,436	2,570,006
四五—四九	2,850,977	2,770,335	2,650,436	2,570,006
五〇—五四	2,850,977	2,770,335	2,650,436	2,570,006
五五—五九	2,850,977	2,770,335	2,650,436	2,570,006
六〇—六四	2,850,977	2,770,335	2,650,436	2,570,006
六五—六九	2,850,977	2,770,335	2,650,436	2,570,006
七〇—七四	2,850,977	2,770,335	2,650,436	2,570,006
七五—七九	2,850,977	2,770,335	2,650,436	2,570,006
八〇—以上	2,850,977	2,770,335	2,650,436	2,570,006

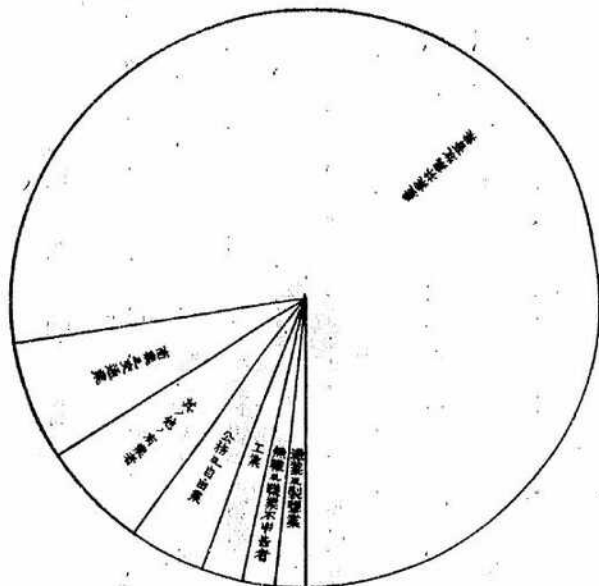
男女各歳別人口 昭和五年の國勢調査に係る各歳別の人口を見るに、總人口中遙かに男の数が女の數に超過せる關係上、零歳より五十八歳までの各年齢の人口は、男の数が女の數に超過して居るが、この年齢を境として

五十九歳以後は、女の数が男の數に超過して居る。各國共に産れる時は男が多いが、青年期頃に男女數が接近し、或は女の數が超過するものあり、晩年に至ると女子が男子より長命し、その數が男子の數に超過するを普通として居り、朝鮮では男子超過の年齢限界は五十八歳となつて居るのである。各歳別人口を見るに、十歳未満に在りては、四歳の人口數が三歳に比し減少大であり、六歳、七歳の人口も五歳八歳に比して少きに過ぐる。十歳以上二十歳未満に在りては、十一歳、十二歳のものが、その前後の年齢のものよりは遙かに少數であり、十五歳、十八歳のもの、少いのも眼につく。二十歳以上三十歳未満では、二十歳、二十三歳、二十六歳、二十八歳のものが特に少いの、人口の年齢構成上憂慮すべき傾向である。三十歳以上四十歳未満に於ても、三十一歳、三十七歳のものがその前後の年齢のものに比し著しく少い。これ等に就いては、その年齢階級の死亡數は勿論、遠くその出生數にも遡つて原因を研究せねばならぬが、朝鮮に於てはその資料を有しないのを遺憾とする。

男女各歳別人口 (昭和五年國勢調査)

年 齡 性 別	昭和五年		大正十四年	
	男	女	男	女
總 數	10,755,699	10,598,809	10,032,485	9,510,003
〇—一四	4,130,178	4,050,400	3,840,801	3,740,766
一五—一九	1,900,360	1,830,035	1,740,331	1,670,337
二〇—二四	2,850,977	2,770,335	2,650,436	2,570,006
二五—二九	2,850,977	2,770,335	2,650,436	2,570,006
三〇—三四	2,850,977	2,770,335	2,650,436	2,570,006
三五—三九	2,850,977	2,770,335	2,650,436	2,570,006
四〇—四四	2,850,977	2,770,335	2,650,436	2,570,006
四五—四九	2,850,977	2,770,335	2,650,436	2,570,006
五〇—五四	2,850,977	2,770,335	2,650,436	2,570,006
五五—五九	2,850,977	2,770,335	2,650,436	2,570,006
六〇—六四	2,850,977	2,770,335	2,650,436	2,570,006
六五—六九	2,850,977	2,770,335	2,650,436	2,570,006
七〇—七四	2,850,977	2,770,335	2,650,436	2,570,006
七五—七九	2,850,977	2,770,335	2,650,436	2,570,006
八〇—以上	2,850,977	2,770,335	2,650,436	2,570,006

職 業 別 人 口 割 合 昭和八年



公務及自由業	六〇二九六	二五八五	六七九	一六七〇
其の他の有業	五八五五	二九二四九七	一〇五	二九四〇五
無職及職業を申告しない者	六二八〇	九四五六〇	八九	一〇〇九元
計	一三五七〇七	三八〇五六四	一〇六五八	三九五二〇四九
備考	X印は臺灣人で内籍である。			

朝鮮全土の職業別構成の變遷を見るに、大正十三年末に比すると昭和八年末には、農業林業牧畜業の人口は百二十六萬一千餘人といふ大増加を示して居るが、その職業千分比例は八二・七四であつたものが七五・六七となり、實に四七・〇七の減少を來し、農家轉業傾向の著大なるを明かにしたのである。この十年間に公務及自由業は二十三萬七千餘人を増加し、その割合が二七・四〇より四〇・〇三になり、これに亞いで商業及交通業は十八萬四千餘人を増加し、その割合が六七・〇九より六七・一九となりたるに對比して、工業の僅に五萬七千餘人

を増加し、その割合が二四・九四より二四・四五に低下したる如きは、未だ製造工業發達の微々たるを示すもので、年々膨脹し行く人口の激増に對應する、有望にして安全なる産業の起らざる限り、年と共に没落の運命を辿らざるを得ない可憐なる下層農民は、何處に安住の地を求めることが出來やう。近年故郷を後に農家の男女が、潮の如く滿洲や内地に出で、或は都市に集中しつつあるは、冷眼に看過し難き問題である。

職業別人口 大正十三年末 昭和八年末 比較

職業別	世帯数		人口		増加		職業別人口千分比例
	大正十三年末	昭和八年末	大正十三年末	昭和八年末	世帯	人口	
農業林業牧畜業	三七五、〇六六	三、七〇五、〇九六	一、四〇、六三三	一、六三、二七一	一、五五、五五五	一、二二、七七一	二五・九七
漁業及製造業	四、〇三三	三、五五九	三、四〇、四三〇	三、三三、三九九	七、〇〇四	三、九五五	一・三〇
工業	六、七五五	一〇、八六七	四、五〇、六二九	五、〇八、七三七	一〇、〇三三	五、七六六	一四・四三
商業及交通業	三、四、四四一	三、七、四四三	一、三三、二五五	一、五八、六八四	三、五三三	二、四八六	六・四三
公務及自由業	二、三、二六六	一、六、七九七	四、四、〇〇八	八、三、七三七	三、九三〇	三、九三〇	二二・〇三
其の他の有業	二、九、八三三	三、九、四四三	四、四、〇〇八	一、三三、二五五	一、七、五五〇	七、八、五五〇	一八・六六
無職及職業不申告者	三、二、六九九	一〇、〇、六九九	三、〇、七〇三	三、三、八六一	四、一、一〇二	三、三、八六一	八・五三
計	一、〇〇、〇〇〇	三、七、〇〇〇	一、〇〇、〇〇〇	三、七、〇〇〇	一、〇〇、〇〇〇	三、七、〇〇〇	一〇〇

内鮮人の職業別人口 更に内鮮人に就いて、その職業別人口及びその割合を見ると左表の如くなつて居る。即ち内地人は公務及自由業の増加数が最も眼立ち、その割合も大に高まつて居り、これに亞いで商業及交通業が

幾分發展して居るが、農業、林業、牧畜業、及び工業の如きは殆んど進歩の云ふべきもの無く、漁業及製鹽業は却つて衰退して居る。朝鮮人は農業、林業、牧畜業の人口増加數百二十五萬八千人に垂んとして居るが、却つてその職業割合は減少し、其他の有業者が大に増加し、公務及自由業、商業及交通業等に於ても僅少の増加を示したに過ぎない。

内鮮人職業別人口比較

職業別	内地				朝鮮			
	大正十三年末	昭和八年末	大正十三年末	昭和八年末	大正十三年末	昭和八年末	大正十三年末	昭和八年末
農業・林業	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
牧畜業	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
漁業	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
製鹽業	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
工業	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
商業及交通業	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
公務及自由業	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
其他有業者	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
無職及職業不申告者	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
計	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000

各道職業別人口 職業別人口の大小増減を見るときは、一國一地方の産業文化の特色を窺ふの資料ともなるか

ら、左に各道職業別人口の大正十三年末と昭和八年末とを比較對照することとした。

各道職業別人口比較

道	職業別	大正十三年末		昭和八年末	
		人口	千人	人口	千人
京畿道	農業・林業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	牧畜業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	漁業及製鹽業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	工業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	商業及交通業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	公務及自由業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	其他有業者	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
忠清南道	農業・林業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	牧畜業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	漁業及製鹽業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	工業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	商業及交通業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	公務及自由業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	其他有業者	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
忠清北道	農業・林業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	牧畜業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	漁業及製鹽業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	工業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	商業及交通業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	公務及自由業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	其他有業者	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
全羅南道	農業・林業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	牧畜業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	漁業及製鹽業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	工業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	商業及交通業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	公務及自由業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	其他有業者	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
全羅北道	農業・林業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	牧畜業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	漁業及製鹽業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	工業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	商業及交通業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	公務及自由業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	其他有業者	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
釜山道	農業・林業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	牧畜業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	漁業及製鹽業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	工業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	商業及交通業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	公務及自由業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	其他有業者	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
慶尚南道	農業・林業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	牧畜業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	漁業及製鹽業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	工業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	商業及交通業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	公務及自由業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	其他有業者	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
慶尚北道	農業・林業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	牧畜業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	漁業及製鹽業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	工業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	商業及交通業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	公務及自由業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	其他有業者	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
黄海道	農業・林業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	牧畜業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	漁業及製鹽業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	工業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	商業及交通業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	公務及自由業	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000
	其他有業者	1,000,000	1,000	1,000,000	1,000

七、探鑛に従事する者	三、〇三	三、〇三	三、〇三	三、〇三	三、〇三	三、〇三	三、〇三	三、〇三	三、〇三
八、石油鑛業に従事する者	—	—	—	—	—	—	—	—	—
九、土石採取に従事する者	三、六五	三、六五	三、六五	三、六五	三、六五	三、六五	三、六五	三、六五	三、六五
一〇、窯業、土石加工に従事する者	一、八六五	一、八六五	一、八六五	一、八六五	一、八六五	一、八六五	一、八六五	一、八六五	一、八六五
一一、冶金工業、鑄造業、鍛冶業、機械工業に従事する者	三、〇〇五	三、〇〇五	三、〇〇五	三、〇〇五	三、〇〇五	三、〇〇五	三、〇〇五	三、〇〇五	三、〇〇五
一二、精巧工業に従事する者	三、四〇〇	三、四〇〇	三、四〇〇	三、四〇〇	三、四〇〇	三、四〇〇	三、四〇〇	三、四〇〇	三、四〇〇
一三、化学製品の製造に従事する者	一、四〇〇	一、四〇〇	一、四〇〇	一、四〇〇	一、四〇〇	一、四〇〇	一、四〇〇	一、四〇〇	一、四〇〇
一四、紡績工業に従事する者	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇
一五、被服、身製品製造に従事する者	四、八二五	四、八二五	四、八二五	四、八二五	四、八二五	四、八二五	四、八二五	四、八二五	四、八二五
一六、靴工業、印刷に従事する者	一、三〇〇	一、三〇〇	一、三〇〇	一、三〇〇	一、三〇〇	一、三〇〇	一、三〇〇	一、三〇〇	一、三〇〇
一七、皮革、骨、羽毛品製造に従事する者	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
一八、木竹草蓆類に属する製造に従事する者	九、〇〇〇	九、〇〇〇	九、〇〇〇	九、〇〇〇	九、〇〇〇	九、〇〇〇	九、〇〇〇	九、〇〇〇	九、〇〇〇
一九、製鹽に従事する者	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇
二〇、飲食料品、嗜好品製造に従事する者	四、二〇〇	四、二〇〇	四、二〇〇	四、二〇〇	四、二〇〇	四、二〇〇	四、二〇〇	四、二〇〇	四、二〇〇
二一、土木建築に従事する者	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇
二二、瓦斯電気、水道業に従事する者	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇
二三、其他の工業的職業	八、〇〇〇	八、〇〇〇	八、〇〇〇	八、〇〇〇	八、〇〇〇	八、〇〇〇	八、〇〇〇	八、〇〇〇	八、〇〇〇

二四、商業的職業	三、八〇〇	三、八〇〇	三、八〇〇	三、八〇〇	三、八〇〇	三、八〇〇	三、八〇〇	三、八〇〇	三、八〇〇
二五、金融保険に従事する者	六、七〇〇	六、七〇〇	六、七〇〇	六、七〇〇	六、七〇〇	六、七〇〇	六、七〇〇	六、七〇〇	六、七〇〇
二六、接客業に従事する者	一、六〇〇	一、六〇〇	一、六〇〇	一、六〇〇	一、六〇〇	一、六〇〇	一、六〇〇	一、六〇〇	一、六〇〇
二七、運輸業に従事する者	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇
二八、通信業に従事する者	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇
二九、官吏、公吏、雇傭員	六、六〇〇	六、六〇〇	六、六〇〇	六、六〇〇	六、六〇〇	六、六〇〇	六、六〇〇	六、六〇〇	六、六〇〇
三〇、陸海軍現役軍人	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇
三一、法務に従事する者	〇、〇〇〇	〇、〇〇〇	〇、〇〇〇	〇、〇〇〇	〇、〇〇〇	〇、〇〇〇	〇、〇〇〇	〇、〇〇〇	〇、〇〇〇
三二、教育に従事する者	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇
三三、宗教家	一、八二六	一、八二六	一、八二六	一、八二六	一、八二六	一、八二六	一、八二六	一、八二六	一、八二六
三四、醫業に従事する者	一、三〇七	一、三〇七	一、三〇七	一、三〇七	一、三〇七	一、三〇七	一、三〇七	一、三〇七	一、三〇七
三五、書記的職業	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇
三六、記者、著述家、藝術家、遊藝家	四、六六六	四、六六六	四、六六六	四、六六六	四、六六六	四、六六六	四、六六六	四、六六六	四、六六六
三七、其他の自由業	九、三三八	九、三三八	九、三三八	九、三三八	九、三三八	九、三三八	九、三三八	九、三三八	九、三三八
三八、家事使用人	三、〇七七	三、〇七七	三、〇七七	三、〇七七	三、〇七七	三、〇七七	三、〇七七	三、〇七七	三、〇七七

昭和五年の國勢調査に於ける職業別人口は右の通りであるが、更にこれを各道別に就いて見ると左表の如く
 なつて居り、各道の産業文化の特色が彷彿として窺はれるやうな心地がされ、なか／＼に興味が深い。

各道職業(大分類)別本業人口(昭和五年國勢調査)

職業	全道		北海道		東北道		関東道		中部道		近畿道		中国道		四国		九州		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
一、農	5,083,918	3,202,818	421,101	251,333	1,001,700	551,333	1,001,700	551,333	1,001,700	551,333	1,001,700	551,333	1,001,700	551,333	1,001,700	551,333	1,001,700	551,333	1,001,700
二、水産	9,717	4,717	1,171	717	1,171	717	1,171	717	1,171	717	1,171	717	1,171	717	1,171	717	1,171	717	1,171
三、礦業	3,043	1,043	1,043	1,043	1,043	1,043	1,043	1,043	1,043	1,043	1,043	1,043	1,043	1,043	1,043	1,043	1,043	1,043	1,043

職業	全道		北海道		東北道		関東道		中部道		近畿道		中国道		四国		九州			
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
四、工業	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	
五、商業	1,217	1,217	1,217	1,217	1,217	1,217	1,217	1,217	1,217	1,217	1,217	1,217	1,217	1,217	1,217	1,217	1,217	1,217	1,217	1,217
六、交通業	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017
七、公務、自由業	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017
八、家事使用人	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017
九、其の他の有業者	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017
一〇、無業者	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017	1,017

同上(續)

業種	慶尚南道		黄海道		平安南道		平安北道		江原道		咸鏡南道		咸鏡北道	
	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男
一、農 業	四六、六九	四六、六九	三六、六九	三六、六九	三六、六九	三六、六九	三六、六九	三六、六九	三六、六九	三六、六九	三六、六九	三六、六九	三六、六九	三六、六九
二、水産 業	一七、五三	一七、五三	一七、五三	一七、五三	一七、五三	一七、五三	一七、五三	一七、五三	一七、五三	一七、五三	一七、五三	一七、五三	一七、五三	一七、五三
三、鑛 業	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
四、工 業	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八
五、商 業	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八
六、交通 業	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八
七、公務、自由 業	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八
八、家事使用人	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八
九、其の他の有 業者	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八
一〇、無 業	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八

業種	本 府		郡		全 鮮	
	女	男	女	男	女	男
一、農 業	四六、六九	四六、六九	三六、六九	三六、六九	三六、六九	三六、六九
二、水産 業	一七、五三	一七、五三	一七、五三	一七、五三	一七、五三	一七、五三
三、鑛 業	一	一	一	一	一	一
四、工 業	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八
五、商 業	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八
六、交通 業	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八
七、公務、自由 業	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八
八、家事使用人	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八
九、其の他の有 業者	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八
一〇、無 業	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八

郡部別職業關係 都會地は商業及交通業、工業、公務及自由業等が多く、村落は農業及林業、水産業、鑛業等が多いのを普通とするが、また本業有業者と本業無業者とに分ちて見ると、本業有業者は府部に於ては郡島部より割合が低く、無業者の割合が高い。而して本業無業者中に在りても、牧人に依る者、學生々徒其他は府部に於て遙かに高くなつて居る。また女百に付男の本業有業者も府部が著しく高いのである。

府郡島別本業有業者及本業無業者別人口 (昭和五年國勢調査)

本 業 有 業 者	本 府		郡		全 鮮	
	男	女	男	女	男	女
本 業 有 業 者	五三、七六	五三、七六	四三、〇〇	四三、〇〇	四三、〇〇	四三、〇〇
本 業 無 業 者	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八	一、八八
計	五五、六四	五五、六四	四四、八八	四四、八八	四四、八八	四四、八八

業種	總數		各性別人口千中	
	男	女	男	女
本業	5,255	3,600	2,750	2,850
無業者	1,600	1,100	850	750
總計	6,855	4,700	3,600	3,600

本業有業者及本業無業者千分比

業種	總數		各性別人口千中	
	男	女	男	女
本業有業者	5,255	3,600	2,750	2,850
無業者	1,600	1,100	850	750
總計	6,855	4,700	3,600	3,600

世帯別構成

一戸當平均人口 朝鮮の社會組織には舊時代の面影を残して居るものが多く、特に地方村落に同族の集團生活を

せる同族部落が夥しく存在し居り、また一家の構成に於ても大家族制度の遺風が到る所に見受けられる。朝鮮最古の地理書たる「慶尙道地理誌」や、古い時代の戸口記録及び戸籍などを見ると、随分一家の家族数の多いのがあるが、現在でも尙ほ大世帯の家が珍らしくない。昭和八年末の總人口二千七十九萬一千三百二十一人を總戸數三百九十五萬二千四十九戸に比例して見ると、一戸當人口は平均五・三人にして、其の割合は大體に於て朝鮮、中鮮は五・〇人以上であるが、北鮮は六・〇人に近いものが多い。また内地人、朝鮮人、外國人別に一戸當人口を見ると、内地人は四・〇人、朝鮮人は五・三人、外國人は四・〇人で、内地人は南鮮に於て、朝鮮人、外國人は中鮮より北鮮にかけて一戸當人口が多い。更に府部と郡部に分ちて見ると、府部は一戸當四・七人なるに對し、郡部は五・三人で、概して邊陲の地方が一戸當人口が多くなつて居り、大家族制の片鱗はこれに依りても窺はれる。

各道一戸當人口(昭和八年)

道	内地人	朝鮮人	外國人	平均
京畿道	4.3	5.2	4.6	5.2
忠清北道	3.8	5.4	3.1	5.3
忠清南道	4.0	5.4	3.4	5.3
全羅北道	4.0	5.1	3.5	5.1
全羅南道	4.2	5.0	3.3	5.0
慶尙北道	4.3	5.3	3.6	5.3

廣 南 道	四・一	五・二	三・四	五・二
黃 海 道	三・七	五・一	三・五	五・一
平 安 南 道	四・一	五・三	四・四	五・三
平 安 北 道	三・四	五・六	四・四	五・三
江 原 道	三・五	五・四	二・六	五・四
咸 鏡 南 道	三・六	五・八	三・七	五・七
咸 鏡 北 道	三・五	五・八	三・六	五・六
總 計	四・〇	五・三	四・〇	五・三

世帯別總數及人口 試みに昭和五年の國勢調査に依り、その普通世帯の世帯別總數並に人口數を示せば左の如く
 なくなつて居り、十人以上三十人の世帯數が甚だ多く、三十一人以上の大世帯も九十三を算して居る。

普通世帯の世帯別總數及人口表 (昭和五年國勢調査)

世 帯 數	人 口		普 通 世 帯 千 中
	男	女	
一 人 世 帯	三,九七,二二一	三,九七,二二一	一,〇〇〇
二 人 世 帯	一〇,四一,八二五	一〇,四一,八二五	三,一
三 人 世 帯	三,四三,三三三	三,四三,三三三	九,九
四 人 世 帯	五,七〇,四七七	五,七〇,四七七	一六,九
五 人 世 帯	九,九八,八八二	九,九八,八八二	二七,八
六 人 世 帯	六,七五,八八五	六,七五,八八五	一七,八
七 人 世 帯	一,〇〇,〇〇〇	一,〇〇,〇〇〇	二,八
八 人 世 帯	一,〇〇,〇〇〇	一,〇〇,〇〇〇	二,八
九 人 世 帯	一,〇〇,〇〇〇	一,〇〇,〇〇〇	二,八
十 人 世 帯	一,〇〇,〇〇〇	一,〇〇,〇〇〇	二,八
十 人 乃 至 十 五 人 世 帯	一,〇〇,〇〇〇	一,〇〇,〇〇〇	二,八
十 六 人 乃 至 二 十 人 世 帯	一,〇〇,〇〇〇	一,〇〇,〇〇〇	二,八
二 十 一 人 乃 至 二 十 五 人 世 帯	一,〇〇,〇〇〇	一,〇〇,〇〇〇	二,八
二 十 六 人 乃 至 三 十 人 世 帯	一,〇〇,〇〇〇	一,〇〇,〇〇〇	二,八
三 十 一 人 乃 至 三 十 五 人 世 帯	一,〇〇,〇〇〇	一,〇〇,〇〇〇	二,八
三 十 六 人 乃 至 四 十 人 世 帯	一,〇〇,〇〇〇	一,〇〇,〇〇〇	二,八
四 十 一 人 乃 至 四 十 五 人 世 帯	一,〇〇,〇〇〇	一,〇〇,〇〇〇	二,八
四 十 六 人 乃 至 五 十 人 世 帯	一,〇〇,〇〇〇	一,〇〇,〇〇〇	二,八
五 十 一 人 以 上 の 世 帯	一,〇〇,〇〇〇	一,〇〇,〇〇〇	二,八

六 人 世 帯	一,〇〇,〇〇〇	一,〇〇,〇〇〇	二,八
七 人 世 帯	一,〇〇,〇〇〇	一,〇〇,〇〇〇	二,八
八 人 世 帯	一,〇〇,〇〇〇	一,〇〇,〇〇〇	二,八
九 人 世 帯	一,〇〇,〇〇〇	一,〇〇,〇〇〇	二,八
十 人 世 帯	一,〇〇,〇〇〇	一,〇〇,〇〇〇	二,八
十 人 乃 至 十 五 人 世 帯	一,〇〇,〇〇〇	一,〇〇,〇〇〇	二,八
十 六 人 乃 至 二 十 人 世 帯	一,〇〇,〇〇〇	一,〇〇,〇〇〇	二,八
二 十 一 人 乃 至 二 十 五 人 世 帯	一,〇〇,〇〇〇	一,〇〇,〇〇〇	二,八
二 十 六 人 乃 至 三 十 人 世 帯	一,〇〇,〇〇〇	一,〇〇,〇〇〇	二,八
三 十 一 人 乃 至 三 十 五 人 世 帯	一,〇〇,〇〇〇	一,〇〇,〇〇〇	二,八
三 十 六 人 乃 至 四 十 人 世 帯	一,〇〇,〇〇〇	一,〇〇,〇〇〇	二,八
四 十 一 人 乃 至 四 十 五 人 世 帯	一,〇〇,〇〇〇	一,〇〇,〇〇〇	二,八
四 十 六 人 乃 至 五 十 人 世 帯	一,〇〇,〇〇〇	一,〇〇,〇〇〇	二,八
五 十 一 人 以 上 の 世 帯	一,〇〇,〇〇〇	一,〇〇,〇〇〇	二,八

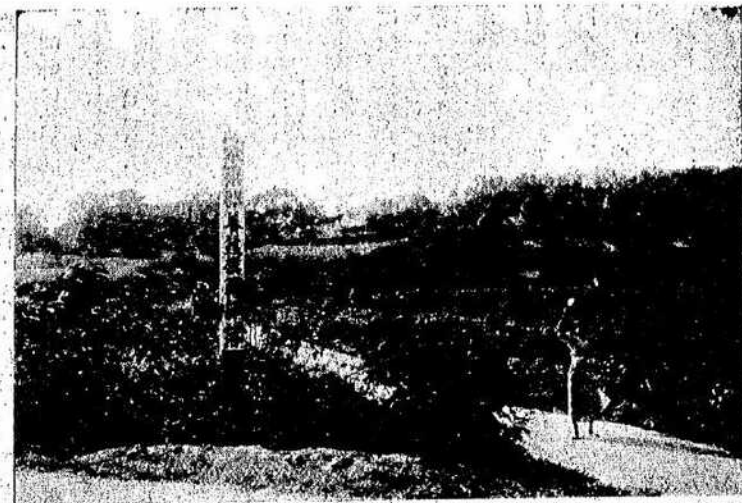
大家族制度の遺風 更に各道に就いて世帯別の總數を見るに左の如くなつて居り、大家族制度の遺風たる大世帯の各地に多數に存在せることが出来、家族制度の研究上海に興味が深い。

普通世帯の種類別世帯及人口 (昭和五年國勢調査)

京 畿 道	一人世帯	二人世帯	三人世帯	四人世帯	五人世帯	六人世帯	七人世帯	八人世帯	九人世帯	十人世帯
	二,三三	七,七〇	六,四〇	七,一〇	六,七五	五,一〇	三,九〇	二,六〇	一,五〇	一,〇〇

横川面 六〇〇 徳岐面 六〇五 高原郡内面 六〇四 永洞面 六〇六 山谷面 六〇六 雲谷面 六〇六 文川郡
 雲林面 六〇二 徳源郡豊上面 六〇九 洪原郡平浦面 六〇三 北青郡佳會面 六〇五 星傳面 六〇二 瑞川郡福貴
 面 六〇四 新滿面 六〇六 水下面 六〇六 利中面 六〇三 廣泉面 六〇五 南斗日面 六〇四 北斗日面 六〇六
 新興郡下元川面 六〇〇 長津郡上南面 六〇七 中南面 六〇六 舊邑面 六〇九 新南面 六〇五 北面 六〇三 東
 下面 六〇五 豊山郡里仁面 六〇六 熊耳面 六〇九 安水郡 六〇四 安山面 六〇四 天南面 六〇三 三水郡
 三南面 六〇六 邑館面 六〇七 別東面 六〇六 好仁面 六〇三 三西面 六〇〇 館興面 六〇三 甲山郡山南面
 六〇六 會麟面 六〇五
 成鏡北道 鏡城郡梧村面 六〇三 龍城面 六〇九 朱乙温面 六〇〇 朱北面 六〇四 朱南面 六〇五 明川郡西面 六〇六
 上勢北面 六〇六 上勢南面 六〇五 阿間面 六〇七 吉州郡鳴軒面 六〇六 長白面 六〇三 城津郡鶴城面 六〇九
 鶴上面 六〇〇 鶴西面 六〇五 富寧郡富居面 六〇五 觀海面 六〇五 三海面 六〇七 連川面 六〇〇 石碓面
 六〇七 西上面 六〇一 茂山郡漁下面 六〇五 豐溪面 六〇三 永北面 六〇三 西下面 六〇七 會寧郡花豐面
 六〇二 八乙面 六〇七 碧城面 六〇一 鳳儀面 六〇八 昌斗面 六〇五 龍興面 六〇六 鍾城郡豊谷面 六〇三
 古邑面 六〇七 龍溪面 六〇九 華方面 六〇五 穩城郡永忠面 六〇六 永九面 六〇六 美浦面 六〇九 慶源郡
 安慶面 六〇五 東源面 六〇六 龍德面 六〇四 有徳面 六〇九 慶興郡上下面 六〇六

由來朝鮮に於ては同族の扶養救済の風が強いので、兩班富豪などの家には、同族中の貧困者の寄食せるもの
 が數人乃至數十人に達せるものも極めて多いから、これ等家族以外の同居者、又は附屬家屋内に住居せるもの
 の多いことも、大家族制度の存在と共に、見落してはならないことである。而してこの同族の扶養救済は、自
 然兩班富豪を頼りて一族の集中を來し、所謂同族部落を形成するに至り、今日に於けるが如き、朝鮮特有の同
 族集團の發達を招來したものと見ることが出來やう。



水原郡安龍橋木川里

二、人口の分布

人口分布の疎密は、氣候、地味、産業、文化等に影響
 され、大體に於て、その多い地方は文化が發達し、經濟
 も進歩して居り、その少い地方は文化が幼稚であり、經
 濟も進んで居らぬものとされて居る。従つて朝鮮の人口
 分布が、各地方とも近年次第に濃密を加へつゝあること
 は云ふ迄もない。その結果として、到る處の都市及び村
 落が發達を來し、その分布數も大に増加し、近時に至り
 新しく形成せられたる市街や部落も尠くない。

村落

村落の種類形態 人類は生存の必要から、群居して社會
 共同生活を営む習慣を有し、従つて民家は一定地域に散
 居又は集團して部落を構成する。多數の部落を總稱して
 村落とも稱するが、部落の或るものは、次第に人口の集
 中を來して民家の増加を見、更に産業、商店、市場、金

融・行政・警察・教育・衛生・信仰・娯樂等の諸機關の施設と相俟つて、遂に市街に發達するのである。

朝鮮に於てはその住民の大部分が農業に従事する關係上、人口は多く地方村落に分布して居る。村落には、産業の上より、農業を主とする農村部落、漁業又は半農半漁の漁村部落、火田民の聚落たる火田部落、鑛山所在地の鑛山部落、溫泉所在地の溫泉部落等あり、同じ農村部落中にも、その性質より分類して、同族一門の集團たる同族部落、自治營農等に特色ある模範部落、移住民の集團せる移民部落、市場所在地の市場部落、新しく勃興せる新興部落、特殊の階級又の職業を有するもの、聚落たる特殊部落(舊白丁、僧侶、巫女、在家僧)この外に、寺院聚落、迷信聚落、驛村、水營聚落、兵營聚落、鎮營聚落、山城聚落などがある。更に位置より見て、都市附近の郊外村落、島嶼部落、沿海部落、沿河部落、山間部落、國境に形成されたる國境部落等あり、地勢に依る分類としては、高原聚落、臺地聚落、丘陵地聚落、平地聚落、盆地聚落、低地聚落、鑿谷聚落、濕地聚落、池沼聚落などの各種の村落がある。またこれ等の村落を形態に依りて分類すると、集村、散村、路村などがあるが、朝鮮に於ける村落は、同族部落の多い關係上、民家の密集せる所謂集村に屬するものが甚だ多く、新開地以外に在りては民家の所々に散在せる散村に屬するものは比較的少いのを特色として居る。路村も舊邑内を始め市場・驛院などの所在地に多く、それが或は單線に、或は複線に、或は格子狀に、或は基盤狀に發達して居る。(拙著「朝鮮の村落」参照)

村落の地勢別大小 村落の大小はその位置・地勢・産業・交通等に依りて、それと大小があるが、臨時土地調査局に於て、集團部落を調査せる資料を基礎に分類した、地勢別部落戸數は左の如くなつて居る。

地勢別部落戸數表

地勢	調査したる面數				計
	一五〇戸以上	一〇〇戸以上 六〇戸未満	三〇戸以上 六〇戸未満	一〇戸未満	
平野	三	四	四	一	一六
鐵道沿線	二	一	一	一	五
沿海地	二	一	一	一	五
山地	一	一	一	一	四
山間	一	一	一	一	四
總計	三三	一三	七	三	五六

右の部落の比率を見るに、十戸以上三十戸未満の四二・四%が第一位を占め、三十戸以上六十戸未満の二七・八%がこれに次ぎ、十戸未満の一五・九%、六十戸以上百戸未満の九・七%、百戸以上百五十戸未満の二・九%、百五十戸以上の二・三%となつて居る。右は大正四五年頃の調査であるが、その後に至り鐵道の開通したるもの多く、産業も亦發達し、人口の増加を見て居るので、村落戸口も膨脹充實したものが多く、中には當時の寒村にして小市街地を形成して居るものもあるから、一部部落の戸口數は相當に増加して居るものと見ねばならぬ。尙ほ拙著「朝鮮の人口現象」には、大正十四年の簡易國勢調査結果に基き、各府面の人口密度を算出し、その密度圖を複製し、更に地勢別の人口密度を、都市、平野、河川流域、沿海地方、山地帯、島嶼、鐵道沿線に分ちて綿密に記述し、人口分布の地理的特色を説明してある。



市街地

市の日蔚の邑

市街地の種類 朝鮮に於ては、古來農を以て國を立て、現に全人口の約八割が農業に従事して居る關係上、人口は多く地方農村に散在し、従つて大都會・市街地少く、内地の市に相當するものは、京城・仁川・開城・群山・木浦・大邱・釜山・馬山・平壤・鎮南浦・新義州・元山・咸興・清津の十四府に過ぎず、内地の町に相當するものには近く府に昇格すべき大田・全州・光州及び將來大發展を約束されて居る羅津を始め五十一の邑がある。この外にも新舊の市街があり、併合當時と今日とを比較すると、各市街共、人口數に於ても、街衢の體裁に於ても、商取引高に於ても、面目を一新して居る。

朝鮮の市街地は、概して消費的都邑にして、商工業の殷盛を極めて居る所は少數である。しかしながら、近時産業の發達、交通の進歩に伴ひ、地方都邑の經濟力も著

しく膨脹して居る。市街地の主なるものに就き大體の分類をして見ると、李朝以來商業地として發達した都邑は、僅に開城のみにして、政治的關係によりて發達したる都邑には、京城・水原・浦州・公州・全州・光州・大邱・慶州・東萊・晋州・海州・平壤・義州・春川・咸興・會寧を始め、李朝時代より道廳・郡廳所在地たりし邑内と稱する市街がある。貿易によりて發達した古い都邑としては、釜山、義州、會寧があり、新しくは、仁川・元山・群山・木浦・馬山・鎮南浦・清津・城津・雄基・龍巖浦を數へ、羅津は敦圖線の終端港と決定して以來速かに有名となり、新興の活氣に燃えて居る。李朝時代より驛院及び市場の所在地で市街を成したものは、場・市・院の名稱が残つて居るが、近時鐵道の開通によりて急速に發展したる都邑としては、永登浦・天安・烏致院・大田・金泉・裡里・松汀里・新幕・沙里院・新義州・鐵原・上三峯・南陽を算し、前記の貿易港以外に、漁業の根據地として發展した都邑として、麗水・南海・三千浦・統營・長承浦・方魚津・甘浦・九龍浦・浦項等があり、鎮海は嬰港、羅南は師團、兼二浦は製鐵所、勝湖里・川内里はセメント工場、寺洞は炭坑、北鎮は金鑛、載寧は鐵鑛、興南は窒素工業會社の所在地として最近發達した都邑である。近來平壤附近は鑛業及び製造工業の勃興に依り戸口の激増を見つゝあるが、また咸興地方も、窒素工業・水力電氣・その他諸工業の勃興によりて一大發展を來し、その奥地の松興里・下碣隅里の如きも、水力電氣事業關係にて、永安は褐炭・低溫乾留工業にて、この數年來戸口の増加が著しく、京城附近の永登浦も、皮革・麥酒工業等により將來の發展が期待されて居る。この外、東萊・溫陽・信川・朱乙・溫井里・海雲臺・白川・陽徳の如きは溫泉地として市街地を形成し、更に近年に及び都會地の發展と、鐵道の開通・水利事業の普及・鑛山の開掘・漁業の

備考 一、印あるは鐵道の概ある市街地にして、その數百三十六箇所に及ぶ。
 一、地勢の分類中、眞高百米以上を高地に入れ、高地に屬するものに在りても河の影響強きものは滑河に入れてある。
 一、市街は大體人口三千以上の所を採り、人口三千以下にても交通物産などの關係上、重要と認むべきものはその中に加へてある。

人口の分布

行政區劃 人口は通常の場合村落及び市街地に分布するが、これが行政區劃としては、道の下に府・郡・島あり、更にその下に邑面あり邑面の下には多數の町洞里有る。現在の道は一三、府は一四、郡は二二八、島は二、邑は五一、面は二、三七四にして、府邑面の下に屬する町洞里數は二八、三五三に達して居る。

各道行政區劃表 (昭和九年四月一日現在)

道名	所在地	面積	府	郡	島	邑	面	洞里(町)
京畿道	京城	八三	三	三	一	二	二	二、七〇〇
忠清北道	清州	四〇	一	一〇	一	二	二	一、五〇〇
忠清南道	大田	三六	一	四	一	二	二	一、五〇〇
全羅北道	全州	三三	一	四	一	二	二	一、八三三
全羅南道	光州	九〇	一	三	一	二	二	一、八〇〇
慶尙北道	大邱	二二	一	三	一	二	二	一、五〇〇
慶尙南道	釜山	七六	二	七	一	二	二	二、五〇〇
黃海道	海州	一〇八	一	七	一	二	二	二、〇〇〇
平安南道	平壤	九六	一	七	一	二	二	一、九〇〇
平安北道	新義州	一八〇	一	九	一	二	二	一、四〇〇
江原道	春川	一七五	一	三	一	二	二	一、九〇〇
咸鏡南道	咸興	二〇五	一	六	一	二	二	二、五〇〇
咸鏡北道	羅先	一三九	一	二	一	二	二	一、七〇〇
合計		一、四三三	一四	三六	一三	二五	二五	一、六五三

府邑面の人口區分 更に昭和五年の國勢調査に基き、行政區劃の單位たる府邑面の人口區分を示すと左表の通りである。即ち人口二萬人以上の府及び邑面は四八に達し、一萬五千人以上二萬人未満のもの六七、一萬人以上一萬五千人未満のもの三五九も大なる方であり、最も多いものは四千人以上一萬人未満の諸階級であるが、小さいものとしては三千人未満の一三、三千人以上四千人未満の七一がある。

府邑面人口區分表 (昭和五年十月一日現在)

道名	府	邑面	合計
京畿道	三、〇〇〇	三、〇〇〇	六、〇〇〇
忠清北道	一、〇〇〇	一、〇〇〇	二、〇〇〇
忠清南道	一、〇〇〇	一、〇〇〇	二、〇〇〇
全羅北道	一、〇〇〇	一、〇〇〇	二、〇〇〇
全羅南道	一、〇〇〇	一、〇〇〇	二、〇〇〇
慶尙北道	一、〇〇〇	一、〇〇〇	二、〇〇〇
慶尙南道	一、〇〇〇	一、〇〇〇	二、〇〇〇
黃海道	一、〇〇〇	一、〇〇〇	二、〇〇〇
平安南道	一、〇〇〇	一、〇〇〇	二、〇〇〇
平安北道	一、〇〇〇	一、〇〇〇	二、〇〇〇
江原道	一、〇〇〇	一、〇〇〇	二、〇〇〇
咸鏡南道	一、〇〇〇	一、〇〇〇	二、〇〇〇
咸鏡北道	一、〇〇〇	一、〇〇〇	二、〇〇〇
合計	一三、〇〇〇	一三、〇〇〇	二六、〇〇〇

府郡	面積(方)	昭和五年人口總數	大正十四年人口總數	五箇年間の増減數(△は減)	五箇年間の増加割合(△は減)	人口密度(方付)	人口増減府・邑・面數
全道	三、八三、三七七	三、一七、四三三	三、一〇、九一八	一、八、五一五	六・五	一、六、八	※一
全羅北道	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一
全羅南道	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一
慶尙北道	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一
慶尙南道	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一
黃海道	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一
平安南道	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一
平安北道	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一
江原道	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一
咸鏡南道	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一
咸鏡北道	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一

府郡島の人口分布 人口の分布は、各府郡島の地勢・氣候・産業・都邑・交通・文化等の關係によりて、その疎密の状態を異にするものであるが、特に朝鮮の現状に於ては一般的に人口分布の濃密を來す有力なる原因は、鐵道の關係である。

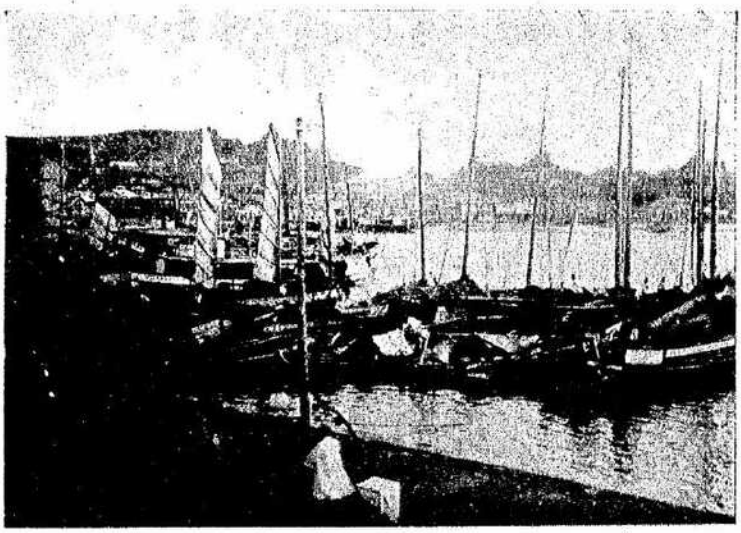
試みに昭和五年の國勢調査に基き、各府郡島の面積、人口總數、人口密度、人口増減數、人口増減割合、人口増減府邑面數を示せば左の如くなつて居る。即ち概して市街地及びその接續地は人口増減數及び人口密度多く、人口の増加割合も高く、府・邑の區域は著しく膨脹し、またその隣接面の人口も急激に増加して居る。これに並いで工業地、温泉、金礦、炭坑、港灣、漁港の所在地、水利事業發利區域、新に鐵道の開通し又は鐵道の便ある地方等は、人口密度も高く、また人口の増加割合も大である。

府郡	面積(方)	昭和五年人口總數	大正十四年人口總數	五箇年間の増減數(△は減)	五箇年間の増加割合(△は減)	人口密度(方付)	人口増減府・邑・面數
全道	三、八三、三七七	三、一七、四三三	三、一〇、九一八	一、八、五一五	六・五	一、六、八	※一
京城府	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一
仁川府	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一
開陽府	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一
高陽府	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一
廣州府	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一
楊州府	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一
漣川府	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一
抱川府	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一
加平府	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一
楊平府	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一
揚州府	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一
利川府	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一
龍仁府	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一
安城府	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一
振威府	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一
水原府	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一
始興府	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	一

これに反して、人口増加せる邑面に比し人口減少せる邑面の多い郡島も相當にあり、これ等の地方は概して純農村に多いが、近年農家の疲弊困難甚だしく、農民は相並いで都會地に出で、勞働に従事し、或は内地又は滿洲に移住出稼し、若くは山地帯に分け入りて火田民に化するといふ有様である。

例年旱害及び水害などのありたる後には、農民の離村するものが多いのを常とするが、特に昭和九年の如きは未曾有の旱害並に水害を蒙りたる爲め、當局の斡旋により滿洲や北鮮地方への團體的移住もあつたけれども、また一方には、所定めぬ流民の數も夥しくあり、従つてその被害地域に於ける人口數は頓に減少して居ること、推測される。

京畿道 人口分布状態一覽表 (國勢調査)



(横須賀港) 著るな名統る 港漁

郡名	人口	人口	人口	人口	人口	人口	人口	人口	人口
錦山郡	56,555	73,621	70,775	2,676	7,717	2,676	7,717	2,676	7,717
茂朱郡	55,222	51,753	50,555	1,198	3,097	1,198	3,097	1,198	3,097
長水郡	53,555	53,555	53,555	0	0	0	0	0	0
任實郡	52,555	47,621	47,621	4,934	4,934	4,934	4,934	4,934	4,934
南原郡	47,621	47,621	47,621	0	0	0	0	0	0
淳昌郡	46,621	46,621	46,621	0	0	0	0	0	0
井邑郡	45,621	45,621	45,621	0	0	0	0	0	0
高敞郡	44,621	44,621	44,621	0	0	0	0	0	0
扶安郡	43,621	43,621	43,621	0	0	0	0	0	0
金堤郡	42,621	42,621	42,621	0	0	0	0	0	0
沃溝郡	41,621	41,621	41,621	0	0	0	0	0	0
益山郡	40,621	40,621	40,621	0	0	0	0	0	0
全羅南道	2,676,555	2,676,555	2,676,555	0	0	0	0	0	0
木浦府	2,676,555	2,676,555	2,676,555	0	0	0	0	0	0
光州郡	2,676,555	2,676,555	2,676,555	0	0	0	0	0	0
潭陽郡	2,676,555	2,676,555	2,676,555	0	0	0	0	0	0
谷城郡	2,676,555	2,676,555	2,676,555	0	0	0	0	0	0
求禮郡	2,676,555	2,676,555	2,676,555	0	0	0	0	0	0
光陽郡	2,676,555	2,676,555	2,676,555	0	0	0	0	0	0

安州郡	平原郡	江原郡	龍岡郡	中和郡	江東郡	成川郡	陽德郡	孟山郡	順川郡	大川郡	鎮南府	平壤府	全南府	谷山郡	遂安郡	瑞興郡	鳳山郡	黃州郡
六,八七	九,四六	七,五〇	七,四七	七,四七	六,八七	一,五五	一,四九	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇
一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇
一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇
一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇

漢城	信川郡	安岳郡	股栗郡	松禾郡	長淵郡	慶津郡	新漢郡	平川郡	金川郡	延白郡	海州郡	全南府	陝川郡	居昌郡	咸陽郡	山清郡	河東郡	南海郡
七,九〇	七,九〇	六,九〇	四,九〇	七,九〇	一,〇〇	六,九〇	六,九〇	六,九〇	六,九〇	六,九〇	六,九〇	六,九〇	六,九〇	六,九〇	六,九〇	六,九〇	六,九〇	六,九〇
一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇
一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇
一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇	一,〇〇



北	利	新	長	豐	三	甲	全	清	鏡	明	吉	城	富	茂	會	鐘	樓
青	原	川	津	山	水	山	管	津	城	川	州	津	寧	山	寧	城	城
郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	府	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡
三,八〇〇,七〇七	四,〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,一〇〇,〇〇〇	三,〇〇〇,〇〇〇	二,九〇〇,〇〇〇	二,八〇〇,〇〇〇	二,七〇〇,〇〇〇	二,六〇〇,〇〇〇	二,五〇〇,〇〇〇	二,四〇〇,〇〇〇	二,三〇〇,〇〇〇	二,二〇〇,〇〇〇	二,一〇〇,〇〇〇	二,〇〇〇,〇〇〇	一,九〇〇,〇〇〇	一,八〇〇,〇〇〇	一,七〇〇,〇〇〇
一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇
二,八〇〇,〇〇〇	三,〇〇〇,〇〇〇	三,一〇〇,〇〇〇	三,二〇〇,〇〇〇	三,三〇〇,〇〇〇	三,四〇〇,〇〇〇	三,五〇〇,〇〇〇	三,六〇〇,〇〇〇	三,七〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,九〇〇,〇〇〇	四,〇〇〇,〇〇〇	四,一〇〇,〇〇〇	四,二〇〇,〇〇〇	四,三〇〇,〇〇〇	四,四〇〇,〇〇〇	四,五〇〇,〇〇〇	四,六〇〇,〇〇〇
六,八〇〇	六,八〇〇	六,八〇〇	六,八〇〇	六,八〇〇	六,八〇〇	六,八〇〇	六,八〇〇	六,八〇〇	六,八〇〇	六,八〇〇	六,八〇〇	六,八〇〇	六,八〇〇	六,八〇〇	六,八〇〇	六,八〇〇	六,八〇〇
九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九
八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八

原	橫	洪	華	金	鐵	平	伊	全	元	成	成	定	永	高	文	德	安	洪
州	城	川	川	化	原	康	川	管	山	興	州	平	興	原	川	原	邊	原
郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	府	府	府	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡
三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇
一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇
三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇
六,八〇〇	六,八〇〇	六,八〇〇	六,八〇〇	六,八〇〇	六,八〇〇	六,八〇〇	六,八〇〇	六,八〇〇	六,八〇〇	六,八〇〇	六,八〇〇	六,八〇〇	六,八〇〇	六,八〇〇	六,八〇〇	六,八〇〇	六,八〇〇	六,八〇〇
七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七
八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八



慶源郡	八、六〇三	三、三三三	六、二七〇	三、〇〇〇	三、二七〇	六、〇〇〇	一	一
興那郡	一、〇〇〇	三、〇〇〇	四、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	一	一

備考 一、察印のある郡は、自大正十四年至昭和五年の期間中其の區域の一部に變更ありたるも、大正十四年調査當時に於ける區域の人口により増減比較をなしたるものである。

- 一、京畿道開豊郡の大正十四年の人口は舊開城郡より松都面の人口を控除したものである。
- 二、察印のある府・邑・面数は前項と同事情にあるものを示し、且其數字は内書である。
- 三、人口増減府・邑・面中、行政區劃變更の爲め増減を比較すること能はざるものを調査不能項目に計上してある。

府部及郡部の人口 凡そ都會地と村落とは、その人口密度、男女數、配偶關係、年齡階級、職業等、人口状態を異にするものである。現在朝鮮に於ける市街中、内地の市に相當する府は僅に十四箇所に過ぎないが、府部と郡島部との人口數、男女別、及びその千分比等を見ると左の如くなつて居り、朝鮮の人口の大部分は郡島部に分布し、都市人口の極めて少きことが明かにされて居る。また府部は郡島部に比して遙かに男超過の割合の高いことも判るであらう。

府部及郡島部別人口 (昭和五年國勢調査)

府部	人口總數		府部島人口千分比		府部男女別人口		女百に付男
	府部	郡部	府部	郡部	男	女	
全 鮮	一、〇八、七五五	一、九六、八三〇	一、〇〇・〇	一、〇〇・〇	一、〇〇・〇	一、〇〇・〇	一〇〇・〇
京 畿 道	一、〇八、七五五	一、九六、八三〇	一、〇〇・〇	一、〇〇・〇	一、〇〇・〇	一、〇〇・〇	一〇〇・〇
忠 清 北 道	一、〇八、七五五	一、九六、八三〇	一、〇〇・〇	一、〇〇・〇	一、〇〇・〇	一、〇〇・〇	一〇〇・〇

尚ほ朝鮮の邑は現在總數五十一に達し、その中には近く府に編入されるものもあり、將來有力なる市街地として發展するものも相當にあるが、最近數年間に於ける人口都市集中の勢ひは急激であり、産業の勃興も亦大に見るべきものがあるから、邑の經濟力並に人口状態も、自然重要視するに至つたのである。

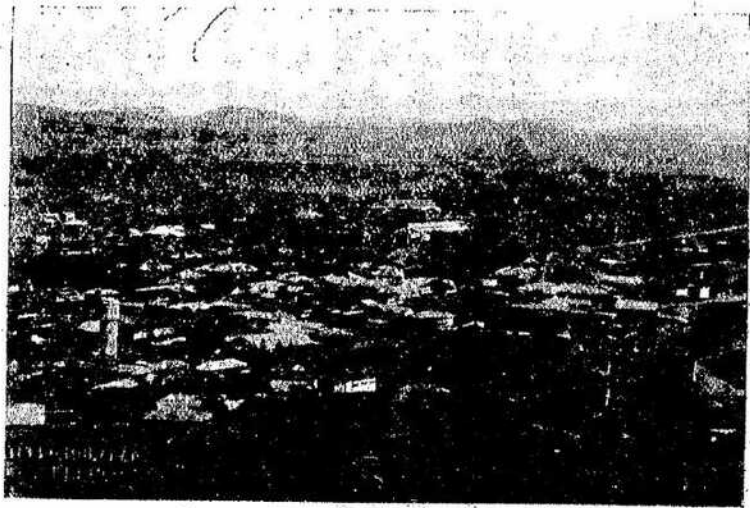
各道の人口密度

人口の密度は、人口分布の状態に依りて自ら疎密を生ずるものであるが、試みに昭和八年末に於ける人口の密度を見ると、二方針に付九四・二人で、内地に於ける昭和八年の一七五・九人に比較すると、其の約半數であるが、内地の各統計區劃に就いて見ると、人口の最も稀薄な北海道の約三倍に當つて、東北區と略ぼ相等し

いのである。しかしながら、他の各區に對しては約二分の一乃至四分の一にしか當らず、朝鮮の人口密度は、内地に比して著しく低いのである。

人口の密度は地方に依つて甚だ不同であるが、概して南鮮は密で北鮮は疎である。即ち人口の最も稠密なのは慶尙南道の一七二・六人で、忠清南道の一七一・八人、全羅北道、京畿道の一六九・五人、全羅南道の一六四・四人等は慶尙南道の密度に近く、遙かに降つて慶尙北道の一三三・六人、忠清北道の一七・八人等は相次いで人口稠密な方である。最も稀薄なのは咸鏡北道の三六・五人で、咸鏡南道の四八・三人、平安北道の五四・七人、江原道の五五・〇人、平安南道の九〇・〇人、黄海道の一〇・八人等の如き亦人口の稀薄な方である。更に各道に於ける人口密度の最近二十年間に於ける消長を見ると左の如くなつて居る。

各道人口密度比較表



平 地 に 發 展 せ る 温 陽 温 泉

道別	世帯		人口		一世帯當人口		一方軒に付人口	
	大正三年末	昭和十三年末	大正三年末	昭和十三年末	大正三年末	昭和十三年末	大正三年末	昭和十三年末
京畿道	25,813	33,445	1,048,813	1,677,327	40.6	49.9	1,048,813	1,677,327
忠清北道	14,141	18,915	700,000	880,000	49.5	46.5	700,000	880,000
忠清南道	33,261	43,800	1,010,191	1,471,881	30.3	33.5	1,010,191	1,471,881
全羅北道	33,261	43,800	1,010,191	1,471,881	30.3	33.5	1,010,191	1,471,881
全羅南道	33,261	43,800	1,010,191	1,471,881	30.3	33.5	1,010,191	1,471,881
慶尙北道	33,261	43,800	1,010,191	1,471,881	30.3	33.5	1,010,191	1,471,881
慶尙南道	33,261	43,800	1,010,191	1,471,881	30.3	33.5	1,010,191	1,471,881
黄海道	33,261	43,800	1,010,191	1,471,881	30.3	33.5	1,010,191	1,471,881
平安南道	33,261	43,800	1,010,191	1,471,881	30.3	33.5	1,010,191	1,471,881
平安北道	33,261	43,800	1,010,191	1,471,881	30.3	33.5	1,010,191	1,471,881
江原道	33,261	43,800	1,010,191	1,471,881	30.3	33.5	1,010,191	1,471,881
咸鏡南道	33,261	43,800	1,010,191	1,471,881	30.3	33.5	1,010,191	1,471,881
咸鏡北道	33,261	43,800	1,010,191	1,471,881	30.3	33.5	1,010,191	1,471,881
計	33,261	43,800	1,010,191	1,471,881	30.3	33.5	1,010,191	1,471,881

人口密度の消長 尙ほ國勢調査の結果に基き、各道の世帯・人口・人口増加・人口密度等を、大正十四年と昭和五年を比較して見ると左の如くなつて居り、人口増加数は全羅南道を第一位とし、人口増加率は咸鏡北道が首位を占め、人口密度は全羅北道・慶尙南道・忠清南道・京畿道・全羅南道等の順位になつて居る。

各道世帯・人口・人口増加・人口密度調 (國勢調査)

道	面積		世帯		人口		増加		人口密度	
	昭和五年	大正十四年	昭和五年	大正十四年	昭和五年	大正十四年	昭和五年	大正十四年	昭和五年	大正十四年
全 鮮	3,075,400	2,945,000	2,700,000	2,500,000	23,000,000	21,000,000	0.0076	0.0072	7.6	7.2
京 畿 道	2,383,200	2,300,000	2,100,000	2,000,000	18,000,000	17,000,000	0.0076	0.0074	7.6	7.4
忠 清 北 道	7,477,600	7,400,000	1,600,000	1,500,000	12,000,000	11,000,000	0.0016	0.0015	1.6	1.5
忠 清 南 道	8,900,000	8,800,000	2,000,000	1,900,000	15,000,000	14,000,000	0.0022	0.0021	2.2	2.1
全 羅 北 道	8,800,000	8,700,000	1,800,000	1,700,000	13,000,000	12,000,000	0.0020	0.0019	2.0	1.9
全 羅 南 道	13,800,000	13,700,000	3,000,000	2,900,000	22,000,000	21,000,000	0.0022	0.0021	2.2	2.1
慶 尙 北 道	18,600,000	18,500,000	4,000,000	3,900,000	28,000,000	27,000,000	0.0021	0.0020	2.1	2.0
慶 尙 南 道	16,500,000	16,400,000	3,500,000	3,400,000	24,000,000	23,000,000	0.0021	0.0020	2.1	2.0
黃 海 道	6,500,000	6,400,000	1,500,000	1,400,000	10,000,000	9,000,000	0.0023	0.0022	2.3	2.2
平安北道	26,400,000	26,300,000	6,000,000	5,900,000	40,000,000	39,000,000	0.0023	0.0022	2.3	2.2
平安南道	26,400,000	26,300,000	6,000,000	5,900,000	40,000,000	39,000,000	0.0023	0.0022	2.3	2.2
江 原 道	6,500,000	6,400,000	1,500,000	1,400,000	10,000,000	9,000,000	0.0023	0.0022	2.3	2.2
咸 鏡 南 道	3,500,000	3,400,000	800,000	750,000	5,000,000	4,500,000	0.0023	0.0022	2.3	2.2
咸 鏡 北 道	3,500,000	3,400,000	800,000	750,000	5,000,000	4,500,000	0.0023	0.0022	2.3	2.2

内地と朝鮮との人口密度比較 朝鮮に於ける各道人口密度の地位を知る爲め、試みに内地と朝鮮との人口密度の類似地方を、昭和五年の國勢調査によつて比較すると、内地の統計區劃に對しては次の如くなつて居る。

京 畿 道 (一六七・九)	中國區 (一六九)
忠 清 南 道 (一七〇・七)	東山區 (一三三)
全 羅 南 道 (一六七・九)	四國區 (一七六)
忠 清 北 道 (一一一・四)	
全 羅 北 道 (一七六・三)	
慶 尙 南 道 (一七三・六)	
慶 尙 北 道 (一七三・六)	
忠 清 南 道 〓 滋賀縣 (一七二)	鹿兒島縣 (一七二)
全 羅 北 道 〓 和歌山縣 (一七六)	栃木縣 (一七七)
慶 尙 北 道 〓 長野縣 (一二六)	
慶 尙 南 道 〓 徳島縣 (一七三)	
黃 海 道 〓 青森縣 (九一)	
平安南道	

而して朝鮮に於て人口密度の最も稀薄な咸鏡北道(三六六)と雖も、内地に於ける北海道(三三三)よりは人口密度が稍高率を示して居り、朝鮮の中部以南は現在の産業状態を以てしては、既に人口の飽和状態に進んで居るのである。



別荘の多い大い川海水浴場

即ち各道に於ける郡島の人口密度を見るに、京畿・忠北・全北・慶北・慶南の五道には一方糶五〇人未滿の郡は一もなく、忠南・全南の二道には一〇〇人未滿の郡もない。概して京畿以南の南鮮諸道には一〇〇人以上一五〇人未滿及び一五〇人以上二〇〇人未滿の郡が多く、二〇〇人以上三〇〇人未滿の郡は京畿・忠北にはなく、忠南・全北・全南・慶南に多い。黃海以西、江原以北には一五〇人以上二〇〇人未滿の郡は殆んどなく、五〇人未滿及び五〇人以上一〇〇人未滿の郡が多い。従つてこれ等の人口稀薄なる諸郡は山地帯に多く、従つてその郡の管轄區域は頗る廣汎に互り、茂山郡の六、一六五方糶、江界郡の五、四〇三方糶、長津郡の五、一三方糶、豐山郡の三、九二五方糶、甲山郡の三、七四七方糶、鏡城郡の三、〇六〇方糶、端川郡の二、八一五方糶、厚昌郡の二、四二八方糶、醴川郡の二、三六五方糶、北青郡の二、三八四方糶等の如きは、面積廣大なる郡である。大正十四年對昭和五年郡島別人口増減圖を見ても、西北鮮地方の人口稀薄なる山地帯の人口増加の著大なることが明瞭となつて居るが、近時北鮮開拓專業の進捗に依りて、これ等の山地帯は大に開發せられ、鐵道・道路等も開通し火田民の定着、産業の勃興を見つつあるを以て、將來その人口状態は一變するであらう。



上流家庭の婚禮式場

三、婚 姻・離 婚

婚姻數と婚姻率

婚姻數の減少 朝鮮の婚姻慣習に關しては拙著「朝鮮の人口現象」に詳述してあるが、婚姻數の多少は人口増加率の大小に直接の原因を有するから、累年の趨勢に就いて冷靜なる考察をせねばならぬ。先づ試みに大正十三年以降の内地人、朝鮮人、外國人の婚姻實數、並に平均婚姻率を示せば左表の如くなつて居り、昭和元年より昭和四年までは、年々婚姻率は遞増して居たが、昭和五年以降は婚姻率が減少し、殊に昭和七年及び同八年に於て、その激減を見て居るのは注目すべき現象と謂はねばならぬ。人口上の通則として、婚姻數の減退は、男女結婚適齡期の人口割合の減少、晩婚傾向の發現、及び不景氣又は生活難に原因する所が大であるとせられて居るから、

朝鮮に於ける最近の婚姻減少の趨勢は、社會問題としても亦深く考察せねばならぬことであり、この婚姻率の減少が、總ては出生率にも直接に影響するものと見ねばなるまい。

婚姻率の低下 米産額が農業生産の主體を爲し、國民生活の難易が主として米の豊凶に依りて決せらる、朝鮮に於ては、大體婚姻率も出生率も、米産額及び市場取引の多少と殆んど並行又は雁行して、増減して居ることを「朝鮮の人口現象」に於て明かにしたが、昭和八年の如き米産額の未曾有の増加せる年に、最近十年間に未だ見ざる婚姻率の低下を示せることは、米産額の増加割合以上に、米價の極端なる下落を來し、また其他種々の原因に依り、一般民衆の生活難が深刻化し、或は青年男女の移住出稼を盛んならしめ、或は教育の進歩や婦人労働の爲めに晩婚傾向の發現となり、若くは結婚費の調達不能や妻子の扶養困難の爲め、延いてこれが婚姻率に顯著なる影響を及ぼしたものである。

婚姻實數並に婚姻率の十箇年比較

年	婚姻實數			計	婚姻率 (人口千に付)
	内地人	朝鮮人	外國人		
大正十三年	二二三	一五四八〇	三	一五五九三	八・六三
同十四年	二一八	一七〇六六	八	一七二五八	九・〇六
昭和元年	二二八	一六七四〇	五	一六八五九	八・八三
同二年	二二七	一七四六三	三	一七五九三	九・一九
同三年	二三五	一九二八六	一四	一九〇五五	一〇・〇七
同四年	一五四	一九七三三	八	一九四二五	一〇・〇五

年	内地人	朝鮮人	外國人	計	離婚率 (人口千に付)
大正十三年	一六八三	一九七五三	三五	一九九二一	九・八四
同十四年	一八六四	一八二七五	一九	一八四五九	九・〇二
同十五年	二二七四	二八三五六	一八	三〇五五〇	六・三三
同十六年	二二四〇	二四四八〇	一九	二六六四〇	六・〇九

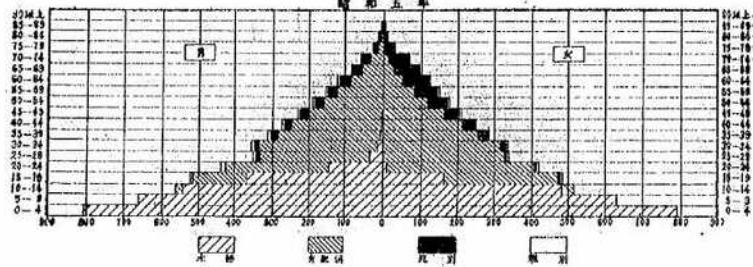
離婚數と離婚率

離婚實數 大體に於て離婚の多少は婚姻の多少に伴ふもので、最近十年間に就いて見るに、大正十三年以降昭和五年までは離婚數は増加して居たが、昭和六年以後は婚姻數の減少に基因して離婚數も亦著しく減少し、昭和五年の離婚率は〇・四五であつたものが、昭和八年には〇・二八に降つて居る。

離婚實數並に離婚率の十箇年比較

年	離婚實數			計	離婚率 (人口千に付)
	内地人	朝鮮人	外國人		
大正十三年	一三九	七〇四	三	七二七	〇・四〇
同十四年	一〇一	七六〇	一	七七一	〇・四二
昭和元年	二一五	六九八	一	七二二	〇・三八
同二年	二二	六九一	一	七一三	〇・三七
同三年	二二九	八二二	四	八三五	〇・四四
同四年	二五八	八〇二	七	八二七	〇・四三
同五年	一七八	八八四	五	九〇七	〇・四三
同六年	一九五	七八六	二	八〇三	〇・四〇
同七年	一六三	六五四	一	六七八	〇・三三
同八年	一二五	五七七	一	五八七	〇・二八

年齢及配偶関係別人口
(昭和五年)



離婚率 離婚率の算出には、前記の如く人口を標準とする場合と、婚姻数を標準とする場合とあり、理論上は後者を以て正確とされて居るから、参考の爲め離婚率を左に表出した。これに據ると朝鮮人に比し内地人の離婚率は著しく高位であることが明かであるが、この算出法に従ふと概して朝鮮人の離婚率は最近十年間に寧ろ幾分増加の傾向あり、これに反して内地人の方は著しく減少を示して居るのは、抑も何事を暗示して居るのであらうか。須らく吟味すべき事柄である。

婚姻千に對する離婚率

年	内地人	朝鮮人
大正十三年	二・四七	四・四六
同十四年	三・三三	四・四六
昭和元年	三・三三	四・四六
同二年	三・三三	四・四六
同三年	三・三三	四・四六
同四年	三・三三	四・四六
同五年	三・三三	四・四六
同六年	三・三三	四・四六
同七年	三・三三	四・四六
同八年	三・三三	四・四六

年齢別配偶關係

配偶關係別人口 婚姻及び離婚の状態を研究する上に於ても、將來の出生

率を測定する上に於ても、年齢別の配偶關係を見ることは極めて大切なことに屬する。昭和五年の國勢調査結果表に基き、大正十四年と昭和五年の配偶關係別人口を見ると左表の如くなつて居り、各性人口千に付、男は未婚が第一位にして、有配偶これに亞ぎ、女は有配偶が最も多く、未婚が第二位となつて居る。昭和五年に於ては大正十四年に比し男女共に未婚の割合が多くなつて居るが、男に比し女の有配偶數が特に増加して居るのは注目すべき現象で、この中には、勿論夫の朝鮮外へ出稼して居るものもあるけれども、その大部分は、朝鮮特有の蓄妾制度の存在に依り、妾が妻として有配偶者に取扱はれて居る結果であると信するから、その數の増加は決して欣ぶべき傾向でない。また配偶者に死別せるもの、男よりも女の方が遙かに多いことは、李朝時代には寡婦の再嫁が禁せられて居つたので、その習慣の力が今も尙ほ残存せることを示すものであると認められる。更に配偶者に離別せるものは、大正十四年に比し昭和五年に於て、女の方が著しく減少し、これに反し男の方が幾分増加して居るのは、面白い現象であるまいか。

配偶關係別人口調 (昭和五年國勢調査)

配偶關係別	昭和五年		大正十四年	
	男	女	男	女
未婚	10,457	11,407	11,407	10,457
有配偶	10,457	11,407	11,407	10,457
死別	10,457	11,407	11,407	10,457
離婚	10,457	11,407	11,407	10,457

年齢及び配偶関係人口 尙ほ年齢及び配偶関係人口の大正十四年と昭和五年とのものを掲げ、以て男女別に各

年齢階級の未婚、有配偶、死別、離別等の消長を窺ふに便したいと思ふ。

年齢及配偶關係別人口 (昭和五年國勢調査)

年齢階級	未婚		有配偶		死別		離別		計
	男	女	男	女	男	女	男	女	
10歳	1,000	1,000	0	0	0	0	0	0	2,000
14歳	1,000	1,000	0	0	0	0	0	0	2,000
15歳	1,000	1,000	0	0	0	0	0	0	2,000
20歳	1,000	1,000	0	0	0	0	0	0	2,000
25歳	1,000	1,000	0	0	0	0	0	0	2,000
30歳	1,000	1,000	0	0	0	0	0	0	2,000
35歳	1,000	1,000	0	0	0	0	0	0	2,000
40歳	1,000	1,000	0	0	0	0	0	0	2,000
45歳	1,000	1,000	0	0	0	0	0	0	2,000
50歳	1,000	1,000	0	0	0	0	0	0	2,000
55歳	1,000	1,000	0	0	0	0	0	0	2,000
60歳	1,000	1,000	0	0	0	0	0	0	2,000
65歳	1,000	1,000	0	0	0	0	0	0	2,000
70歳	1,000	1,000	0	0	0	0	0	0	2,000
75歳	1,000	1,000	0	0	0	0	0	0	2,000
80歳	1,000	1,000	0	0	0	0	0	0	2,000
以上	1,000	1,000	0	0	0	0	0	0	2,000
計	14,000	14,000	0	0	0	0	0	0	28,000

年齢及配偶關係別人口 (大正十四年簡易國勢調査)

年齢階級	未婚		有配偶		死別		離別		計
	男	女	男	女	男	女	男	女	
10歳	1,000	1,000	0	0	0	0	0	0	2,000
14歳	1,000	1,000	0	0	0	0	0	0	2,000
15歳	1,000	1,000	0	0	0	0	0	0	2,000
20歳	1,000	1,000	0	0	0	0	0	0	2,000
25歳	1,000	1,000	0	0	0	0	0	0	2,000
30歳	1,000	1,000	0	0	0	0	0	0	2,000
35歳	1,000	1,000	0	0	0	0	0	0	2,000
40歳	1,000	1,000	0	0	0	0	0	0	2,000
45歳	1,000	1,000	0	0	0	0	0	0	2,000
50歳	1,000	1,000	0	0	0	0	0	0	2,000
55歳	1,000	1,000	0	0	0	0	0	0	2,000
60歳	1,000	1,000	0	0	0	0	0	0	2,000
65歳	1,000	1,000	0	0	0	0	0	0	2,000
70歳	1,000	1,000	0	0	0	0	0	0	2,000
75歳	1,000	1,000	0	0	0	0	0	0	2,000
80歳	1,000	1,000	0	0	0	0	0	0	2,000
以上	1,000	1,000	0	0	0	0	0	0	2,000
計	14,000	14,000	0	0	0	0	0	0	28,000

年齢別配偶關係比率 以上は大正十四年と昭和五年の男女各年齢階級の配偶關係であるが、更にこれが比率

を對照して見ると左表の通りである。この比率中特に注目し値するものは、男女共に十四歳未満及び十五歳以上十九歳未満の年齢階級に於ける有配偶数が、いづれも減少して居ることである。若し夫れ朝鮮に於ける結婚上の一大弊害たる早婚の風が、僅に五年後に斯くの如く減少の傾向を辿つて居るとせば、洵に驚異すべき事實であるが、われ等は、この數字を見て、直ちに早婚慣習の減少と速断してはならない。即ち大正十四年の調査では、一歳未満一四歳の有配偶男二・女四、五歳一四歳の有配偶男二七・女六九、十歳の有配偶男六九・

女一、七一五、十一歳の有配偶男一、九三七・女四、一六二、十二歳の有配偶者男五、五五〇・女一〇、六四〇の多きに達し、従つてこれ等の年齢階級の配偶者に死別離別せるものも相當にあつたのである。然るに昭和五年の國勢調査に於ては、十二歳以下の有配偶者が何故か一も計上されて居らず、また大正十四年の調査では、六十歳以上の未婚者は男二、四三八、女七〇九、計三、一四七に達して居たのであるが、それが昭和五年には男七三、女一三二計八六三に激減して居るのは、實に腑に落ちないことである。今日の法定婚姻年齢は、男満十七歳女満十五歳であるが、朝鮮の民俗としては事實上、十二歳以下の婚姻は甚だ多く、また男超過の上に、婚姻慣習が貧困者の妻帯に不利なると、不具癡疾者の多い關係上、六十歳以上の未婚男子は相當に多いのである。されば朝鮮に於ける幼年者及び老年者の配偶關係を見るものは、婚姻慣習と性的行爲とを直ちに混同して考へてはならない。早婚の利弊は別として、儼然と存する社會上の事實は、何人の力を以てしても抹削することは不可能であるから、次回の國勢調査に於て右の重大なる疑問が氷解する、に至らんことを希望する。

年齢及配偶關係別人口割合 (各性人口千に付)

年齢	昭和五年		大正十四年		昭和五年		大正十四年	
	男	女	男	女	男	女	男	女
十歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
十一歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
十二歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
十三歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
十四歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
十五歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
十六歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
十七歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
十八歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
十九歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
二十歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000

年齢	昭和五年		大正十四年		昭和五年		大正十四年	
	男	女	男	女	男	女	男	女
三十歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
三十一歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
三十二歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
三十三歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
三十四歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
三十五歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
三十六歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
三十七歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
三十八歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
三十九歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
四十歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
四十一歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
四十二歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
四十三歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
四十四歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
四十五歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
四十六歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
四十七歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
四十八歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
四十九歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
五十歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
五十一歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
五十二歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
五十三歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
五十四歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
五十五歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
五十六歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
五十七歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
五十八歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
五十九歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
六十歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
六十一歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
六十二歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
六十三歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
六十四歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
六十五歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
六十六歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
六十七歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
六十八歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
六十九歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
七十歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
七十一歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
七十二歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
七十三歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
七十四歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
七十五歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
七十六歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
七十七歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
七十八歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
七十九歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
八十歳	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
各性別	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
總計	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000

地方別婚姻率・離婚率

道別婚姻率 各道別に就いて最近五年間の婚姻率並に離婚率を見ると左表の如くなつて居る。大體に於て朝鮮の各道中、婚姻率の最も高い地方は、全鮮で最も男女数の均衡を保つて居る黄海道にして、咸鏡南道・江原道・平安北道・咸鏡北道等も高い方に屬して居る。その最も低い地方は、男の移住出稼の最も盛んなる全羅南道にして、慶尙南道・慶尙北道・忠清南道・全羅北道等も低い方に屬して居る。これに依りて見ると、概して

文化の低い人口密度の疎なる經濟力の發達しない、西北鮮地方に婚姻率が高く、これに反して文化の進み經濟力の發達して人口密度の高い南鮮地方に、婚姻率の低いことが窺はれるが、これは西北鮮地方が比較的人口の移動性少きに反し、南鮮地方は青年階級の人口の移住出稼が多いことに原因して居ることが大であり、またその地方の經濟生活の難易も婚姻率に影響して居ると見ねばならぬ。

道別離婚率 離婚率は全體婚姻数の多少に比例するものであるが、その最も高い地方は黃海道にして、京城府を包有する京畿道、及び平安南道・平安北道は他道に比し遙かに高い。累年の傾向として離婚率は概して減少して居るが、前述の如き事情もあるので、未だ遙かに男女道徳發達の結果と斷することは出来ない。

道別婚姻率並に離婚率五箇年對照表

道	婚姻率 (人口千に付)					離婚率 (人口千に付)				
	昭和四年	同五年	同六年	同七年	同八年	昭和四年	同五年	同六年	同七年	同八年
京 畿 道	九・五五	九・五五	九・六	九・七	九・七	〇・四	〇・四	〇・四	〇・四	〇・四
忠 清 北 道	三・三	三・三	三・三	三・三	三・三	〇・六	〇・六	〇・六	〇・六	〇・六
忠 清 南 道	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三	〇・六	〇・六	〇・六	〇・六	〇・六
全 羅 北 道	八・四	八・四	八・四	八・四	八・四	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三
全 羅 南 道	九・六	九・六	九・六	九・六	九・六	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三
全 道	九・六	九・六	九・六	九・六	九・六	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三
慶 尙 北 道	一〇・九	一〇・九	一〇・九	一〇・九	一〇・九	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三
慶 尙 南 道	一〇・三	一〇・三	一〇・三	一〇・三	一〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三
黃 海 道	一〇・八	一〇・八	一〇・八	一〇・八	一〇・八	〇・五	〇・五	〇・五	〇・五	〇・五

内地の婚姻率 試みに内地に就いて見ると、有澤廣己氏著「本邦人口統計論」に據れば、自昭和二年至昭和五年の平均に於て、婚姻率の高い府縣と婚姻率の低い府縣は左の如くなつて居る。

婚姻率の高い府縣		婚姻率の低い府縣	
富 山 縣	一〇・一六	新 潟 縣	九・〇五
福 井 縣	九・五七	青 島 縣	九・〇四
秋 田 縣	九・四一	香 川 縣	八・九九
石 川 縣	九・四〇	滋 賀 縣	八・九〇
沖 繩 縣	九・一九	德 島 縣	八・七八
東 京 府	六・二八	神 奈 川 縣	七・五三
大 阪 府	六・三七	長 崎 縣	七・五九
京 都 府	七・一三	宮 崎 縣	七・六五
兵 庫 縣	七・三二	長 野 縣	七・六六

即ちこの数字によつて見れば、概して北陸地方が婚姻率高く、六大都市の所在地、及び北海道、宮崎等の如き移住民の多い地方や、長野、長崎等の如き青年階級の出入の多い地方に婚姻率が低いことが明かにされて居る。尙ほ参考の爲め、昭和六年に就いて、朝鮮と各種民地との婚姻率並に離婚率を比較して見よう。

朝鮮	婚姻率	離婚率
朝鮮	九・〇二	〇・四〇
樺太	六・二〇	〇・五七
臺灣	八・八四	〇・八一
關東州及滿鐵附屬地	五・〇八	〇・一二
南洋	一〇・八二	二・八五

備考 朝鮮に於ては昭和七・八年は婚姻率も離婚率も共に非常に下つて居る。

内鮮外人別の婚姻・離婚

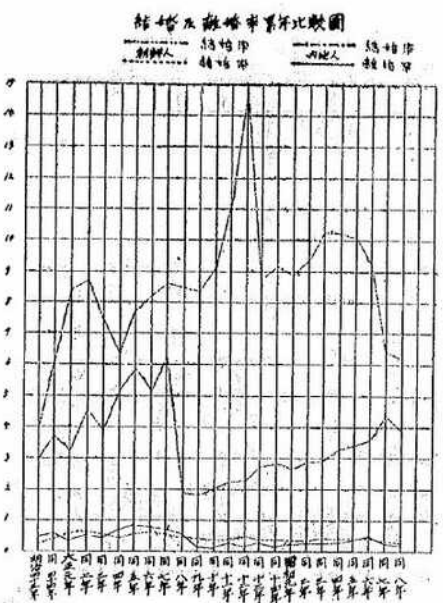
内鮮外人別婚姻率・離婚率 婚姻率に就いて、内地人と朝鮮人とを比較すると、移住出稼の多い内地人よりは土着の朝鮮人の方が遙かに高いが、内地人に在りても近年婚姻率が次第に高まりつゝ、あるは、定性性を示した欣ぶべき傾向であると思はれる。外國人の大部分は、獨身の労働者及び商業や農業に従事せる中華民國人並に滿洲國人である爲め、その婚姻率の低いのは當然である。内地と朝鮮との婚姻率を比較すると、年に依りて兩

者高低一樣ならざるも、昭和七年以後は朝鮮の方が低位を示して居る。朝鮮に於ける離婚率は、朝鮮人よりも内地人の方が幾分低い、これは婚姻数が少い爲めで、婚姻數に對する離婚率は、内地人の方が遙かに高くなつて居る。概して内地に比し朝鮮の離婚率が低いことは、朝鮮の婚姻制度上に於ける特殊の事情に基くもので注目すべき現象であるが、同時に離婚の少い代りに、女子の本夫殺罪及び自殺の多いことも看過してはならない事實である。近來は朝鮮の婦人間に、男性に對する貞操蹂躪、夫に對する離婚訴訟が大に増加し、社會思想の變化と教育の進歩とに依り、婚姻及び離婚に對する女子の權利擁護の念が發達し、離婚に依りて家庭の桎梏を脱し、夫の暴戾に抗せんとする傾向が漸く濃厚になりつゝ、あるから、將來は離婚件數の増加を見ると共に一方婦人の自殺や本夫殺罪が自然に減少し行くものと推測される。

内鮮外人別婚姻率・離婚率

年	朝鮮の婚姻率(人口千に付)		内地		朝鮮の離婚率(人口千に付)		内地	
	内地人	朝鮮人	内地人	朝鮮人	内地人	朝鮮人	内地人	朝鮮人
大正十三年	二・五	八・七	〇・〇	八・六	〇・三	〇・四	〇・三	〇・八
同十四年	二・七	九・七	〇・七	八・七	〇・四	〇・四	〇・四	〇・九
昭和元年	三・六	八・九	〇・二	八・三	〇・六	—	〇・六	〇・九
同二年	三・八	九・七	〇・五	七・九	〇・六	—	〇・七	〇・九
同三年	三・九	一〇・六	〇・六	八・四	〇・六	〇・六	〇・七	〇・九
同四年	三・三	一〇・六	〇・三	七・七	〇・三	〇・三	〇・三	〇・八

年	同八年	同七年	同六年	同五年
同八年	三・五五	三・四〇	三・三〇	三・二五
同七年	六・六六	六・四〇	六・三〇	六・二五
同六年	〇・五五	〇・四〇	〇・三〇	〇・二五
同五年	〇・五五	〇・四〇	〇・三〇	〇・二五



繁風の幾分か改まりたることも數へ得べく、教育熱の普及と、勤勞生活者の増加に伴ひ、一般男女の婚姻年齢が次第に遅くなりたる結果もあらうが、また一面には、移住出稼或は生活困難に依りて、結婚の出来ないもの

見ると、内地人に在りて、婚姻率の減少せるは、京畿道・平安北道の二道にして、其他の諸道は婚姻率が増加して居り、離婚率は黄海道・平安北道・江原道の不明を除き、全羅北道・慶尙南道・咸鏡南道・咸鏡北道が増加し、其他の諸道は減少して居る。朝鮮人に在りては、各道共に婚姻率が減少し、その減少率の大なるものとしては、忠清北道・忠清南道・全羅南道・慶尙北道・平安南道・平安北道・江原道等を挙げ得る。而してこれが重なる理由は、早婚の

が多くなつたことも、與つて力あるものであるまいか。離婚率は婚姻の減少に伴ひて自然に減少して居るが、全羅北道だけは極めて少しの増加を見て居る。

道別内鮮人別婚姻率・離婚率 (人口千に付)

道	内地人		朝鮮人	
	婚姻率	離婚率	婚姻率	離婚率
京畿道	四・六	〇・六	九・〇	〇・五
忠清北道	三・五	〇・二	三・三	〇・六
忠清南道	三・九	〇・七	二・七	〇・六
全羅北道	三・六	〇・三	八・九	〇・五
全羅南道	三・七	〇・三	七・八	〇・五
慶尙北道	三・八	〇・三	三・八	〇・四
慶尙南道	三・七	〇・三	三・八	〇・四
黄海道	三・六	〇・三	八・五	〇・四
平安南道	三・五	〇・三	六・〇	〇・三
平安北道	三・四	〇・三	六・〇	〇・三
江原道	三・三	〇・三	二・八	〇・三
咸鏡南道	三・二	〇・三	七・〇	〇・三
咸鏡北道	三・一	〇・三	七・〇	〇・三
平均	三・三	〇・三	六・六	〇・三

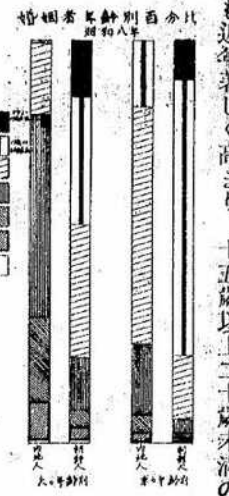
婚姻並に離婚年齢

男子の婚姻年齢 男子の婚姻年齢を見るに、内地人は二十五歳以上三十歳の婚姻が最も多く、大正三年と同十三年と昭和八年とを比較して見ると次第にその割合が高くなり、十七歳以上二十歳未満及び二十歳以上二十五歳未満の婚姻率は次第に低くなり、漸次晩婚傾向が顯著となりつゝある。朝鮮人は十七歳以上二十歳未満の婚姻が最も多く、昭和八年には二十歳以上二十五歳未満の婚姻が第一位を占め幾分婚姻年齢が高まりつゝある傾向が窺はれるが、内地人に比すると一階級乃至三階級婚姻年齢が低く、昭和八年には十七歳未満の婚姻實数が二萬七千四百四十一に及び、大正十三年に比し遙かに増加を示して居る。

婚姻年齢別調

年齢	内地人				朝鮮人			
	大正十三年	昭和八年	大正十三年	昭和八年	大正十三年	昭和八年	大正十三年	昭和八年
十七歳未満	1,000	2,741	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
十七歳以上二十歳未満	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
二十歳以上二十五歳未満	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
二十五歳以上三十歳未満	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
三十歳以上	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000

女子の婚姻年齢 女子の婚姻年齢に在りては、内地人は二十歳以上二十五歳未満の婚姻が最も多く、その割合も近年著しく高まり、十五歳以上二十歳未満の婚姻が漸次減少して晩婚傾向が濃厚に現はれつゝある。朝鮮人は十五歳以上二十歳未満の婚姻が最も多く、その割合も次第に高まりつゝあり、その反對に二十歳以上二十五歳未満及び二十五歳以上三十歳未満の婚姻が減少しつゝある。茲に注意すべきは大正三年に相當多かつた十五歳未満の婚姻が、大正十三年には激減して居るに拘らず、最近に至り大に増加し、



昭和八年のその實数は一萬二千三百十件になつて居るに徴し、一方に晩婚傾向が現はれ來りたるその反面に、早婚の弊風の尙ほ抜けざることを物語つて居る。

近來朝鮮の各地方に於て生活改善運動が熾烈となり、早婚の弊風を矯正せんとする努力が拂はれて居り、平安南道に於ては、配偶者の有るものは入學を許可しない方針を樹てたと傳へられて居たが、最近には朝鮮總督府が儀禮改善の準則を定め、婚姻の最低年齢を、男子二十歳、女子十七歳とすべしと定めて居る。李朝時代以



下流家庭の花嫁行列

年齢	内地人			
	昭和四年	同五年	同六年	同七年
十七歳未満	1	1	1	1
十七歳以上	1	1	1	1
二十歳未満	3	3	3	3
二十歳以上	3	3	3	3
二十五歳未満	6	6	6	6
二十五歳以上	6	6	6	6
三十歳未満	10	10	10	10
三十歳以上	10	10	10	10
三十五歳未満	15	15	15	15
三十五歳以上	15	15	15	15
四十歳未満	20	20	20	20
四十歳以上	20	20	20	20
四十五歳未満	25	25	25	25
四十五歳以上	25	25	25	25
五十歳未満	30	30	30	30
五十歳以上	30	30	30	30
五十五歳未満	40	40	40	40
五十五歳以上	40	40	40	40
六十歳未満	50	50	50	50
六十歳以上	50	50	50	50
計	100	100	100	100

離婚率の減少の影響もあらうが、この年齢階級の離婚率は減少して居る。これに反し十七歳未満及び十七歳以上二十歳未満の離婚率は増加を示して居る。

離婚年齢別調

男子の離婚年齢 また離婚年齢の最近五箇年間の趨勢を見るに、男子に在りては、内地人は二十五歳以上三十歳未満のものが最も多く、三十歳以上三十五歳未満のものに次ぎ、朝鮮人は内地人より早婚の關係上、その離婚年齢に於ても、二十歳以上二十五歳未満のもの最も多く、二十五歳以上三十歳未満のものに次ぎ、

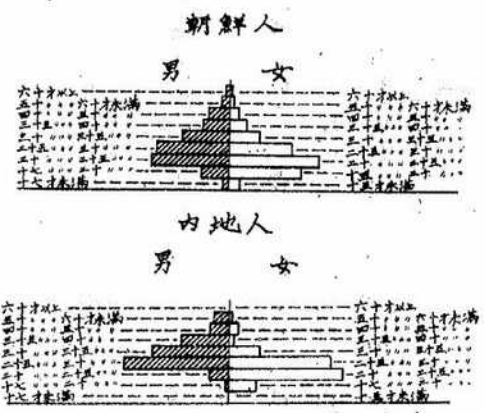
年齢	内地人				朝鮮人			
	昭和四年	同五年	同六年	同七年	昭和四年	同五年	同六年	同七年
十五歳未満	1	1	1	1	1	1	1	1
十五歳以上	1	1	1	1	1	1	1	1
二十歳未満	3	3	3	3	3	3	3	3
二十歳以上	3	3	3	3	3	3	3	3
二十五歳未満	6	6	6	6	6	6	6	6
二十五歳以上	6	6	6	6	6	6	6	6
三十歳未満	10	10	10	10	10	10	10	10
三十歳以上	10	10	10	10	10	10	10	10
三十五歳未満	15	15	15	15	15	15	15	15
三十五歳以上	15	15	15	15	15	15	15	15
四十歳未満	20	20	20	20	20	20	20	20
四十歳以上	20	20	20	20	20	20	20	20
四十五歳未満	25	25	25	25	25	25	25	25
四十五歳以上	25	25	25	25	25	25	25	25
五十歳未満	30	30	30	30	30	30	30	30
五十歳以上	30	30	30	30	30	30	30	30
六十歳未満	40	40	40	40	40	40	40	40
六十歳以上	40	40	40	40	40	40	40	40
計	100	100	100	100	100	100	100	100

來婚年齢の制限が屢々行はれ、現在に於ても法定婚年齢は、男子満十七歳、女子満十五歳に規定されて居るに拘らず、前述の如き早婚の實例が甚だ多い事實に鑑み、儀禮準則の婚年齢徹底普及に關しては、將來尠らざる苦心を費さねば、單に準則の公布のみを以て、その目的を達成することは容易なことであるまい。



年齢	内地人				朝鮮人			
	昭四	昭五	昭六	昭七	昭四	昭五	昭六	昭七
十五歳未満	1	1	1	1	1	1	1	1
十五歳以上二十歳未満	3	3	3	3	3	3	3	3
二十歳以上二十五歳未満	5	5	5	5	5	5	5	5
二十五歳以上三十歳未満	10	10	10	10	10	10	10	10
三十歳以上三十五歳未満	15	15	15	15	15	15	15	15
三十五歳以上四十歳未満	20	20	20	20	20	20	20	20
四十歳以上四十五歳未満	25	25	25	25	25	25	25	25
四十五歳以上五十歳未満	30	30	30	30	30	30	30	30
五十歳以上五十五歳未満	35	35	35	35	35	35	35	35
五十五歳以上六十歳未満	40	40	40	40	40	40	40	40
六十歳以上	45	45	45	45	45	45	45	45
計	110	103	118	118	103	118	118	118

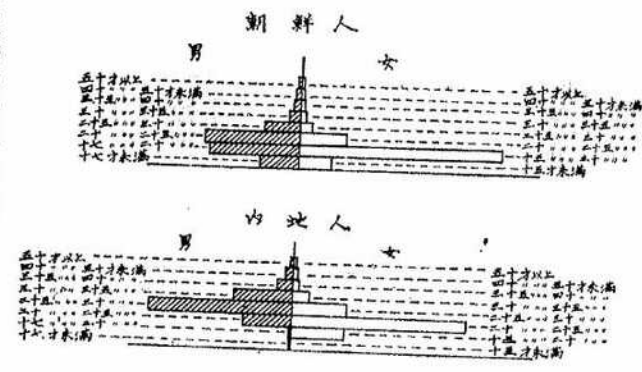
離婚者の年齢別割合(昭和八年)
(各性別別百分比)



女子の離婚年齢 女子の離婚年齢に就いて見るに、内地人は二十歳以上二十五歳未満が最も多く、二十五歳以上三十歳未満これに次ぎ、朝鮮人は二十歳以上二十五歳未満のもの、及び二十五歳以上三十歳未満のものが多い、この間に、二十歳以上の年齢階級の離婚数が減少するに反し、十五歳未満のもの、及び十五歳以上二十歳未満のもの、離婚数が多くなつて来た。

年齢	内地人				朝鮮人			
	昭四	昭五	昭六	昭七	昭四	昭五	昭六	昭七
十七歳未満	1	1	1	1	1	1	1	1
十七歳以上二十歳未満	3	3	3	3	3	3	3	3
二十歳以上二十五歳未満	10	10	10	10	10	10	10	10
二十五歳以上三十歳未満	15	15	15	15	15	15	15	15
三十歳以上三十五歳未満	20	20	20	20	20	20	20	20
三十五歳以上四十歳未満	25	25	25	25	25	25	25	25
四十歳以上四十五歳未満	30	30	30	30	30	30	30	30
四十五歳以上五十歳未満	35	35	35	35	35	35	35	35
五十歳以上五十五歳未満	40	40	40	40	40	40	40	40
五十五歳以上六十歳未満	45	45	45	45	45	45	45	45
六十歳以上	50	50	50	50	50	50	50	50
計	110	103	118	118	103	118	118	118

婚姻者の年齢別割合(昭和八年)
(各性別別百分比)



二十歳以上	三三三	三三三	二二二	一四六	一二四
十五歳以上	三三三	三三三	二二二	一四六	一二四
十歳以上	三三三	三三三	二二二	一四六	一二四
五歳以上	三三三	三三三	二二二	一四六	一二四
未満	三三三	三三三	二二二	一四六	一二四
六十歳以上	二	二	二	二	二
五十歳以上	六	六	六	六	六
四十歳以上	二六	二六	二六	二六	二六
三十歳以上	四六	四六	四六	四六	四六
二十歳以上	八六	八六	八六	八六	八六
十歳以上	二八	二八	二八	二八	二八
未満	二八	二八	二八	二八	二八
六十歳以上	八〇二	八〇二	八〇二	八〇二	八〇二

内地人と朝鮮人との通婚

内鮮通婚關係 内鮮融和の捷徑は、血を以て結合する内鮮人間の通婚を以て第一義とするとの議論を爲すものが多い。恐らくこれには何人と雖も反對するものは無からうが、日韓併合以來二十五箇年を経過せる現在に於て、果してこの内鮮兩民族の血液上の融和混合が、どれ程行はれて居るかといふことを先づ觀察せねばならぬ。即ち朝鮮に於ける昭和八年末現在の内地人と朝鮮人との配偶数は一、〇二九組で、配偶の種類は、内地人で朝鮮婦人を妻とするものが五八九組、朝鮮人で内地婦人を妻とするものが三七七組、朝鮮人で内地人の家に入籍したものが四八組、内地人で朝鮮人の家に入籍したものが一五組あり、内地人と朝鮮人との配偶数は、逐年著しい歩調で増加して来た。今既往十年間に就いて其の趨勢を見ると、大正十二年末の二四五組から、昭和二年末には二倍の四九九組となり、同五年末には三倍の七八六組に上り、同八年末には更に四倍の一、〇二九

組に増加して居るが、内地と朝鮮の關係が愈々密接となり、内地人と朝鮮人との交渉が益々複雑になつて居るに對比して、この成績は果して上乘なりと云ひ得るであらうか。

内鮮人配偶數累年表

年次	總數	内地人で朝鮮婦人を妻とするもの	朝鮮人で内地婦人を妻とするもの	朝鮮人で内地人の家に入籍したるもの	内地人で朝鮮人の家に入籍したるもの
大正十二年末	二四五	一〇二	一三一	一一	一一
同十三年末	三六〇	一二五	二〇三	二三	九
同十四年末	四〇四	一八七	一九七	一九	一
昭和元年末	四五九	二二二	二一九	一八	一
同二年末	四九九	二四五	二三八	一四	二
同三年末	五二七	二六六	二三八	一一	二
同四年末	六一五	三一〇	二七七	二七	一
同五年末	七八六	三八五	三五〇	四六	五
同六年末	八五二	四三八	三六七	四一	六
同七年年末	九五四	五三三	三六四	四八	九
同八年年末	一、〇二九	五八九	三七七	四八	一五

道別配偶數 更に内地人と朝鮮人との配偶數を道別に見ると、内地人と朝鮮人との關係の最も深い京畿道の一七三組が最も多く、全羅南道の一〇一組、慶尙北道の一〇〇組、慶尙南道一〇六組がこれに次ぎ、以下江原道の八八組、咸鏡南道の八三組、平安北道の七八組の順位である。

内鮮人配偶道別表 (昭和八年末現在)

道名	總數	内地人で朝鮮婦人を妻とするもの	朝鮮人で内地婦人を妻とするもの	朝鮮人で内地人の家に入籍したもの	内地人で朝鮮人の家に入籍したもの
京畿道	一七三	七八	八三	一一	—
忠清北道	一四	—	—	—	—
忠清南道	五四	五	九	—	—
全羅北道	五四	二四	二五	—	—
全羅南道	五四	二九	二四	—	—
釜山道	一一一	六二	四三	—	—
慶尙北道	一一〇	四一	五四	—	—
慶尙南道	一〇六	四三	五九	—	—
黄海道	四五	—	—	—	—
平安南道	五九	—	—	—	—
平安北道	七八	—	—	—	—
江原道	八八	—	—	—	—
咸鏡南道	八三	—	—	—	—
咸鏡北道	五四	—	—	—	—
總計	一、〇二九	五八九	三七七	四八	一五

職業別配偶數 次に職業別の配偶數を見ると、兩者の接觸の多い商業及交通業の三〇五組が最も多く、公務及自由業の二七〇組これに次ぎ、工業の一六四組、農林及牧畜業の一五〇組等の順位になつて居る。

職業別表 (昭和八年末現在)

職業別	總數	内地人で朝鮮婦人を妻とするもの	朝鮮人で内地婦人を妻とするもの	朝鮮人で内地人の家に入籍したもの	内地人で朝鮮人の家に入籍したもの
農林及牧畜業	一五〇	八二	五九	—	—
漁業及製鹽業	二六	—	—	—	—
工業	一六四	—	—	—	—
商業及交通業	三〇五	—	—	—	—
公務及自由業	二七〇	—	—	—	—
其他の有業者	八四	—	—	—	—
無職及職業を申告せざる者	二九	—	—	—	—
總計	一、〇二九	五八九	三七七	四八	一五

内地人と朝鮮人との通婚に就いては、その性質上、右の數字以外に官廳に届出を爲さざる内密の私通同棲も相當にありと思はれる。されば假にその數が右の一、〇二九組の二倍三倍に達すると見ても、これに依りて兩民族の融和結合を期待するは、理論として不都合はないが、實際問題としては遠き將來に望みを懸ける外ないと信ずる。然るに我國の識者中には、随分慌て者が多く居り、滿洲事變以來、日本の青年を滿洲へ移住させ、娶はすに滿洲の女子を以てせよと、眞面目に説いて居るのである。男の數が女の數に甚だしく超過せる滿洲に於て、日本青年の配偶者たる滿洲婦人を求めんとすることは、寒地移住に經驗乏しきもの、定着以上に、無理なる社文であるが、假令それが可能としても、古來歴史的に密接なる交渉あり、地理的關係も深く、同じ國籍

の同胞として、互ひに相往來移住せるものが多く、言語、風俗、習慣等の次第に接近して居る内鮮人の間に於てさへ、その配偶關係が前述した通りであることに想到せんか、今遽かに日滿人の通婚を絶叫する如きは、痴人夢を説くの類なりとは云へぬまでも、實情に即せざるものとして、必ずや迂遠の譏を免れないであらう。日滿兩國の男女が、自然に結婚するに至るやうな状態に、接近して行くことは洵に欣ぶべきことであり、是非とも左様に導いて行くのは願はしいことであるが、角を矯めんとして牛を殺すの愚を學んではならない。惟ふに日滿兩國の親善融和は極めて氣永に成就すべきものであつて、模型のやうな押付婚式の通婚關係位で、たやすく目的を達することは不可能であると信ずる。



安産岩 (北朝鮮の安産岩の形を模したもので、七間川の支流、毛里山、七十里の間にあり、約七、八丈の長さがある。)

四 出産・死亡

出産及び死亡の多少は、一國一地方の氣候、風土、産業、文化、生活等を反映し、これが増減は現在及び將來に於ける人口趨勢に直接影響を及ぼし、人口上最も重要なものならず、國勢の推移を豫測する上にも亦極めて大切なものである。朝鮮の出産・死亡に關しては拙著「朝鮮の人口研究」及び「朝鮮の人口現象」に詳述してあるが、これが年々の状態に就いては「朝鮮總督府統計年報」及び「調査月報」に毎年一回掲載される報告が發表されるのみで、一般にその出生及び死亡に對する注意が閑却され、從來これに關する有力なる研究論文が殆んど見當らないのは遺憾である。

出産數・出産率

出産數の多少 出産數及び出産率の多少は直接關係を及ぼすものは、男女數の割合、妊孕年齡婦人の數及びその年齢、



配偶者数及びその年齢であるが、尙ほ人口統計の技術的研究としては、氣候、風土、都鄙の別、人口密度、貧富の差、文化の程度、醫療機關の多少、生活状態、家族生活、性道徳、疾病、住居の部屋数などを始め、職業、移住、出稼、戦争、等その他各種條件が出生率に影響することが研究せられつゝある。生物學上及び醫學上に於ては、粗食をする栄養の低きものに概して出生率が高く、また寒暑の差の甚だしき地方では、男女の性慾を刺戟して一般に出生率が高いとされて居る。しかしながら、氣候の不順、病弱又は工場労働等に依り母胎の健康を保ち得ず、又は墮胎の習慣の存するところでは、妊娠の割合に出生率は低く死亡率が高くなるを常とする。而して朝鮮に於ける昭和八年の出生、即ち出生と死産との合計は六十萬八千三百五十九人、その中で出生は六十萬三千四百七人、死産は四千九百五十二人で、出生百に付出生は九九・二、死産は〇・八である。試みに出生と死産との實數及び割合を既往十年間に就いて見ると、甚だ微少であるが漸次出生は減少し、死産は増加の趨勢を辿つて居り、内地とは反對の傾向を示して居る。

出生率比較

年次	出生率比較			出生率比較		
	出生	死産	計	出生	死産	計
大正十三年	66,633	4,339	70,972	99.2	0.8	100.0
同 十四年	73,452	3,450	76,902	99.5	0.5	100.0
昭和元年	66,126	3,626	69,752	99.0	1.0	100.0
同 二年	66,126	3,626	69,752	99.0	1.0	100.0

年次	出生率比較			出生率比較		
	出生	死産	計	出生	死産	計
同 三年	73,500	3,600	77,100	99.5	0.5	100.0
同 四年	73,500	3,600	77,100	99.5	0.5	100.0
同 五年	73,500	3,600	77,100	99.5	0.5	100.0
同 六年	73,500	3,600	77,100	99.5	0.5	100.0
同 七年	73,500	3,600	77,100	99.5	0.5	100.0
同 八年	73,500	3,600	77,100	99.5	0.5	100.0

最近十年間の出生數 朝鮮に於ける昭和八年の出生は六十萬三千四百七人、その中で内地人は一萬三千九十一人、朝鮮人は五十九萬三千五十八人、外國人は二百八十一人にして、一日に平均一千六百五十三人の出生がある勘定で、一箇年を通じての出生率は人口千人に付二九・〇二である。これを内地に於ける昭和七年の出生率三二・九二に對比すると、朝鮮は三・九〇低い。出生率を既往十年間に就いて見ると、大正十三年より昭和元年迄は逐年減少し、昭和二年より増加の傾向に轉じたが、昭和六年より再び漸減を續け昭和八年の如きは過去十年間の最低率を示して居る。統計に誤なくば、この出生率低減の主なる原因は、不景氣に因る配偶者の移住、又は生活難或は婚姻年齢の上昇に基く婚姻數の減少等に影響されたもので、社會事情の推移を見るもの、輕視すべからざる事實である。

出生率比較

各道別出生率 出生率を道別に見ると、昭和八年に於ける最高は平安北道の人口千人に付三五・五四、最低は全羅南道の二三・四七で、其の差は一二・〇七である。出生率の高いのは平安北道、黄海道、江原道、京畿道、平安南道等の中鮮及び北鮮地方で、何れも三一・〇〇以上を示し、これに反して低いのは全羅南道を首位に、慶尙北道、全羅北道等の南鮮地方で、二七・〇〇にも達しないのである。

道別出生率比較表 (人口千人に付)

年次	出生率			人口千人に付
	内地人	朝鮮人	外国人	
大正十三年	九七五五	六八〇八八	三九	六九〇六三
同十四年	一〇二八九	七二二七八	三六	七二四九三
昭和元年	一〇五二二	六八五〇四	五二	六八六二七
同二年	一〇九五〇	六八七一四	九七	六八八一八
同三年	一〇八九七	七〇五五八	一三九	七二五九四
同四年	一〇八五五	七九二五五	一八九	七三〇二七
同五年	一一四三三	七六〇六二	二二六	七三二七〇
同六年	一二八五五	七〇五九六	一五二	七二七八二
同七年	一三七五三	六〇四三七	二五〇	六八二七七
同八年	一三〇九一	五九〇〇五	二八一	六三三〇七

道別	昭和八年			同七年			同六年		
	出生率	人口千人に付	出生率	人口千人に付	出生率	人口千人に付	出生率	人口千人に付	
京畿道	三一・四三	三五・二四	三二・二四	三五・七六					
忠清北道	二七・三七	二九・一三	二九・一三	三五・〇九					
忠清南道	二七・二九	二七・七五	二七・七五	三五・五二					
全羅北道	二六・〇九	二八・一九	二八・一九	二五・五七					
全羅南道	二三・四七	二四・四六	二四・四六	三〇・七五					
慶尙北道	二四・〇一	二六・四九	二六・四九	二九・六一					
慶尙南道	三〇・二六	三二・七〇	三二・七〇	三二・六〇					
黄海道	三一・九六	三一・四三	三一・四三	三五・二四					
平安南道	三一・二一	三〇・一二	三〇・一二	四三・九五					
平安北道	三五・五四	三七・五一	三七・五一	四六・七六					
江原道	三一・四九	三一・〇九	三一・〇九	三八・六六					
咸鏡南道	三〇・五二	三〇・二五	三〇・二五	四一・四九					
咸鏡北道	三〇・七四	三一・九〇	三一・九〇	三八・七六					
計	二九・〇二	三〇・〇一	三〇・〇一	三五・四二					

即ち昭和六年には全鮮平均の出生率は三五・四二人であつたものが、昭和七年には三〇・〇一人となり、更に昭和八年には二九・〇二となり、近年に無い出生率減退を来し、昔では出生率の高いことを一特色として居た朝鮮としては驚くべき異變と謂はねばならぬ。試みに内地と比較して見ると、昭和七年内地に於ける出生率は二百十八萬二千七百四十二人にして、その出生率は三二・九二人となり、これを昭和六年に較べると出生率

ひ方が異なつて居る。我國の死産は、懐胎四箇月以上を經過したる胎兒にして、出産前又は出産に際し死亡したるものを云ひ、四箇月未滿のもの雖も届出られたる場合は調査する規定である。諸外國の法制を見るに、匈牙利では懐妊七箇月以上、獨逸、諸威、芬蘭では懐胎六箇月以上を死産とし、墾地利では完全に獨立の生存をなし得る程度まで發育せる死産兒のみを登記する。普魯西では成熟死産兒と、懐胎六箇月後に生れたる胎兒にして身長三十二種以上のもの、及び前二者に類似せる胎兒を死産と看做し、丁抹では懐胎二十八週間内又は其の後に生れた胎兒に生の兆候なき場合を死産兒とし、西班牙では呼吸せず生れたるもの、及び出生後二十四時間以内に死亡したる者を死産とする。これに反し、英吉利・亞米利加合衆國・伊太利等の國は懐胎期間に制限を設けず、佛蘭西・白耳義・和蘭等の國は懐胎期間に制限がない上に、更に出生登記前（出生登記には三日間の猶豫がある）の死亡者をも死産として取扱ふことになつて居り、例へば和蘭に於ては、早産兒・死産兒生命なき成熟胎兒、並に出生登記三日間の猶豫期前に死亡したる生産兒を死産に包含せしめる規定で、その解釋は頗る廣義になつて居る。（森數博士著「人口統計論」に據る）

朝鮮に於ける昭和八年の死産は四千九百五十二人、その中で内地人は九百六、朝鮮人は四千三十一、外國人は十五で、死産率は人口千人に付〇・二四である。これを内地に於ける昭和七年の死産率一・八〇に對比すると、朝鮮は著しく低く其の二割にすら達しないのである。しかしながら、朝鮮の死産率を既往十年間に就いて見ると、年に依り多少の高低はあるが、大體に於て逐年増加の傾向を辿つて居る。

死産累年比較表

年	實數		人口千人に付	
	内地人	外國人	内地人	外國人
大正十三年	七五三	五	一・八三	〇・〇二
同十四年	六五三	三	一・五五	〇・〇一
同十五年	六三六	三	一・五〇	〇・〇一
昭和元年	六二六	三	一・五〇	〇・〇一
同二年	六三三	八	一・五二	〇・〇二
同三年	六三三	八	一・五二	〇・〇二
同四年	六三三	八	一・五二	〇・〇二
同五年	六三三	八	一・五二	〇・〇二
同六年	六三三	八	一・五二	〇・〇二
同七年	六三三	八	一・五二	〇・〇二
同八年	六三三	八	一・五二	〇・〇二

死産數及び死産率は人口數及び出生數に比例するものであるが、各國共に文化が進み、生活狀態が改善され、醫療機關及び産婆の普及に伴つて、漸次減少されて行く傾向がある。然るに朝鮮に於ては、近年却つてその數及び率が幾分増加して行く傾向があるのは注目すべき現象である。尤も内鮮外人別に就いて見ると、多くの都會地に分布して文化及び生活程度の高い内地人の方は幾分その率を減少し、朝鮮人及び外國人の方は反對にその率を増加しつつある。されば内地に比して朝鮮の死産率が低く、また内地人に比し朝鮮人及び外國人の死産率が低いといふことは、人口上の特色として擧ぐることは出来ない。即ち最近に於ける朝鮮人の死産率の増

加は、醫師・産婆等の増加と、警察の取締の行届いて来た結果、死産の届出が増加したことを物語るものであるまいか、姑く疑問を存して置く。

道別死産率 死産率を各道別に就いて見ると、昭和八年に於ては平安北道の人口千人に付〇・五九を最高とし、平安南道の〇・五四、京畿道の〇・五二等これに次いで高い。最も低いのは忠清北道、全羅南道の〇・〇七で、忠清南道、慶尙北道の〇・〇八、全羅北道の〇・一三、黄海道の〇・一六、江原道の〇・一八等は比較的低い方である。即ち死産率は文化の遅れ、生活程度の低い、醫療機關の乏しい西北鮮に高く、中鮮及び南鮮に低いことが明かである。

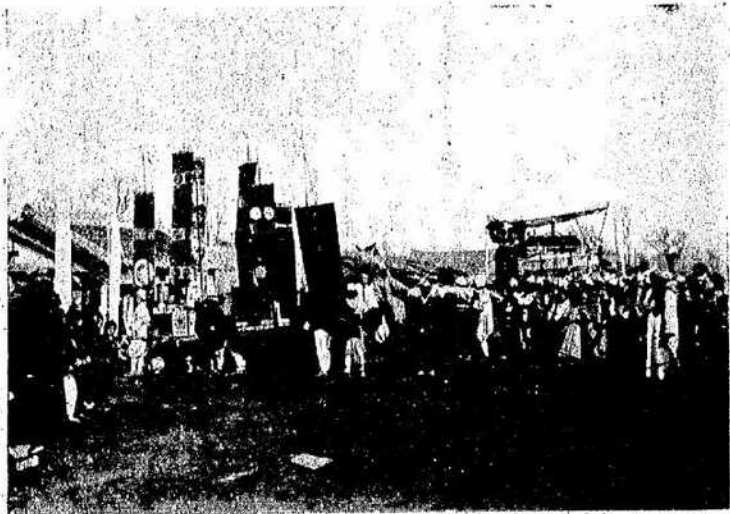
道別死産率比較 (人口千人に付)

道別	昭和八年	同七年	同六年
京畿道	〇・五二	〇・四九	〇・四七
忠清北道	〇・〇七	〇・〇七	〇・二〇
忠清南道	〇・〇八	〇・〇九	〇・〇八
全羅北道	〇・一三	〇・一〇	〇・〇七
全羅南道	〇・〇七	〇・〇七	〇・〇九
慶尙北道	〇・〇八	〇・一四	〇・〇九
慶尙南道	〇・一一	〇・二四	〇・三〇
黄海道	〇・一六	〇・一六	〇・一七
平安南道	〇・五四	〇・四九	〇・五一

死産児の體性 昭和八年に於ける死産児四千九百五十二の中、男は二千八百二、女は二千五百五十で、女百に付男は一三〇・三に該り、内地に於ける昭和七年の一一九・八に比し一〇・五高い。尙ほこれを出生の女百に付男一一四・五に比較すると、男超過の割合が遙かに高くなつて居り、既往十年間に就いて見るも亦同様の現象を呈して居る。

死産児の體性

年次	死産實數		死産に付	
	男	女	女百に付	男
大正十三年	二、三二四	一、九〇五	一一三・〇	一一四・四
同十四年	一、九三五	一、五一五	一一七・七	一一二・一
昭和元年	二、一四二	一、六八四	一一七・二	一一四・六
同二年	二、〇五七	一、六〇七	一一八・〇	一一三・八
同三年	一、九九七	一、六二三	一一三・〇	一一三・三
同四年	一、九九七	一、六〇〇	一一四・八	一一二・六
同五年	二、四八五	一、九四五	一一七・八	一一一・一



上流階級の葬式行列

死産に關聯して考へらるゝことは墮胎であるが、これに關する文獻も統計も乏しいので、正確なる調査は困難なるも、貧困者の多く、且つ饑饉凶歳の頻々として襲來した李朝時代に在りては、我國の徳川時代同様に相當間引が行はれたらしい。殊に寡婦の再嫁を禁じ、又はこれを卑みたる習慣の力は今も尙ほ強く、これが爲め道徳的に縛められたる、この可憐なる婦人達に墮胎の勘くないことは、その犯罪の發覺に依りても窺ふことが出来る。

死亡數・死亡率

一國一地方の死亡數及び死亡率は、その住民の年齢、男女、健康、疾病等に依りて大小高低あり、また地勢、氣候、季節水質、雨量、湿度、空氣、都鄙等の自然的影響を受くることも大であると共に、その住民の環境及び境遇、即ち生活、榮養、職業、住居、衛生、交通、文化、民族、慣習等の力に依りて多少の差を生ずることも

月別	昭和四年		同五年		同六年		同七年		同八年	
	昭和四年	同五年	同六年	同七年	同八年	昭和四年	同五年	同六年	同七年	同八年
一月	九八八	九八四	二八四	一〇三二	一〇三三	九八七	九八七	九八七	九八七	九八七
二月	八八七	九五九	八八七	九八四	九八四	一〇五八	一〇五八	一〇五八	一〇五八	一〇五八
三月	一〇五八	九四〇	八八七	一〇三六	一〇三六	九四二	九四二	九四二	九四二	九四二
四月	九四二	八八三	九七三	九八一	九八一	九六七	九六七	九六七	九六七	九六七
五月	九六七	九六四	九五一	九七八	九七八	九六二	九六二	九六二	九六二	九六二
六月	一〇六一	一〇三三	九六三	一〇四〇	一〇四〇	一〇六一	一〇六一	一〇六一	一〇六一	一〇六一
七月	九〇二	九七六	九七六	一〇六九	一〇六九	一〇〇四	一〇〇四	一〇〇四	一〇〇四	一〇〇四
八月	一〇〇四	九四五	九四五	九七六	九七六	一〇五二	一〇五二	一〇五二	一〇五二	一〇五二
九月	八七一	一〇五一	一〇九三	一〇〇七	一〇〇七	一〇五二	一〇五二	一〇五二	一〇五二	一〇五二
十月	一二四	九二九	一〇〇四	九〇八	九〇八	一〇五二	一〇五二	一〇五二	一〇五二	一〇五二
十一月	二八四	一〇五九	二四八	一〇五三	一〇五三	二八四	二八四	二八四	二八四	二八四
十二月	二八四	一〇五九	二四八	一〇五三	一〇五三	二八四	二八四	二八四	二八四	二八四

死産の季節 昭和八年に於ける死産は十二月に最も多く、十月、六月等これに次いで多い。最も少いのは四月及び十一月で、二月、五月等は比較的少い方であるが、最近五年間の趨勢を見ると左の如くなつて居る。

累年死産の月別 (二年平均一ヶ月死産百に付)

免れ難い。死亡の直接原因となる傳染病の流行、地方病の傳播、流行性感胃等の發生の如きは、年に依り、季節に依り、地方に依りて、著しく死亡状態を變化せしめるものである。日韓併合後に於ける死亡状態に關しては、拙著「朝鮮の人口研究」及び「朝鮮の人口現象」に詳述してあるから、此では主として最近十年間に於ける死亡統計を基礎として、その内容を検討して見やうと思ふ。

死亡數及び死亡率 昭和八年に於ける死亡は四十萬一千三百三十二人にして、この中、内地人は八千三百五十九人、朝鮮人は三十九萬二千六百六十八人、外國人は二百九十五人の死亡あり、一日平均の死亡數は一千百九人に達し、死亡率は人口千人に付一九・三〇である。尙ほ内地に於ける昭和七年の死亡率一七・七三に對比すると、朝鮮は一・五七高い譯である。試みに既往十年間の死亡數及び死亡率を内鮮外人別に見ると左の如くなつて居り、死亡率の最高は昭和四年の二三・八九、最低は昭和五年の一八・八五で、十箇年間の平均は二一・一〇となつて居る。

死亡數累年表

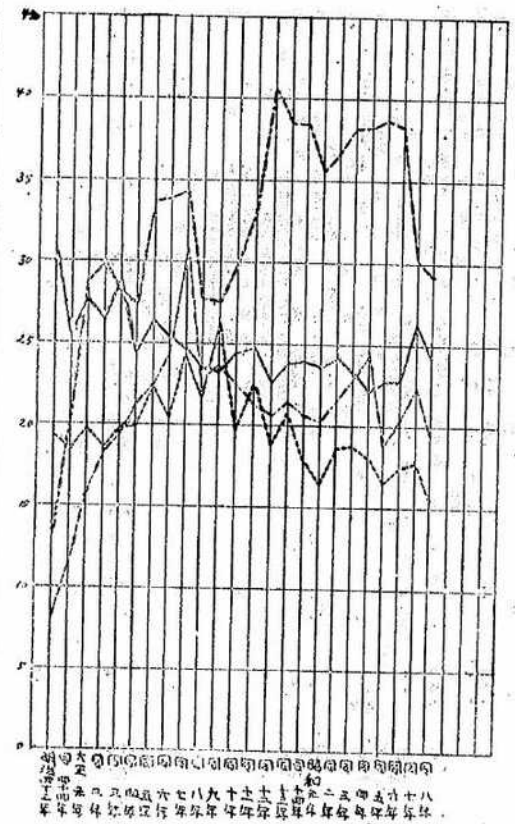
年次	死亡數			人口千人に付
	内地人	朝鮮人	外國人	
大正十三年	八,600	37,870	301	19.76
同十四年	7,200	34,030	300	19.70
昭和元年	7,150	36,050	318	18.77
同二年	7,800	30,100	350	18.01

以上は最近十年間に於ける内鮮外人別の死亡數及び死亡率の消長であるが、更に内鮮外人別に男女及び平均の死亡率を左に示して見やう。

死亡率累年表

年次	内地人		朝鮮人		外國人		朝鮮全體		内地
	男	女	男	女	男	女	男	女	
大正十三年	三・三三	三・〇〇	三・三三	三・七二	四・七〇	九・五五	三・一五	三・〇五	三・三三
同十四年	一・八三	一・七三	一・七九	一・九七	三・七三	七・三三	三・〇〇	二・九〇	三・〇七
昭和元年	一・六九	一・六〇	一・六六	一・九〇	三・〇〇	七・〇一	二・〇五	一・九六	二・〇八
同二年	一・七三	一・七三	一・七〇	一・九三	三・七三	七・七二	二・〇四	一・九六	二・〇八
同三年	一・八三	一・七〇	一・七六	一・九七	三・七三	八・〇三	二・〇七	一・九六	二・〇八
同四年	一・七三	一・七〇	一・七〇	一・九三	三・七三	八・〇三	二・〇七	一・九六	二・〇八
同五年	一・六六	一・五〇	一・五七	一・八〇	三・六六	七・六六	一・九八	一・八八	一・九七
同六年	一・六六	一・五〇	一・五七	一・八〇	三・六六	七・六六	一・九八	一・八八	一・九七

出生死亡率年比較圖
 出生 死亡 内地人 朝鮮人



同 七年 一七三 一六三 一六六 三三六 三三六 二二五 六二七 二二三 三三三 三三三
 同 八年 一五九 一四六 一五九 三三九 三三九 六二七 九七九 六三三 一八六 一九三 三三三
 即ち、右の死亡率を見ると、内地人の死亡率平均は、昭和五年の一五・三〇が最も低く、大正十三年の二〇・九が最も高く、大體に於て近年死亡率は低くなる傾向がある。朝鮮人の死亡率平均は、昭和五年の一八・九八が最も低く、昭和四年の二四・一八が最も高い。外國人に死亡率の低い傾向がある。

いは、その大部分が出稼人たる壯年の労働者・商人・農夫などで、乳幼児、小兒などを含みから例外とせねばならぬ。朝鮮は内地に比して死亡率遙かに高く、また朝鮮人は一般に内地人に比して死亡率が高いが、年に依りてその高低の一樣ならざるは注目すべきことである。朝鮮人の死亡率が昭和八年に一九・四三に低下した

のは他にも原因があるかも知れぬが、その出生数激減の影響が尠くないやうに思はれる。而して内地に比し朝鮮の死亡率の高い重なる理由としては、氣候の不良にして、交通不便なること、住居及び食物殊に栄養の悪しきこと、傳染病や地方病の流行大なること、文化の低くして、衛生状態の悪く、醫療機關の不足せること、等を数ふべきであらう。

道別死亡状態 昭和八年の各道別死亡数を見るに、京畿道の四萬四千二百三人第一位を占め、平安北道の四萬一千八百七十九人、慶尙北道の四萬一千七十四人等これに亞ぎ、最も少きは忠清北道の一萬五千八百六十二人であるが、これを内鮮外人の男女別に就いて左に示して見やう。

道	道別	内地人		朝鮮人		外國人		總計	
		男	女	男	女	男	女	男	女
京	畿道	一、三一一	一、〇九〇	三、三三〇	二、九六六	一	一	三、三三〇	三、〇七二
忠	清北道	六〇	三	八、三三三	七、三三三	一	一	八、三四四	七、三四四
忠	清南道	一、五二	一、一八	二、四八	九、六三三	一	一	二、六六	九、六三三
全	羅北道	三、〇〇	三、一〇	一、〇三三	八、六三三	一	一	一、〇三三	八、六三三
全	羅南道	三、〇〇	三、一〇	一、〇三三	八、六三三	一	一	一、〇三三	八、六三三
慶	尙北道	三、七六	三、六	三、二二	一、八八〇	一	一	三、七六	三、〇七〇
慶	尙南道	八、八	三、七	一、九七七	一、六六六	一	一	一、〇七七	一、六六六
黄	海道	一、〇〇	一、一	〇、〇	一、一	一	一	一、〇〇〇	一、一

平安南道	三五	一五七六	一五九四	九	七	一六〇三	一四一六	一五二九
平安北道	二七	一三三三	一三六二	一〇	一	一三九四	一四〇九	一四〇九
江原道	七	一七〇三	一七〇三	一	一	一七〇三	一五〇三	一五〇三
咸鏡南道	四八	一八四三	一七七六	一	九	一八八三	一六〇七	一七〇〇
咸鏡北道	四〇	一八八九	一七三三	四	二	一八三三	一七七六	一七二五
合計	四四〇	一五九四	一五九四	一八	一八	一五九四	一四一六	一五二九

死亡率は年に依り地方に依りて自ら高低があるが、今昭和八年の死亡率を各道別に就いて見ると、最高は平安北道の人口千人に付二六・九二で、咸鏡北道の二三・一〇、江原道の二二・八一、咸鏡南道の二二・六二、平安南道の二二・四七等これに低い。最も低いのは全羅南道の一三・五八で、全羅北道の一三・七五、忠清南道の二二・四四、慶尙北道の二一・五四、慶尙南道の二一・九九等は比較的低い方である。即ち死亡率は、氣候の寒冷な、人口密度の粗い、比較的文化的の遅れ、産業の拓けない、生活程度の悪い、出生率の多い、西北鮮地方が高く、これに反して、氣候の比較的温暖な、人口密度の濃い、文化の進み、産業の開けた、生活程度の良い、出生率の少い、南鮮地方が低いことが明かにされて居る。

尙は最近三箇年間の各道別死亡率を比較して見ると左の如くなつて居り、各道共に最近三箇年間に死亡率が年々著しく減少を示せるは、主としてその出生率の激減に伴ふ結果でもあらうが、近年衛生状態の次第に改善されたることも、亦死亡率の減少に影響を及ぼして居る。

道別死亡率三箇年比較

道別	昭和八年	同七年	同六年
京畿道	二〇・三六	二二・四九	二二・七七
忠清北道	一八・一二	二二・〇五	一八・六五
忠清南道	一五・四四	二〇・一四	一七・一九
全羅北道	一三・七五	一七・〇三	一四・一二
全羅南道	一三・五八	一四・八八	一四・六一
慶尙北道	一七・五四	二一・〇二	一七・三二
慶尙南道	一七・九九	一九・三二	一九・五六
黄海道	二一・三〇	二二・九一	二四・一一
平安南道	二二・四七	三三・八〇	二四・二四
平安北道	二六・九二	三二・三七	二七・一一
江原道	二二・八一	二五・二〇	二二・〇三
咸鏡南道	二二・六二	二二・七九	二二・二三
咸鏡北道	二二・一〇	二四・一六	二二・五七
合計	一九・三〇	二二・二一	二〇・二五

更に朝鮮の死亡率と内地の死亡率を比較する爲め内地の死亡率を見るに、内地に於ける昭和七年の死者数は百十七萬五千三百四十四人にして、その死亡率は一七・七三人となり、昭和六年に比較すると、數に於て六萬五千五百四十七人の減少を見、死亡率は一・二五人減少した。次に府縣別に就いて死亡率を見るに、青森・岩手・秋田・高知の諸縣を除いては、各府縣何れも前年に比較して減少を示したが、死亡率の高い府縣と低い

府縣とを見ると次の通りで、大體に於て出生率の高い府縣が死亡率が高く、その低い府縣が死亡率が低く、また東京・大阪・京都・神奈川などの文化の進んだ府縣に死亡率の低いことも注目すべきことである。

死亡率の高い府縣

府縣名	昭和七年	同六年	府縣名	昭和七年	同六年	府縣名	昭和七年	同六年
福井縣	三・三	三・三	青森縣	三・四	三・三	秋田縣	三・六	三・六
石川縣	三・四	三・四	大分縣	三・四	三・六	佐賀縣	三・三	三・六
富山縣	三・七	三・七	岩手縣	三・五	三・五	徳島縣	三・九	三・六
島根縣	三・六	三・七						

死亡率の低い府縣

府縣名	昭和七年	同六年	府縣名	昭和七年	同六年	府縣名	昭和七年	同六年
東京府	二・三	二・三	長野縣	二・三	二・三	山梨縣	二・三	二・三
神奈川縣	二・六	二・六	北海道	二・六	二・六	宮崎縣	二・四	二・六
大阪府	二・七	二・七	鹿児島縣	二・四	二・四	京都府	二・六	二・六
神奈川縣	二・八	二・九						

死亡率の高い地方と低い地方

朝鮮の各道の死亡率、及び内地の府縣中死亡率の高い地方と低い地方とは右の通りであるが、死亡率は前述したやうに各種の原因及び影響に依り高低があるものであるから、その地方別死亡率を精密に調査せんとせば、府郡別乃至は府邑面別に觀察する必要がある。拙著「朝鮮の人口現象」に於ては、大正十年より同十四年に至る五箇年平均の府郡島別死亡率を算出し、色刷の圖表をも作製したが、今これ

に據りて死亡率の高い地方(人口千に付死亡)と、低い地方(人口千に付死亡)とを擧げて見ると、死亡率の高い地方は忠清南道・全羅北道・全羅南道・慶尙南道には一郡も無く、忠清北道の三郡、慶尙北道の三郡、咸鏡北道の三郡、黄海道の四郡も少い方で、概ね平安南道・江原道・咸鏡南道の山地帯に多く、京畿道には平野部の農村にも死亡率の高い郡あり、殊に市街地たる京城府、仁川府に死亡率の高いのは異例である。死亡率の低い地方は忠清南道・全羅北道・全羅南道・慶尙北道・慶尙南道の諸郡に多く、低い地方の一郡も無いのは江原道で、その僅に一郡あるものは京畿道・黄海道・咸鏡南道であり、忠清北道・平安南道・平安北道及び咸鏡北道も死亡率の低い郡が少い方である。

一箇年人口千人に付死亡数二十五人以上の地方

道名	府名	郡名
京畿道	京城	仁川、漣川、抱川、利川、龍仁、金浦、坡州、長湍
忠清北道	鎮川	陰城、丹陽
全羅北道		
全羅南道		
慶尙北道		青松、榮州、奉化
慶尙南道		
黄海道		金川、新溪、瑞興、谷山
平安南道		順川、孟山、价川、徳川、寧遠

道名	府	郡	名
平安北道	熙川、寧邊、朔州、昌城、碧城、楚山、渭原、慈城、厚昌		
江原道	春川、楊口、高城、襄陽、旌善、平昌、原州、橫城、華川、金化、鐵原、平康、伊川		
咸鏡南道	元山、定平、北青、豐山、三水、甲山		
咸鏡北道	鏡城、靑城、慶源		
一箇年人口千人に付死亡數二十人未滿の地方			
京畿道	水原		
忠清北道	清州、沃川、永同		
忠清南道	公州、論山、舒川、保寧、洪城、瑞山、唐津		
全羅北道	群山、全州、鎮安、任實、南原、淳昌、井邑、高敞、扶安、金堤、沃溝、益山		
全羅南道	木浦、潭陽、求禮、麗水、高興、和順、康津、靈巖、羅州、靈光、莞島、濟州、光州、谷城、光陽、順天、寶城、長興、海南、務安、咸平、長城、珍島		
慶尙北道	遂城、迎日、慶州、永川、慶山、清道、高靈、金泉、開豊、麟蹄島		
慶尙南道	馬山、晉州、宜寧、咸安、昌寧、密陽、蔚山、東萊、金海、昌原、統營、固城、泗川、南海、河東、山淸、陝川		
黃海道	海州		
平安南道	平壤、鎮南浦、中和		
平安北道	新義州、義州、鐵山		
江原道			
咸鏡南道	咸興		

朝鮮の社會問題に深き理解を以て居られた故池上政務總監は、拙著「朝鮮の人口現象」に據り、西北部山地帯の諸地方に於ける死亡率の高いことに深く留意され、或日私を呼ばれて、その理由を種々聴取され、更にこれが原因の徹底的調査方を命ぜられた。尙ほ西龜衛生課長にも、私に對すると同様の下命があつたやうに承知して居るが、このことあつて間もなく、吾々の復命に先ち、遽かにこの老總監が長逝されて、再び溫容に接するを得ないのは洵に遺憾の極みで、朝鮮の人口問題研究者たる私に取りては、實に感慨の禁じ得ないものがある。これ等の山地帯に特に死亡率の高い原因としては、左の數項を擧げるべきであらう。

- 一、死亡率の高い山地帯は朝鮮内に於て最も出生率の高い地方に屬し、従つて乳幼児の死亡多きこと。
- 二、冬期酷寒なる上に氣候不順にして、且つ飲用水に不適當なるものを用ふること。
- 三、住民の大部分が生活程度低き火田民にして、住居、食物、衣服等甚だしく粗悪なること。
- 四、住民の文化低く、栄養不良にして、不潔不衛生を極め、且つ醫療機關に不足し、勢ひ忌はしき迷信療法が行はれ、交通不便にして、地方病傳染病の流行大なること。

死亡者の體性・年齢

死亡者の體性別 死亡數及び死亡率は男女に依り自ら多少高低するが、試みに自大正十三年至昭和八年の男女別死亡數、各性別死亡率、並に男女の死亡割合を見ると次の如くなつて居る。

男女別死亡數累年表

年次	實數		各性人口千に付		朝鮮	内地
	男	女	男	女		
大正十三年	35,668	16,333	33	30.7	137	251
同十四年	35,668	16,633	33	30.7	137	251
昭和元年	36,850	16,833	37	30.5	145	260
同二年	38,732	17,950	38	30.6	151	268
同三年	39,339	18,156	39	30.7	152	270
同四年	40,688	18,333	40	30.9	155	270
同五年	41,234	18,733	41	31.1	156	275
同六年	42,330	19,236	42	31.3	157	275
同七年	43,833	19,633	43	31.4	158	279
同八年	45,030	20,333	45	31.5	161	289

即ち最近十年間を通じて死亡數は昭和四年が最も多く、各性人口千に付男二四・八、女二二・九に達し、常に男の死亡率は女の死亡率よりも高くなつて居り、女百に付男の死亡率に於ては、内地より朝鮮の方が七人内六から九人内外高くなつて居る。

死亡者年齢別 昭和八年の死亡者四十萬一千三百二十二人を、内鮮外人別及び年齢別に分ち、その死亡數を見ると左の如くなつて居る。

昭和八年々齡別死亡數

種別	内地人		朝鮮人		外國人		總計	
	男	女	男	女	男	女	男	女
一年未滿	2,111	3,333	3,733	3,000	30	30	3,866	3,366
一年以上	4,000	3,333	3,900	3,333	7	7	7,900	6,666
二年以上	5,500	3,333	3,900	3,333	7	7	9,400	6,666
三年以上	7,000	3,333	3,900	3,333	7	7	10,900	6,666
四年以上	8,500	3,333	3,900	3,333	7	7	12,400	6,666
五年以上	10,000	3,333	3,900	3,333	7	7	13,900	6,666
十年以上	17,000	3,333	3,900	3,333	7	7	20,900	6,666
十五年以上	23,000	3,333	3,900	3,333	7	7	26,900	6,666
二十年以上	30,000	3,333	3,900	3,333	7	7	33,900	6,666
三十五年以上	37,000	3,333	3,900	3,333	7	7	40,900	6,666
四十年以上	44,000	3,333	3,900	3,333	7	7	47,900	6,666
五十年以上	51,000	3,333	3,900	3,333	7	7	54,900	6,666
六十年以上	58,000	3,333	3,900	3,333	7	7	61,900	6,666
七十年以上	65,000	3,333	3,900	3,333	7	7	68,900	6,666
八十年以上	72,000	3,333	3,900	3,333	7	7	75,900	6,666
合計	450,000	300,000	450,000	300,000	100	100	900,100	600,100

即ち五歳未満の小児は死亡者全体の三割八分五厘(〇歳の者は一割二分六厘)を占めて最も多く、五―九歳は急激に減少して六分二厘、一〇―一四歳は更に低下して三分一厘となり、一五―一九歳は各年齢級を通じて最も少く三分を示して居る、二〇―二四歳は稍増加して三分七厘となるも、二五歳より三九歳迄の各年齢級には著しい高低なく何れも四分に達せず、四〇歳を越ゆるに至つて再び四分以上に増加し、八〇歳以上になると此の年齢級に屬する人口が少いため自ら減少して居る。

昭和八年死亡者の年齢

年齢	死亡實数	千分比例
〇―四歳	一五四、四〇七	三八四・七
五―九歳	五〇、五四二	一二五・九
一〇―一四歳	四七、三六一	一一八・〇
一五―一九歳	五六、五〇四	一四〇・八
二〇―二四歳	二四、九八二	六二・三
二五―二九歳	一一、二五二	三〇・五
三〇―三四歳	一一、一〇二	三〇・二
三五―三九歳	一四、九五七	三七・三
四〇―四四歳	一三、六五六	三四・〇
四五―四九歳	一四、三六〇	三五・八
五〇―五四歳	一三、三九九	三三・四
五五―五九歳		
六〇―六四歳		
六五―六九歳		
七〇―七四歳		
七五―七九歳		
八〇歳以上	一、一八二	二・九
不詳	一、〇〇〇	
合計	四〇一、三三三	

更に昭和八年に於ける男女の死亡者を年齢別に見ると、女に對する男の割合は五歳未満及び五〇―五九歳を山とし、一五―一九歳及び八〇歳以上を谷とする波状を形成して居る。即ち五歳未満に於ては女百に付男は一一八・四で、其れより年齢の長するに従ひ、男の割合は遞減し、一五―一九歳に於ては男は女より遙かに少く、九四・九を示すに過ぎない。而して二〇歳以上は男の割合漸次増加し、五〇―五九歳は一四四・五の高率に達して居るが、六〇歳以上は再び低下し、八〇歳以上になると八八・七に減少して居る。

昭和八年死亡者の男女別年齢

年齢	死亡實数		女百に付男
	男	女	
〇―四歳	八三、七一五	七〇、六九二	一一八・四
五―九歳	二七、九二四	二三、六一八	一二三・五
一〇―一四歳	二五、九五二	二一、四一〇	一一二・三
一五―一九歳	二九、八四〇	二六、六六四	一一一・九
二〇―二四歳	一一、二五二	一〇、〇〇〇	一一一・九
二五―二九歳	一四、三六〇	一三、三九九	一一一・九
三〇―三四歳	一三、六五六	一二、三九九	一一一・九
三五―三九歳	一五、〇三九	一三、三九九	一一一・九
四〇―四四歳	一五、〇三九	一三、三九九	一一一・九
四五―四九歳	一四、三六〇	一三、三九九	一一一・九
五〇―五四歳	一四、三六〇	一三、三九九	一一一・九
五五―五九歳	一四、三六〇	一三、三九九	一一一・九
六〇―六四歳	一四、三六〇	一三、三九九	一一一・九
六五―六九歳	一四、三六〇	一三、三九九	一一一・九
七〇―七四歳	一四、三六〇	一三、三九九	一一一・九
七五―七九歳	一四、三六〇	一三、三九九	一一一・九
八〇歳以上	一、一八二	一、〇〇〇	一一一・九
不詳	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一一一・九
合計	四〇一、三三三	一、〇〇〇	一一一・九

年齢	昭和四年	同五年	同六年	同七年	同八年	五箇年間平均
五—九 歳	一三、〇八四	一三、〇九〇	一三、〇九八	一三、一〇〇	一三、一〇二	一三、一〇〇
一〇—一四 歳	六、四三〇	六、四三〇	六、四三〇	六、四三〇	六、四三〇	六、四三〇
一五—一九 歳	五、八九四	五、八九四	五、八九四	五、八九四	五、八九四	五、八九四
二〇—二四 歳	七、五二〇	七、五二〇	七、五二〇	七、五二〇	七、五二〇	七、五二〇
二五—二九 歳	六、九五六	六、九五六	六、九五六	六、九五六	六、九五六	六、九五六
三〇—三四 歳	七、五七二	七、五七二	七、五七二	七、五七二	七、五七二	七、五七二
三五—三九 歳	七、一五〇	七、一五〇	七、一五〇	七、一五〇	七、一五〇	七、一五〇
四〇—四九 歳	一三、七三五	一三、七三五	一三、七三五	一三、七三五	一三、七三五	一三、七三五
五〇—五九 歳	一五、七七七	一五、七七七	一五、七七七	一五、七七七	一五、七七七	一五、七七七
六〇—六九 歳	二〇、八〇八	二〇、八〇八	二〇、八〇八	二〇、八〇八	二〇、八〇八	二〇、八〇八
七〇—七九 歳	一八、六八六	一八、六八六	一八、六八六	一八、六八六	一八、六八六	一八、六八六
八〇 歳 以上	七、〇六七	七、〇六七	七、〇六七	七、〇六七	七、〇六七	七、〇六七
年 齡 不 詳	六九六	六九六	六九六	六九六	六九六	六九六
計	二二五、〇九〇	二二五、〇九〇	二二五、〇九〇	二二五、〇九〇	二二五、〇九〇	二二五、〇九〇

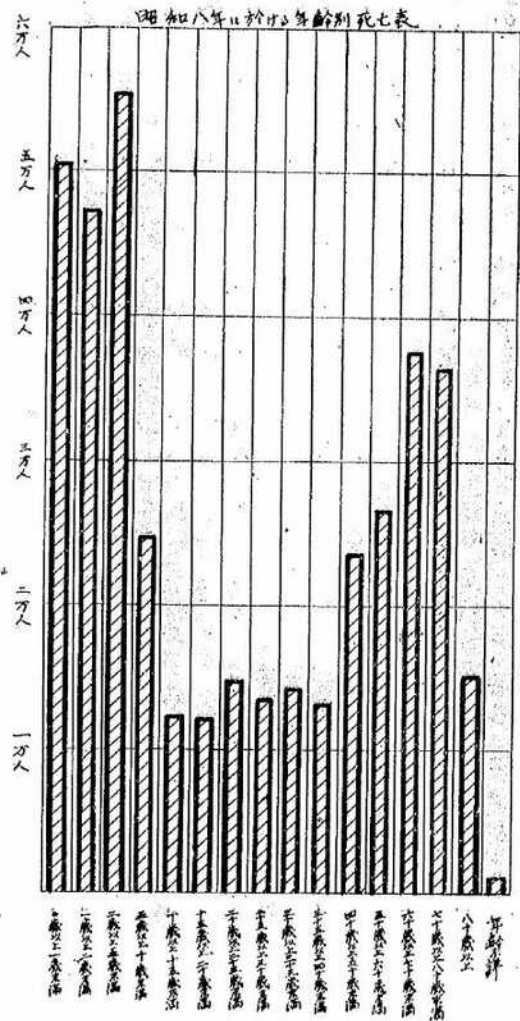
尚ほ各年齢別の死亡数割合を一層明確にする爲め、自昭和四年至昭和八年、五箇年間の年齢別死亡数下分比例を示せば左の通りである。

年齢別	昭和四年	同五年	同六年	同七年	同八年	五箇年間平均
一—四 歳	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六
五—九 歳	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六
一〇—一四 歳	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六
一五—一九 歳	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六
二〇—二四 歳	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六
二五—二九 歳	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六
三〇—三四 歳	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六
三五—三九 歳	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六
四〇—四九 歳	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六
五〇—五九 歳	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六
六〇—六九 歳	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六
七〇—七九 歳	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六
八〇 歳 以上	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六
年 齡 不 詳	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六
計	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六

年齢	昭和四年	同五年	同六年	同七年	同八年	五箇年間平均
一—四 歳	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六
五—九 歳	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六
一〇—一四 歳	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六
一五—一九 歳	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六
二〇—二四 歳	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六
二五—二九 歳	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六
三〇—三四 歳	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六
三五—三九 歳	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六
四〇—四九 歳	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六
五〇—五九 歳	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六
六〇—六九 歳	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六
七〇—七九 歳	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六
八〇 歳 以上	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六
年 齡 不 詳	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六
計	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六	一、二七六

小児の死亡率 死亡者の年齢別考察を試みたる序に、小児の死亡に就いて一言したい。茲に小児と云ふのは十歳未満の子供を指し、小児、幼児、乳児を含むもの、總稱であるが、小児の死亡は人口問題の將來に重大なる關係を及ぼし、また國民保健上海に重視すべき問題で、とりわけ乳児死亡率の高い我國では、その保護運動が盛んになつて居る。併合後の朝鮮に於ける小児の死亡に關しては、昭和七年五月の「朝鮮」に「朝鮮の小児死

「死亡率」と題し、私は詳細に及ぶ論文を發表して居るので、再びこれを繰り返す必要はないと思ふから、今は朝鮮に於ける最近十年間の小兒死亡率を示し、併せて内地と比較するに止めて置く。



小兒年齢別死亡比率 (各年の死亡總數千に付)

大正十三年	一歳未満	二歳以上	五歳未満	七歳以上	合計
	二二六	一〇九七	二七六	七四三	四九二

昭和十四年 一〇一八
昭和元年 二九三
昭和二年 一一三
昭和三年 一八四
昭和四年 二二七
昭和五年 二二二
昭和六年 二九七
昭和七年 二〇八
昭和八年 二五九

即ち各年の死亡總數千に付十歳未満の小兒の死亡比率は毎年四〇〇以上に達し、昭和七年の如きは五〇四・五に上つて居る。凡そ文明國には乳兒の死亡率が最も高いのであるが、朝鮮では一歳未満と一歳以上二歳未満の死亡率に大差ないのは、諸外國にも内地にも見ない傾向である。然るに二歳以上五歳未満、五歳以上十歳未満の死亡率も高く、概して小兒の死亡率が近年漸増しつつあるは、文化及び衛生状態の進歩と逆比例せる奇現象である。更に朝鮮と内地とに於ける、各年齢階級の小兒死亡率を比較すると左の如くなつて居る。

朝鮮と内地との小兒死亡率比較 (各年の死亡總數千に付)

年齢	朝鮮	内地
一歳未満	二六六	二八八
一歳以上二歳未満	二五七	二八八
二歳以上五歳未満	二七六	二八八
五歳以上十歳未満	二九〇	二九〇
合計	四九二	四九二

昭和十四年 昭和三十四年 昭和三十五年 昭和三十六年 昭和三十七年 昭和三十八年 昭和三十九年 昭和四十年 昭和四十一年 昭和四十二年 昭和四十三年 昭和四十四年 昭和四十五年 昭和四十六年 昭和四十七年 昭和四十八年 昭和四十九年 昭和五十年 昭和五十一年 昭和五十二年 昭和五十三年 昭和五十四年 昭和五十五年 昭和五十六年 昭和五十七年 昭和五十八年 昭和五十九年 昭和六十年 昭和六十一年 昭和六十二年 昭和六十三年 昭和六十四年 昭和六十五年 昭和六十六年 昭和六十七年 昭和六十八年 昭和六十九年 昭和七十年 昭和七十一年 昭和七十二年 昭和七十三年 昭和七十四年 昭和七十五年 昭和七十六年 昭和七十七年 昭和七十八年 昭和七十九年 昭和八十年 昭和八十一年 昭和八十二年 昭和八十三年 昭和八十四年 昭和八十五年 昭和八十六年 昭和八十七年 昭和八十八年 昭和八十九年 昭和九十年 昭和九十一年 昭和九十二年 昭和九十三年 昭和九十四年 昭和九十五年 昭和九十六年 昭和九十七年 昭和九十八年 昭和九十九年 昭和百一年 昭和百二年 昭和百三年 昭和百四年 昭和百五年 昭和百六年 昭和百七年 昭和百八年 昭和百九年 昭和百十年 昭和百十一年 昭和百十二年 昭和百十三年 昭和百十四年 昭和百十五年 昭和百十六年 昭和百十七年 昭和百十八年 昭和百十九年 昭和百二十年 昭和百二十一年 昭和百二十二年 昭和百二十三年 昭和百二十四年 昭和百二十五年 昭和百二十六年 昭和百二十七年 昭和百二十八年 昭和百二十九年 昭和百三十年 昭和百三十一年 昭和百三十二年 昭和百三十三年 昭和百三十四年 昭和百三十五年 昭和百三十六年 昭和百三十七年 昭和百三十八年 昭和百三十九年 昭和百四十年 昭和百四十一年 昭和百四十二年 昭和百四十三年 昭和百四十四年 昭和百四十五年 昭和百四十六年 昭和百四十七年 昭和百四十八年 昭和百四十九年 昭和百五十年 昭和百五十一年 昭和百五十二年 昭和百五十三年 昭和百五十四年 昭和百五十五年 昭和百五十六年 昭和百五十七年 昭和百五十八年 昭和百五十九年 昭和百六十年 昭和百六十一年 昭和百六十二年 昭和百六十三年 昭和百六十四年 昭和百六十五年 昭和百六十六年 昭和百六十七年 昭和百六十八年 昭和百六十九年 昭和百七十年 昭和百七十一年 昭和百七十二年 昭和百七十三年 昭和百七十四年 昭和百七十五年 昭和百七十六年 昭和百七十七年 昭和百七十八年 昭和百七十九年 昭和百八十年 昭和百八十一年 昭和百八十二年 昭和百八十三年 昭和百八十四年 昭和百八十五年 昭和百八十六年 昭和百八十七年 昭和百八十八年 昭和百八十九年 昭和百九十年 昭和百九十一年 昭和百九十二年 昭和百九十二年

累年乳兒死亡率 (出生百に付)

年	朝鮮				内地
	内地人	朝鮮人	外國人	平均	
大正十三年	160.1	61.3	33.3	67.2	156
同十四年	113.8	60.4	88.4	61.9	143
昭和元年	114.0	67.1	42.3	68.4	137
同二年	117.7	64.6	36.0	65.4	143
同三年	113.6	70.4	35.5	71.3	138
同四年	118.5	77.5	34.2	78.3	142
同五年	97.0	59.3	33.0	79.7	139
同六年	104.5	53.8	26.9	75.0	133
同七年	86.0	97.1	108.0	96.8	128
同八年	?	?	?	83.7	?

内地人の方は乳兒死亡率が近年漸減の歩調を辿り、これに反し朝鮮人の方は漸増を見つゝあり、昭和七年に於ては初めて朝鮮人の方が内地人より出生百に付乳兒死亡率を高めて来た。併合以來朝鮮の文化が進み、交通が開け、生活が向上し、醫療衛生施設が整ひ、傳染病が減少しつゝあるに、朝鮮人の乳兒死亡率のみが増加するといふのも亦不思議に感ぜざるを得ない。人口の増減殊にその出生率や死亡率は、色々の原因によりて高低を生じ、簡単に人口論や統計學の理論で、定義づけることは困難なるものがあるから、輕率に斷案を下すことは出来ないけれども、また一面より見ると、過去に於ける朝鮮の人口統計に多少不備の點があつたことは、新





新羅王陵

政以來僅に二十餘年を経過したるのみであり、殊に一般民衆の知識、竝に統計に對する理解、統計事務の組織、その奨勵施設、調査員の素質等より見て、止むを得ざることである。従つて朝鮮の乳兒死亡統計に、何程か正確を缺くものがあることは想像される所である。

朝鮮の論客李魯鏡氏は、社會事業に造詣深き人であるが、乳兒死亡率調と題し、「朝鮮社會事業」昭和六年五月號に、京城府の乳兒死亡に就いて有益なる研究を發表して居る。即ちその要領は、「朝鮮に於ける内地人乳兒の出生百に對する死亡數は一一・八にして内地の一三・八より稍低く、朝鮮人乳兒の死亡率は六・九にして、英米のそれと比肩し、佛・獨・伊より少く、日本内地のそれに比し半分に過ぎず。朝鮮は乳兒の保健状態甚だ良好なるに似たりと雖も、最近數年間の朝鮮人乳兒死亡の傾向を見るに、大正十年の五・〇より、昭和元年六・七、同二年六・五、同三年六・九、同四年七・七

となり、逐年昂上せり、今や各國は何れも愛護運動、保護施設等により漸次低下を見つゝあるに、獨り朝鮮は是れに逆行しつゝあり。更に之を京城府に付て調ぶるに、昭和四年中朝鮮人乳兒死亡率は二五・九（内地人は一一・三）と云ふ、世界最高のレコードを示したり。斯く都市と全鮮との懸隔甚しきに付ては調査資料の基本數字に不審なき能はずと雖も、京城府の數字は全鮮のそれに比し精確に近きものとして信ずることを得べく概して朝鮮は輓近文化の向上に伴ひ乳兒の死亡は寧ろ高率を示す傾向にあることを知るべし。是れが原因に付て見るに、其の多くは消化器病及呼吸器病にして、世界の共通現象と云ふべく、殊に朝鮮人は内地人に比し神経系病甚多きは謂ゆる先天性脆弱を意味するものにして、後天的原因に於ても傳染性病（天然痘其の他）感冒頗る多く、次に外傷・中毒・畸形・溺死・縊死と云ふ變異又多し、是等は家庭の無智と生活苦の一面を如實に表明せるものと云ふべし」と述べ、數種の有益なる統計を掲げて居る。

尙ほ私の調査した所に據ると、京城府の乳兒死亡數並に死亡率（出生百に對する比）の最近二箇年間の内鮮外人別は左の如くなつて居り、乳兒死亡率甚だしく高いことが判るのである。

京城府乳兒死亡調

出生數	内地人		朝鮮人		外國人	京城府全體	
	男	女	男	女		男	女
昭和七年	101	101	101	101	101	101	101
死亡數	101	101	101	101	101	101	101
死亡率	101	101	101	101	101	101	101

昭和八年	死亡数	出生数	死亡率
一三三	一三三	一三三	一〇〇
一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇

内地四大都市の乳児死亡率 (出生百に付)

都市名	昭和三年	同四年	同五年	同六年	同七年
東京市	一一・八	一一・〇	九・〇	一〇・四	九・三
大阪市	一四・三	一六・一	一二・九	一四・八	一一・五
京都市	一三・三	一三・四	一二・八	一三・七	一〇・七
名古屋市	一六・一	一四・八	一三・〇	一三・八	一一・九

朝鮮全體として乳児の死亡率が極めて低いに拘らず、最も醫療機關の普及し、文化の高い京城の乳児死亡率が内地四大都市のいづれよりも高く、即ち昭和七年の乳児死亡率は、京城府(一五・三四)、名古屋市(一一・八九)、大阪市(一一・五四)、京都市(一〇・七二)、東京市(九・二六)の順序となつて居る。京城府のみが乳児死亡率の特に高く、他の市街又は村落、殊に醫師や産婆のない邊陲の山間地帯などに、乳児死亡率の低いといふ理由は見出し得ないとする説は一應尤もである。朝鮮に於ける都市と村落の乳児死亡率に就いては、私は他日資料を纏めて詳細發表したいが、私の調査に係る京城府の数字より推測しても、朝鮮全體の乳児死亡率の低いことは疑ふべき點がある。これに關しては、我國の社會事業家にして、比較的朝鮮の事情にも通じて居る生江孝之氏が、「朝鮮社會事業」昭和六年四月號に、朝鮮に於ける乳児死亡率に對する疑問と考察と題し、綿密

周到なる論文を公表して居る。同氏の議論では、朝鮮の乳児死亡率の低いのは、畢竟統計の不正確であるといふに歸着し、その原因として擧ぐる所を要約すると、

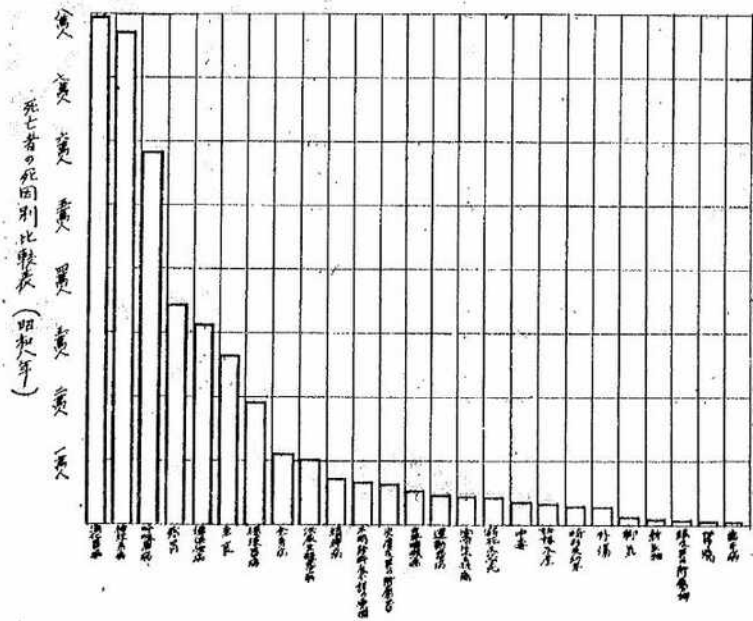
- 一、朝鮮は農業地域で人口の大部分は農民であり、これが多数は貧農であるから、その栄養状態は悪く、従つて多産多死であること
- 一、都市と朝鮮全體の乳児死亡率に著しく懸隔があり、死産の極めて少きは、墮胎の精力による結果であること
- 一、朝鮮には子供の死亡を特に輕視する風習があり、出生届出も遅れ勝ちで、乳児の死亡が届出洩れとなるのであらう

といふのである。同氏の意見には幾多の傾聴すべき事實があり、或る點までは肯定せねばならぬ。しかしながら、乳幼児の死亡に際して、これを無届で埋葬する如きは、警察制度の完備して來た今日、さう多くあるとは思へないし、若しこれを死産として取扱ふとせば、死産数が多くならねばならぬが、朝鮮の死産率は前に示した如く低いのであるから、朝鮮の乳児死亡率の低いことは、依然として謎であり疑問である。されば私は疑問即誤謬と一概に斷することも出来ないと思つて居る。

朝鮮總督府當局に於ては、數年前から人口統計の正確を期する爲め多大の努力を拂ひつゝあり、年と共に多少つゞその成果は現はれ居るが、尙ほその目的を達する爲めには、今後相當の歲月と施設とを必要とすることと信ずる。斯くて乳児死亡率に對する疑問も解決せられるであらうが、若し今日の統計に甚だしき誤謬無しと

せば、その乳児死亡率の低い理由としては、(一)朝鮮は都會地少く村落生活を爲すものが多く、女子の工場労働に従事するもの至つて少きこと、(二)人工榮養に依る哺乳少く、大部分は母乳を以てすること、(三)結核・花柳病等の患者少きことなどを挙げ得べく、在鮮内地人の乳児死亡率が朝鮮人に比して高きは、内地人の大部分が都會地に生活すること、母體及び乳兒が、朝鮮の氣候・風土等の環境に順應し得ず、抵抗力弱きに歸因すべきであらう。さもあらばあれ、既に現在に於ても朝鮮の乳児死亡率は年々増加の傾向が見えるのであるから、統計の改善と共に、官民一致して、乳幼児の保護養育施設を完全ならしむることは、極めて大切な問題である。

死亡者の死因・月別



死亡者の死因別 昭和八年の死亡者に就いて、その死因別を見るに、内地人は呼吸器病が第一位を占め、消化器、傳染性病なども多い。朝鮮人は消化器病が最も多く、神経系病これに並ぎ、呼吸器病、感冒等の順序で、傳染性病が比較的少いが、これは生活程度が低いのと醫療機關の普及せざる爲めであると思ふ。總じて内地人は多く市街地に住み醫師の診療を受けるが、朝鮮人の多數は邊陲の田舎や山地帯に住み、不完全なる在來の醫生の診療をも受け得ないのである。従つて朝鮮側の死因統計は未だ不正確なるを免れず、殊に診断や病名の分類には、疑はしものが多いと見られて居る。

昭和八年死亡者死因別表

種別	内地人		朝鮮人		外國人		總計	
	男	女	男	女	男	女	男	女
全身病	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100
精神系病	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100
循環器病	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100
眼及其の附屬器病	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100
耳	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100
鼻	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100
呼吸器病	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100
消化器病	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100

死因別	昭和四年	同五年	同六年	同七年	同八年	平均
齒牙病	1	1	1	1	1	1
運動器病	1	1	1	1	1	1
皮膚及其の附屬器病	1	1	1	1	1	1
泌尿生殖器病	1	1	1	1	1	1
外傷	1	1	1	1	1	1
溺死及縊死	1	1	1	1	1	1
畸形及幼年	1	1	1	1	1	1
老衰	1	1	1	1	1	1
妊娠及産	1	1	1	1	1	1
中絶	1	1	1	1	1	1
新生毒	1	1	1	1	1	1
寄生蟲病	1	1	1	1	1	1
脚氣	1	1	1	1	1	1
感受性	1	1	1	1	1	1
傳染性病	1	1	1	1	1	1
不明の診断	1	1	1	1	1	1
及不詳の原因	1	1	1	1	1	1
合計	1,599	1,300	1,333	1,300	1,300	1,300

右の死因統計を通じ、不完全ながら風土及び氣候の死因に及ぼす影響を看取することが出来るが、更に朝鮮に於ける内鮮外人を通じて死亡者の死因別千分比例を、最近五箇年間に就いて見るに左表の如くなつて居り、その總平均に於ては、神経系病、消化器病、呼吸器病、感冒、傳染性病、老衰、循環器病等が多い。

死亡者死因別千分比例

死因別	昭和四年	同五年	同六年	同七年	同八年	平均
全身病	235	271	262	273	277	263
精神病	26	17	18	17	17	17
神経系病	199	196	189	183	191	189
循環器病	42	44	53	48	46	46
眼及其の附屬器病	24	20	22	16	14	19
耳鼻咽喉病	17	19	17	15	13	16
呼吸器病	188	276	274	241	235	235
消化器病	140	143	142	142	145	143
齒牙病	17	18	15	15	13	16
運動器病	23	26	29	20	24	27
皮膚及其の附屬器病	28	18	23	20	25	23
泌尿生殖器病	26	27	24	23	23	25
外傷	21	28	21	23	26	25
溺死及縊死	76	22	9	8	10	9
畸形及幼年	107	22	9	8	10	9
老衰	58	66	90	75	77	77
合計	1,599	1,300	1,333	1,300	1,300	1,300

死因	朝鮮人	内地人	外国人	合計
妊娠及産	八九	七五	八四	八〇
中 毒	九四	九三	九〇	八六
新 生 物	一九	二三	一九	二〇
寄 生 蟲	一九	二二	一九	二〇
脚 氣	二〇	二二	一九	二〇
感 冒	二九	三三	二六	三〇
傳 染 性 病	九四	九三	八九	九〇
不明の原因	七五	七五	七五	七五
及不詳の原因	一九	二〇	一九	二〇

死亡者の月別 氣候、風土、疾病の種類、年齢、體性、及び生活状態の關係上、死亡者の數は月に依りて大
 小あるが、昭和八年の月別死亡數を内鮮外人の男女別に就いて見ると左の如くなつて居り、全體としては三月
 が最も多く、二月、一月、四月、七月等の順で、最も少いのは十一月である。而して内地人男子は六月、女子
 は七月、朝鮮人は男女共三月が死亡數が多くなつて居る。

昭和八年死亡者月別表

月 別	内地人		朝鮮人		外国人		總 計
	男	女	男	女	男	女	
一 月	一、九三三	一、七〇七	一、八四四	一、七〇七	一、七〇七	一、七〇七	一、九三三
二 月	一、九三三	一、七〇七	一、八四四	一、七〇七	一、七〇七	一、七〇七	一、九三三
三 月	一、九三三	一、七〇七	一、八四四	一、七〇七	一、七〇七	一、七〇七	一、九三三
四 月	一、九三三	一、七〇七	一、八四四	一、七〇七	一、七〇七	一、七〇七	一、九三三

月 別	昭和四年		同 五 年		同 六 年		同 七 年		同 八 年
	男	女	男	女	男	女	男	女	
一 月	九〇・八	九〇・八	九五・七	九五・七	一一三・九	一一三・九	八〇・八	八〇・八	九〇・六
二 月	一〇三・五	一〇三・五	九五・四	九五・四	九三・三	九三・三	八八・四	八八・四	九七・四
三 月	一〇三・四	一〇三・四	一〇三・二	一〇三・二	一〇五・四	一〇五・四	一二七・一	一二七・一	一一五・五
四 月	九二・五	九二・五	八四・六	八四・六	九三・四	九三・四	一一〇・一	一一〇・一	八八・九
五 月	八五・四	八五・四	八二・四	八二・四	八五・八	八五・八	九一・二	九一・二	八五・三
六 月	八一・五	八一・五	七七・八	七七・八	八二・三	八二・三	七八・六	七八・六	八五・五

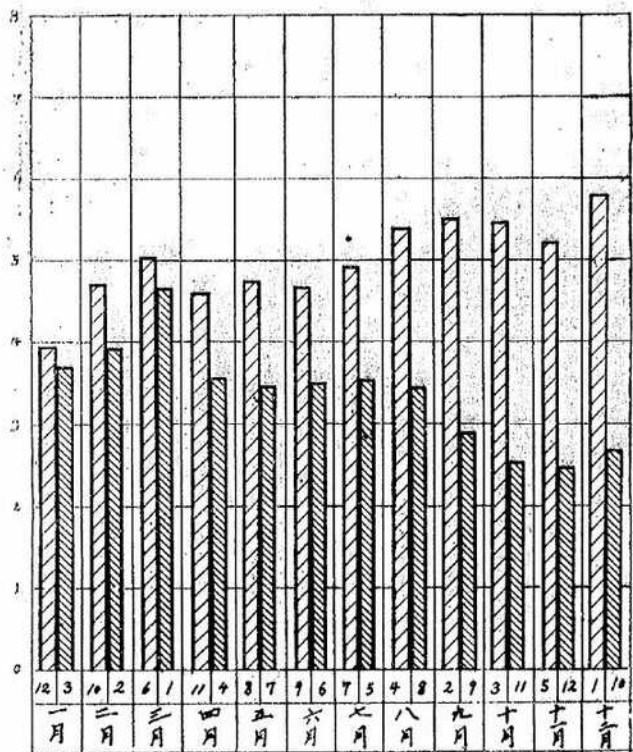
死亡數月別千分比例

尚ほ月別死亡數の割合は流行病等の關係で、年に依りて高低あるを免れないから、自昭和四年至昭和八年の
 五箇年に就き、一箇年の死亡總數を千と見たる月別死亡割合を見ることにした。

十 十 十 九
二 一
月 月 月 月

昭和八年の出生死亡数月別表

出生 死亡



八五四・八九
七七三・九五
七五四・一八
八二一・四九

八六八・三一
七二六・九九
七四七・二五
八〇四・八五

八八〇・八五
七四七・九九
七五六・八五
七九七・八三

八 七 六 五 四 三 二 一
月 月 月 月 月 月 月 月

最近三箇年月別死亡

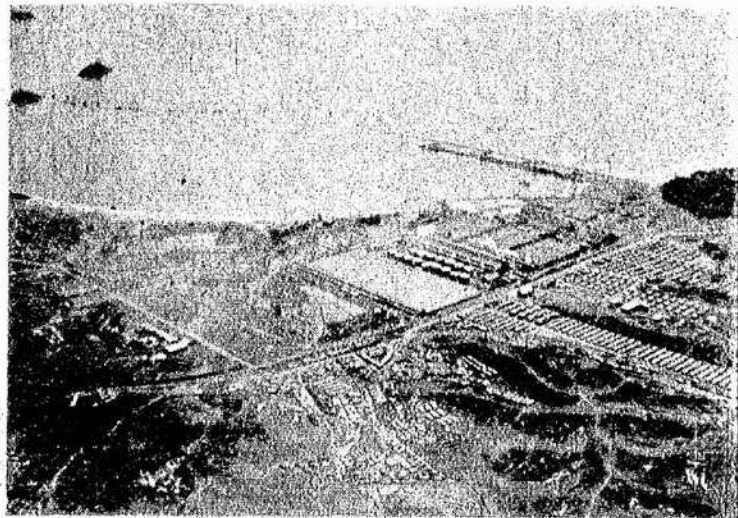
(一箇年を通じて毎日平均死亡数に對する各其月の毎日平均死亡数千分比)

昭和六年	同 七年	同 八年
一、三四〇・六二	九五四・五九	一、〇六六・七五
一、二一六・一三	一、一六・二三	一、二六九・四六
一、三四一・六三	一、五〇〇・四六	一、三五九・五八
一、一三六・六〇	一、三四三・六八	一、〇八二・一八
一、〇一〇・四八	一、〇七六・六五	一、〇〇四・二〇
一、〇〇一・二九	九五八・六三	一、〇四〇・一〇
九五五・六二	九五八・六二	一、〇二九・二八
九〇五・八七	九四八・五八	九八三・二八

備考

月に大小あるを以て、死亡を季節的に觀察する場合には、その年の死亡總数をその年の日数にて割り、一箇年を通じて毎日平均の死亡数を求め、これを千とし、各月の死亡数を其月の日数にて除したる月平均毎日死亡数の割合を求むる方法が、最も理論的であるが、右表は「調査月報」の従來の方法による。

昭和六年	同 七年	同 八年
八六・一	八〇・八	八一・三
八六・八	八一・一	八三・五
七三・五	七四・二	八一・三
六四・四	六六・六	七一・二
六一・八	六二・〇	六一・六
六三・三	六七・九	六一・二
	六九・八	六八・三
		六七・八



空工業による発展する邑南

五、人口の増減

人口の増加は國に依り、地方に依り、時代に依りて異なるが、人口の増減の第一原因を爲す出生率及び死亡率の高低は、種々の社會生物學的條件に影響されるが、人口の年齢構成、配偶關係等も、出生率及び死亡率高低の主要原因となるものである。即ち死亡率に出生率の超過するときは人口の自然増加を來し、その大なれば大なる程人口増加が大となるものであるが、若し反對に出生率に死亡率の超過するときは人口自然減少を來し、その大なれば大なる程人口減少が大となるものである。人口の自然増加又は自然減少の外に移住に依る人口増加あり、人口自然増加率は低くとも、移住民を多く要する地方では人口實数は増加し、人口自然増加率は高くとも、海外移住の盛んなる國では人口減少を來すことがある。わが朝鮮では併合以來、戰爭

の如き事變に依りて、人口上著しき影響を受けたことはないが、傳染病の流行、流行性感胃の蔓延、又は旱害・水害・凶作等に依り、國民の生活が困難となり、盛んに移住出稼の行はれたる爲め、或は營養不良に陥りたる結果、婚姻・出生・死亡等に變動を生じた例は頗る多い。移住人口に於ても移入よりも、移出の超過大となりつゝあるに就いては、その原因に對して考へさせられる所が多いが、それよりも從來比較的文化の進歩遅れ、生活程度の低く、醫療衛生設備の不充分なる爲めに、死亡率は高いが、それ以上に出生率が著しく高く、従つて人口自然増加率の高いことを特色として居た朝鮮が、最近に至り出生率が激減して、人口自然増加率を遽かに低下せしむるに至つたことは、甚だ不思議とする所である。若しこの趨勢にして永續せんか、朝鮮に於ける人口の將來に取りて實に由々しき問題で、民族の興亡、國勢の消長にも、影響する所が尠少であるまいと思はれるから、最近の人口推移に關しては周密慎重なる注意を拂はねばならない。

人口増加趨勢

毎十年の人口増加 日韓併合當時に於ける明治四十三年末の朝鮮の人口總數は一千三百三十一萬三千七十七人であつたが、昭和八年末には二千七十九萬一千三百二十一人に増加して居る。今その増加趨勢を明白ならしむる爲め、試みに毎十年の内地人、朝鮮人、外國人の世帯數並に男女別人口を示し、更にその各増加數・増加指數・増加率を現はすことにした。

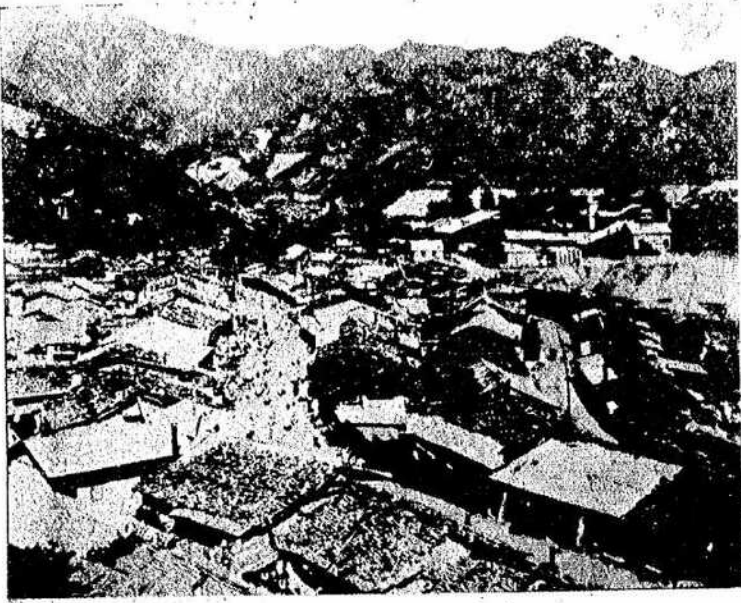
明治四十三年及十年毎人口増加比較表

年次	人口		増加		増加率	
	人口	増加	人口	増加率	人口	増加率
明治三十四年	1,234,567	12,345	1,246,912	1.00%	1,234,567	0.00%
明治三十五年	1,246,912	13,456	1,260,368	1.01%	1,246,912	0.01%
明治三十六年	1,260,368	14,567	1,274,935	1.02%	1,260,368	0.02%
明治三十七年	1,274,935	15,678	1,290,613	1.03%	1,274,935	0.03%
明治三十八年	1,290,613	16,789	1,307,402	1.04%	1,290,613	0.04%
明治三十九年	1,307,402	17,890	1,325,292	1.05%	1,307,402	0.05%
明治四十年	1,325,292	18,901	1,344,193	1.06%	1,325,292	0.06%
明治四十一年	1,344,193	19,012	1,363,205	1.07%	1,344,193	0.07%
明治四十二年	1,363,205	20,123	1,383,328	1.08%	1,363,205	0.08%
明治四十三年	1,383,328	21,234	1,404,562	1.09%	1,383,328	0.09%
明治四十四年	1,404,562	22,345	1,426,907	1.10%	1,404,562	0.10%
明治四十五年	1,426,907	23,456	1,450,363	1.11%	1,426,907	0.11%
明治四十六年	1,450,363	24,567	1,474,930	1.12%	1,450,363	0.12%
明治四十七年	1,474,930	25,678	1,500,608	1.13%	1,474,930	0.13%
明治四十八年	1,500,608	26,789	1,527,397	1.14%	1,500,608	0.14%
明治四十九年	1,527,397	27,890	1,555,287	1.15%	1,527,397	0.15%
明治五十年	1,555,287	28,901	1,584,188	1.16%	1,555,287	0.16%
明治五十一年	1,584,188	29,012	1,613,200	1.17%	1,584,188	0.17%
明治五十二年	1,613,200	30,123	1,643,323	1.18%	1,613,200	0.18%
明治五十三年	1,643,323	31,234	1,674,557	1.19%	1,643,323	0.19%
明治五十四年	1,674,557	32,345	1,706,902	1.20%	1,674,557	0.20%
明治五十五年	1,706,902	33,456	1,740,358	1.21%	1,706,902	0.21%
明治五十六年	1,740,358	34,567	1,774,925	1.22%	1,740,358	0.22%
明治五十七年	1,774,925	35,678	1,810,603	1.23%	1,774,925	0.23%
明治五十八年	1,810,603	36,789	1,847,392	1.24%	1,810,603	0.24%
明治五十九年	1,847,392	37,890	1,885,282	1.25%	1,847,392	0.25%
明治六十年	1,885,282	38,901	1,924,183	1.26%	1,885,282	0.26%
明治六十一年	1,924,183	39,012	1,963,195	1.27%	1,924,183	0.27%
明治六十二年	1,963,195	40,123	2,003,318	1.28%	1,963,195	0.28%
明治六十三年	2,003,318	41,234	2,044,552	1.29%	2,003,318	0.29%
明治六十四年	2,044,552	42,345	2,086,897	1.30%	2,044,552	0.30%
明治六十五年	2,086,897	43,456	2,130,353	1.31%	2,086,897	0.31%
明治六十六年	2,130,353	44,567	2,174,920	1.32%	2,130,353	0.32%
明治六十七年	2,174,920	45,678	2,220,598	1.33%	2,174,920	0.33%
明治六十八年	2,220,598	46,789	2,267,387	1.34%	2,220,598	0.34%
明治六十九年	2,267,387	47,890	2,315,277	1.35%	2,267,387	0.35%
明治七十年	2,315,277	48,901	2,364,178	1.36%	2,315,277	0.36%
明治七十一年	2,364,178	49,012	2,414,190	1.37%	2,364,178	0.37%
明治七十二年	2,414,190	50,123	2,465,313	1.38%	2,414,190	0.38%
明治七十三年	2,465,313	51,234	2,517,547	1.39%	2,465,313	0.39%
明治七十四年	2,517,547	52,345	2,570,892	1.40%	2,517,547	0.40%
明治七十五年	2,570,892	53,456	2,625,348	1.41%	2,570,892	0.41%
明治七十六年	2,625,348	54,567	2,680,915	1.42%	2,625,348	0.42%
明治七十七年	2,680,915	55,678	2,737,593	1.43%	2,680,915	0.43%
明治七十八年	2,737,593	56,789	2,795,382	1.44%	2,737,593	0.44%
明治七十九年	2,795,382	57,890	2,854,272	1.45%	2,795,382	0.45%
明治八十年	2,854,272	58,901	2,914,173	1.46%	2,854,272	0.46%
明治八十一年	2,914,173	59,012	2,975,185	1.47%	2,914,173	0.47%
明治八十二年	2,975,185	60,123	3,037,308	1.48%	2,975,185	0.48%
明治八十三年	3,037,308	61,234	3,099,542	1.49%	3,037,308	0.49%
明治八十四年	3,099,542	62,345	3,162,887	1.50%	3,099,542	0.50%
明治八十五年	3,162,887	63,456	3,227,343	1.51%	3,162,887	0.51%
明治八十六年	3,227,343	64,567	3,292,910	1.52%	3,227,343	0.52%
明治八十七年	3,292,910	65,678	3,359,588	1.53%	3,292,910	0.53%
明治八十八年	3,359,588	66,789	3,427,377	1.54%	3,359,588	0.54%
明治八十九年	3,427,377	67,890	3,496,267	1.55%	3,427,377	0.55%
明治九十年	3,496,267	68,901	3,566,168	1.56%	3,496,267	0.56%
明治九十一年	3,566,168	69,012	3,637,180	1.57%	3,566,168	0.57%
明治九十二年	3,637,180	70,123	3,709,303	1.58%	3,637,180	0.58%
明治九十二年	3,709,303	71,234	3,782,537	1.59%	3,709,303	0.59%
明治九十四年	3,782,537	72,345	3,855,882	1.60%	3,782,537	0.60%
明治九十五年	3,855,882	73,456	3,930,338	1.61%	3,855,882	0.61%
明治九十六年	3,930,338	74,567	4,005,905	1.62%	3,930,338	0.62%
明治九十七年	4,005,905	75,678	4,082,583	1.63%	4,005,905	0.63%
明治九十八年	4,082,583	76,789	4,160,372	1.64%	4,082,583	0.64%
明治九十九年	4,160,372	77,890	4,239,262	1.65%	4,160,372	0.65%
明治一百年	4,239,262	78,901	4,319,163	1.66%	4,239,262	0.66%

最近十年間の人口増加 向は最近十年間に於ける人口数、前年末に對する人口増加数、並に人口増加率を示せば左の通りである。即ち國勢調査の行はれたる大正十四年末には九十四萬七千四百十人の大増加を見、更に昭和五年末には九十二萬五千五百二人といふ大増加を來して居るが、いづれもその翌年の人口増加数は極めて少量である。

これは十月一日に行はる、國勢調査の人口数が、その性質上、現住人口よりは多い結果、十二月末現在の現住戸口調査に於て、國勢調査に接近するやうに、何程か手加減さるゝのではないかと疑ひを懷いて居る者もあるが、國勢調査を機會として從來の出生又は寄宿の届出漏が整理されて、一時に多數の人口増加を見るのであらう。

過去の人口統計は多少不正確な點もあつたが朝鮮總督府當局は、昭和五年以來、人口統計に關し、地方廳を督勵し、熱心に改善を計つて居るので、この兩三年來その面目は漸く一新されるので、この兩三年來その面目は漸く一新される現住戸口調査の人口数も、次第に正確に近づきつゝあり、最近十年間を平均すると、その人口増加数は先づ實際に近いものと見て差支ない。



落架地在所嶺金城昌道北安平

年 別	人口増加状態	
	人口数	前年末に比し人口増加率
大正十二年末	一七、八八四、八六三	一八三、一五三
同 十三年末	一八、〇六八、一六六	九四七、四一〇
同 十四年末	一九、〇一五、五二六	八八、三七四
昭和元年末	一九、二〇三、九〇〇	三三、七九八
同 二年末	一九、一三七、六九八	五二、〇〇一
同 三年末	一九、一八九、六九九	一四一、三六二
同 四年末	一九、三三一、〇六一	九二五、五〇二
同 五年末	二〇、二五六、五六三	六、三九五
同 六年末	二〇、二六二、九五八	三三六、九一八
同 七年末	二〇、五九九、八七六	一九一、四四五
同 八年末	二〇、七九一、三二一	二、九〇六、三五八
平均	一九、七五五、六七二	二九〇、六三六

人口増減地域

人口増減府邑面数 人口の増減は出生・死亡及び移住の關係に依りて大小高低を來し、部落並に市街に於ても、

或る期間を通ずると人口の増加又は減少を見るものであるが、試みに國勢調査に依りて大正十四年に對する昭和八年の人口増加並に減少せる府・邑・面を調べると左の如くなつて居り、行政區域の變更により調査不能の分を除き、人口増加せる府邑面は一、七七九に及び、人口減少せる府邑面は六四六になつて居る。

自大正十四年 五箇年間人口増加並減少府・邑・面数調査 至昭和八年

府 邑 面 数	人口増加府邑面数		人口減少府邑面数		人口増減調査不能
	一割以上	一割以上	五分以上	一割以上	
京 畿 道	二五	九	四	六	二七
忠 清 北 道	三	一	一	一	三
忠 清 南 道	一七	一	一	一	一
全 羅 北 道	四	一	一	一	一
全 羅 南 道	三	一	一	一	一
全 南 道	一	一	一	一	一
慶 尙 北 道	一	一	一	一	一
慶 尙 南 道	一	一	一	一	一
黃 海 道	一	一	一	一	一
平 安 南 道	一	一	一	一	一
平 安 北 道	一	一	一	一	一
江 原 道	一	一	一	一	一
咸 鏡 南 道	一	一	一	一	一
計	一〇七	一〇	一〇	一〇	一〇

咸陽縣	北道	一六	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	一八	一九	二〇	二一	二二	二三	二四	二五	二六	二七	二八	二九	三〇	三一	三二	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇	四一	四二	四三	四四	四五	四六	四七	四八	四九	五〇	五一	五二	五三	五四	五五	五六	五七	五八	五九	六〇	六一	六二	六三	六四	六五	六六	六七	六八	六九	七〇	七一	七二	七三	七四	七五	七六	七七	七八	七九	八〇	八一	八二	八三	八四	八五	八六	八七	八八	八九	九〇	九一	九二	九三	九四	九五	九六	九七	九八	九九	一〇〇
-----	----	----	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

備考 右表中には自大正十四年至昭和五年の期間中に其の區域の一部に変更がありたる府・邑・面にして、大正十四年調査當時の人口により増減比較をなしたものである。

人口増加著しき府邑面

出生・死亡の部に於て、出生率竝に死亡率高低の原因と、その高低地方とを説明してあるが、人口の増減には出生率竝に死亡率の外に、移住關係の影響も大であるから、國勢調査に基き、大正十四年に比し昭和五年に於て、特に人口増加著しき府邑面を見ると左の如くなつて居り、その地方の人口現象と産業交通等の關係を窺ふことが出来る。即ちこれに據ると、市街地及びその接續地、鐵道の開通せし地方、水利灌漑蒙利區域、漁港及び臨海漁村、山地帯などが、最も人口増加の勢ひ顯著なるを認められるが、近來は鐵山所在地、北鮮開拓地域、北鮮鐵道沿線に、人口の急激に増加せる府邑面が多い。

自大正十四年 至昭和五年 五箇年間一割以上人口増加府・邑・面

- 道別
 - 總人口一割以上三割未満増加
 - 京畿道
 - 京城府、高陽郡恩平面、廣州郡東部面、利川郡、邑内面、清溪面、龍仁郡水餘面、内西面、振威郡西炭面、松炭面、水原郡水原面、日新面、泰寧面、富川郡善丁面、桂南面、金浦郡内面、陽西面、江華郡水晶面、開豐郡東郊面、嶺南面
 - 總人口二割以上三割未満増加
 - 仁川府、高陽郡延禧面、富川郡多朱面、金浦郡陽東面
 - 總人口三割以上増加
 - 高陽郡龍江面、崇仁面、漢芝面、始興郡永登浦面、北面、富川郡德根面

忠清北道 清州郡四州面、※江外面、報恩郡、報恩面、内北面、三升面、炭釜面、懷北面、槐山郡甘勿面、長延面、會坪面、陰城郡陰城面、堤川郡堤川面、丹陽郡大崗面

忠清南道 公州郡内面、燕岐郡錦南面、大田郡大田面、懷德面、北面、炭洞面、儒城面、柳川面、論山郡論山面、光石面、夫赤面、述山面、恩津面、江景面、扶餘郡扶餘面、嶺南面、九龍面、鴻山面、玉山面、忠化面、林川面、石城面、舒川郡西府面、東面、保寧郡大川面、紫川面、熊川面、洪城郡洪州面、廣川面、靑山郡柳橋面、瑞山郡瑞山面、安眠面、唐津郡順城面、合德面、新平面、松山面、天安郡成歡面

全羅北道 全州郡南林面、伊西面、參禮面、錦山郡錦山面、在實郡任實面、碧蹄面、島山面、南原郡南原面、非邑郡山外面、甘谷面、永元面、梨坪面、德川面、滄土面、非邑面、高敞郡高敞面、扶安郡舟山面、東洋面、保安面、金堤郡白山面、白鷗面、萬頃面、孔德面、青蝦面、金溝面、下灘面、雙坎面、水流面、草處面、沃溝郡舊邑面、玉山面、臨陂面、瑞穂面、開非面、益山郡五山面、泰浦面、王宮面、成羅面、黃登面、望雲面、成悅面、望城面

全羅南道 光州郡池漢面、林谷面、孝泉面、極樂面、瑞坊面、潭陽郡潭陽面、光陽郡光陽面、骨岩面、麗水郡、

忠州郡忠州面 清州郡清州面 禮山郡禮山面、牙山郡温陽面 安郡天安面 公州郡公州面、燕岐郡溪島院面、舒川郡舒川面、馬東面、天安郡天安面 蔚山府、南原郡玉峙面、非邑郡龍北面、扶安郡扶寧面、乾先面、金堤郡月村面、沃溝郡大野面、益山郡北一面 扶安郡白山面、金堤郡金堤面、竹山面、扶梁面、碧德面、進風面、沃溝郡米面、益山郡益山面 木浦府、光州郡松汀面、求禮郡、長文面、麗水郡南面、三山面、安郡二老面 光州郡光州面、麗水郡麗水面務

粟村面、踏井面、順天郡道沙面、高興郡道陽面、蓬萊面、寶城郡得根面、和順郡西面、綾州面、長興郡長興面、大德面、長東面、康津郡康津面、郡東面、海南郡北平面、松旨面、海南面、山二面、黃山面、門內面、靈岩郡昆一絲面、務安郡三鄉面、一老面、朴谷面、清溪面、玄慶面、觀雲面、飛禽面、黑山面、押海面、羅州郡老安面、公山面、細技面、旺谷面、咸平郡咸平面、靈光郡靈光面、郡南面、白岫面、弘農面、鹽山面、法理面、落月面、莞島郡外西面、古今面、金白面、薰花面、青山面、珍島郡珍島面、郡內面、古郡面、義新面、濟州島楸子面

慶尙北道

道城郡蘇城面、義城郡玉山面、安溪面、盈德郡盈海面、丑山面、盈德面、慶州郡慶州面、西面、陽北面、金泉郡金泉面、善山郡龜尾面、尙州郡尙州面、咸昌面、開慶郡戶西南面、榮州郡伊山面、奉化郡小川面、奉陽面

慶尙南道

昌寧郡靈山面、密陽郡密陽面、上南面、下南面、梁山郡上西面、蔚山郡中南面、東萊郡東萊面、龜浦面、沙上面、沙下面、金海郡碧洛面、大濟面、下水面、昌原郡鎮海面、統營郡統營面、山陽面、二連面泗川郡、三子浦面、南海郡南海面、三東面、河東郡河東面、咸陽郡咸陽面、居昌郡居昌面、北上面

黃海道

海州郡日新面、廣洞面、漸佐面、高山面、延白郡延白面、湖東面、海城面、龍道面、溫井面、平山郡寶山面、新溪郡多面、靈津郡馬山面、長淵郡大款面、白翎面、海安面、松禾郡豐海面、泉洞面、殷栗郡西面、載寧郡北栗面、鳳山郡鐵泉面、遂安郡泉谷面、永口面、谷山郡下岡

平安南道

大同郡秋乙美面、青龍面、火寶面、金祭面、榮足面、順川郡順川面、新倉面、鳳鳴面、陽德郡吳江面、咸川郡九龍面、崇仁面、大谷面、三興面、陵中面、大邱面、龍岡郡大代面、平原郡順安面、西海面、寧邊郡大興面、德化面

平安北道

義州郡廣坪面、龜城郡利峴面、館西面、天摩面、雲山郡北嶺面、熙川郡真面、新豐面、博川郡露南面、定州郡郭山面、宜川郡宜川面、龍川郡內中面、外上面、蔚島面、昌城郡新倉面、大倉面、碧潼郡碧潼面、大平面、晉北面、夢時面、加別面、鶴會面、城南面、松西面、楚山郡楚山面、東面、南面、江面、城面、西面、渭原郡大德面、江界郡更西面、公北面、前川面、慈城郡三興面

江原道

麟蹄郡麟蹄面、南面、北面、瑞和面、淮陽郡上北面、通川郡通川面、欽谷面、高城郡西面、縣內面、梧峯面、襄陽郡襄陽面、西面、江陵郡沙川面、速谷面、三陟郡三陟面、近德面、遠德面、上長面、順天郡順天面、高興郡錦山面、寶城郡寶城面、長城郡長城面、莞島郡莞島面

釜山府

馬山府、晉州郡晉州面、梁山郡東面、蔚山郡蔚山面、東萊郡西面、南面、金海郡通永面、昌原郡大面、統營郡遠梁面

海州郡

海州郡西邊面、延白郡湖南面、松達面、信川郡信川面、費州郡兼二浦面、鳳山郡沙里院面

咸川郡

咸川郡四佳面、寧邊郡成龍面、新坡面、溫和面

昌寧郡

昌寧郡古學朔面、定州郡葛山面、古邑面、龍川郡龍川面、府羅面、外下面、朔州郡九曲面、昌城郡東倉面、楚山郡古面、松面、桃源面、板面、渭源郡密山面、西泰面、江界郡從西面、從南面、城干面、化京面、立信面、龍林面、慈城郡慈城面、三豐面、厚昌郡東新面、七坪面

春川郡

春川郡春川面、史內面、麟蹄郡麟蹄面、內面、楊口郡水入面、淮陽郡安豐面、長楊面、通川郡順嶺面、鶴一面、高城郡高城面

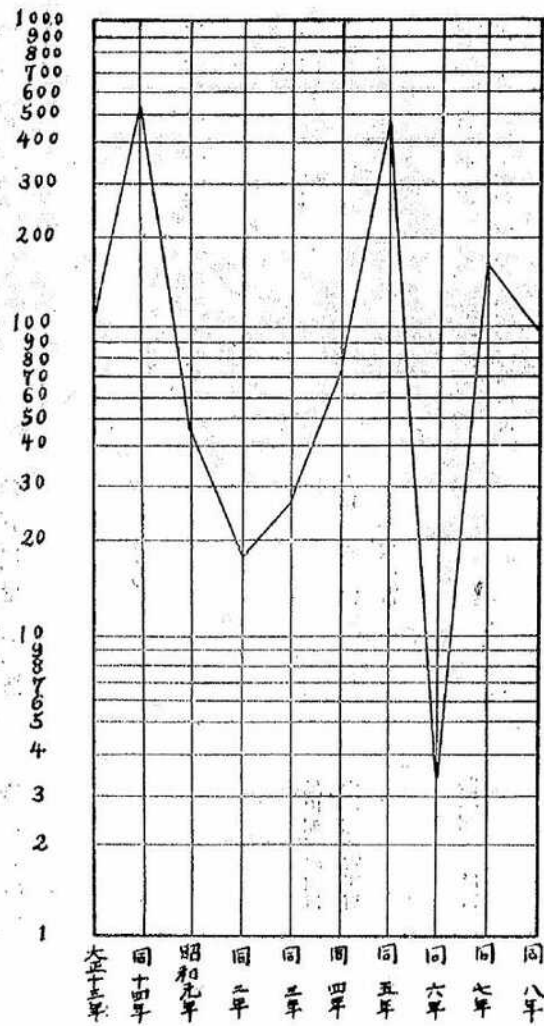
淮陽郡

淮陽郡南谷面、通川郡踏鏡面、金化郡任南面、鐵原郡北面、平康郡高狹面、伊川郡德源面

新義州府

新義州府、義州郡玉尙面、定州郡大田面、朔州郡外面、渭原郡崇正面、江界郡干北面、慈城郡梨坪面、慈下面、長土面、閔延面、厚昌郡厚昌面、東興面、南新面

最近十年間の人口増加率
(人口一萬人に付)



の人口減少を來したるものは相當に多い。而してこれ等の地方は主として純農村であり、中には火田民の移動に依り人口の著しく減少せるものもある。

人口減少著しき府邑面 移住關係を除けば、通常の場合、人口は自然に増加すべき性質のものであるから、人口減少の甚だしき府・邑・面は多くあるべき筈のものでないが、人口の自然減少又は移住出稼の爲めに、少數

成鏡南道

蔚珍郡蔚珍面、近南面、西面、平海面、旌善郡臨溪面、平昌郡平昌面、大和面、蓬坪面、寧越郡下東面、上東面、原州郡原州面、神林面、板富面、橫城郡橫城面、屯内面、甲川面、洪川郡瑞石面、金化郡金化面、金城面、遠東面、近南面、迎口面、鐵原郡鐵原面、平康郡縣内面、西面、榆津面、伊川郡伊川面、龍浦面、西面、鶴鳳面山内面、板橋面

新北面、江陵郡江陵面、新里面、旺山面、望祥面、橫城郡谷面、蔚川面、洪川郡斗村面、華川郡華川面、上西面、金化郡遠北面、鐵原郡鐵原面、東松面、於表面

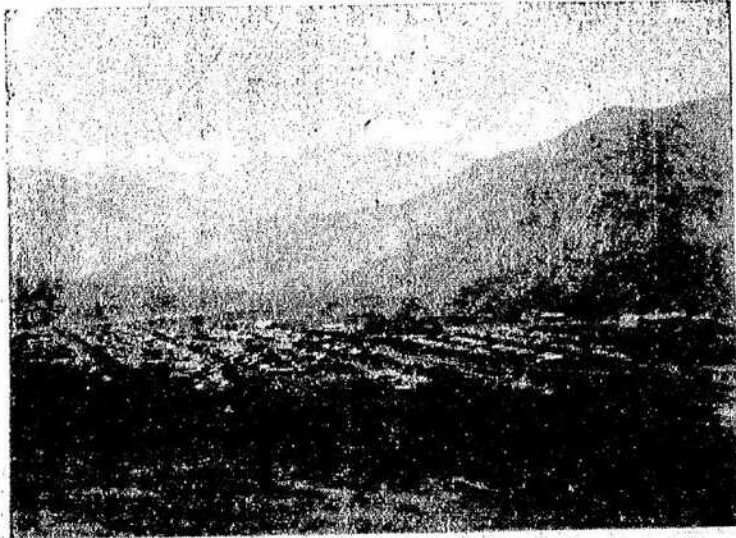
成鏡北道

元山府、永興郡宜興面、高原郡下鉢面、永洞面、文川郡箕林面、德源郡北城面、縣面、豐上面、豐下面、安邊郡鶴城面、安邊面、衡益面、北青郡北青面、新昌面、利原郡東面、新興郡加平面、長津郡北面、豐山郡天南面、三水郡好仁面、山西面、甲山郡長平面、同仁面

永興郡橫川面、高原郡山谷面、德源郡赤田面、長津郡中南面、蔚邑面、三水郡江嶺面、自西面

成州郡上岐川面、西湖面、高原郡雲谷面、文川郡都草面、利原郡南面、新興郡永萬面、東上面、長津郡内面、上南面、東下面、三水郡富興面、甲山郡雲興面、普惠面





里内川道南鏡成るせ與新りよに場工トメセ

人口自然増加

最近十年間の人口自然増加 併合後に於ける朝鮮の移住人口の増減は姑く措き、先づ人口の自然増加即ち出生、死亡の差増を見ると、明治四十三年以降に於て差増の最も大なるは、昭和五年の三十九萬三千九百九十三人、この差増率人口千に付一九・二七人で、これは同年に於ける出生数の著しき増加と、死亡数の甚だしく低きに原因する。また大正七年は内地と同じく朝鮮も流行性感冒の猛烈を極めた年で、差増僅に五萬四千九百八十五人、この差増率三・二二人で、既往に於ける最低率を示して居るが、最近十年間に於ては、昭和七年の十六萬七百五十九人、この差増率七・八〇人が最も低いのである。大體に於て併合當時に比較して差増率は遙かに高くなつて居り、大正九年前と大正十年後に於て差増率に著しき差を認めることが出来、この間

道別	總人口一割以上三割未満減少	總人口三割以上減少
京畿道	廣州郡南終面	
忠清北道		
忠清南道		
全羅北道		
全羅南道	求禮郡土旨面、靈光郡佛甲面	
慶尙北道		
慶尙南道		
黃海道	延白郡海月面、金川郡好賢面	
平安南道	大同郡溪大同江面	大同郡溪林原面
平安北道	義州郡義州面	大同郡溪古平面
江原道		義州郡溪光城面
咸鏡南道	洪原郡希賢面、北青郡基谷面、端川郡新滿面、永下面、南斗日面、北斗日面、豐山郡熊耳面、安山面三水郡三南面	新興郡下元川面

備考 ※印のある府・邑・面は自大正十四年至昭和五年の期間中其の區域に變更ありたるも、今分別調査困難なるを以て、大正十四年調査當時の人口により増減比較をなしたるものである。

に於ける、經濟の發達、衛生の進歩が、人口の増加を促したことは言を俵たないが、その二三年間の差増率減少こそは、實に朝鮮人口上の一大異變である。

試みに大正十三年より昭和八年に至る最近十箇年間の朝鮮に於ける人口差増率を平均して見ると、人口千人に付一四・六五人となつて居る。文化の發達が或る程度に至ると、人口増加率は減少するといふのが、人口上の通則になつて居るが、大正十二年以來、出生數、死亡數共に増加して居り、特に死亡數の増加が多く、更に昭和六年以後は、出生數が著しく減少し、死亡數が甚だしく増加した爲め、従つて差増數、差増率、共に近年急激に減少の傾向にあるは、文化の向上に基くか、生活難の影響に因るか、兎も角も注意すべき問題である。私はこれを以て一時的現象と認め、従つて民族衰亡の兆の現はれなどは信じないが、統計の改善は益々必要であり、斯くの如き急激なる人口増加率の低下に、憂慮すべき原因を藏して居るのでなければ幸である。

人口自然増加累年表

年 別	出生數	死亡數	自然増加數	人口千に付
明治四十三年	一八〇五九	二〇、五九九	六九、六六〇	五二六
同 四十三年	二二、八六七	二七、一五七	一、五七〇	八三三
大正元年	四八、三〇八	三三、〇〇一	一五、三〇七	二二九〇
同 二年	四九、九九八	二七、八三三	一八、一六五	二七五
同 三年	四七、九八五	三三、七四八	一四、五〇三	八八二

年 別	出生數	死亡數	自然増加數	人口千に付
同 四年	四四、八五一	四三、〇三四	一〇、八二七	六二九
同 五年	五六、二六四	三三、〇七四	一九、五二八	二四九
同 六年	五七、二七六	四〇、九三〇	一六、二八八	九六〇
同 七年	五七、八五九	五三、六〇六	四、九八五	三三三
同 八年	四七、四四七	三三、二八八	一四、二一九	四七九
同 九年	四七、六八三	四〇、四二〇	七、五五三	四三〇
同 十年	五二、八〇三	三四、五三二	一七、二八一	九九〇
同 十一年	五九、五〇五	三七、七五〇	二一、七五五	二、三三三
同 十二年	七二、九六一	三五、七二〇	三五、二〇四	一九六八
同 十三年	六九、〇六三	三八、七五八	三〇、三〇五	一、六七七
同 十四年	七三、四九三	三五、四九七	三六、九九六	一、七五五
昭和元年	六七、六一七	三五、七四三	三二、八四三	一、五二〇
同 二年	六九、八一八	四二、〇二五	二八、七九四	一、五〇二
同 三年	七二、五九四	四三、三七九	二八、二一五	一、五〇三
同 四年	七〇、二七九	四二、六七九	二七、六〇〇	一、三八九
同 五年	七七、二七〇	三八、八七七	三八、三九三	一九三七
同 六年	七七八八二	四〇、三六八	三〇、七四四	一、五二八
同 七年	六八、二七七	四七、七五八	二〇、五一九	七八〇
同 八年	六三、四〇七	四〇、三三三	二三、〇七五	九七二

内鮮外人別自然増加數 最近十年間の朝鮮に於ける出生數は六百九十五萬二千八十九人、死亡數は四百十二萬

五千五十人、差引自然増加数は二百八十二萬六千三十九人であるが、これを内鮮外人の男女別に就いて見ると左の如くなつて居る。

自大正十三年
至昭和八年 十箇年間に内鮮外人別人口自然増加数

内鮮外人	性別	出生数		死亡数		自然増加数
		男	女	男	女	
内地人	男	五九、一九六	五四、〇七一	四二、八五八	三三、二〇〇	一六、三三八
	女	一一三、二六七	一一三、二六七	八一、〇五八	八一、〇五八	三二、二〇九
朝鮮人	男	三、六三一、六〇九	三、二〇四、七五四	二、一五三、四〇九	一、八八七、二〇〇	一、四七八、二〇〇
	女	三、二〇四、七五四	三、二〇四、七五四	一、八八七、二〇〇	一、八八七、二〇〇	一、三二七、五五四
外国人	男	六、八三六、三六三	六、八三六、三六三	四、〇四〇、六〇九	四、〇四〇、六〇九	二、七九五、七五四
	女	七五三	七五三	二、四三〇	二、四三〇	一、六七七
計	男	一、四五八	一、四五八	三、三八三	三、三八三	一、九二四
	女	六、九五一、〇八九	六、九五一、〇八九	四、二二五、〇五〇	四、二二五、〇五〇	二、八二六、〇三九

各道人口自然増加数 更に昭和八年に於ける各道別の人口自然増加状態を見ると、差増数の最も大なるは慶尙南道の二萬六千四十七人、差増率の最も大なるは全羅北道の二・三四人で、差増数の最も少きは咸鏡北道の五千六百七十九人、差増率の最も少きは慶尙北道の六・四七人である。

道別人口自然増加数並自然増加率

道	自然増加数			人口千に付自然増加率		
	昭和八年	同七年	同六年	昭和八年	同七年	同六年
京畿道	106,000	106,000	106,000	2.0	2.0	2.0
忠清北道	8,000	8,000	8,000	0.3	0.3	0.3
忠清南道	16,000	16,000	16,000	0.3	0.3	0.3
全羅北道	26,447	26,447	26,447	2.3	2.3	2.3
全羅南道	26,447	26,447	26,447	2.3	2.3	2.3
慶尙北道	6,470	6,470	6,470	0.3	0.3	0.3
慶尙南道	26,447	26,447	26,447	2.3	2.3	2.3
黄海道	16,000	16,000	16,000	0.3	0.3	0.3
平安南道	16,000	16,000	16,000	0.3	0.3	0.3
平安北道	16,000	16,000	16,000	0.3	0.3	0.3
江原道	16,000	16,000	16,000	0.3	0.3	0.3
咸鏡南道	5,679	5,679	5,679	0.3	0.3	0.3
咸鏡北道	5,679	5,679	5,679	0.3	0.3	0.3
計	106,000	106,000	106,000	0.3	0.3	0.3

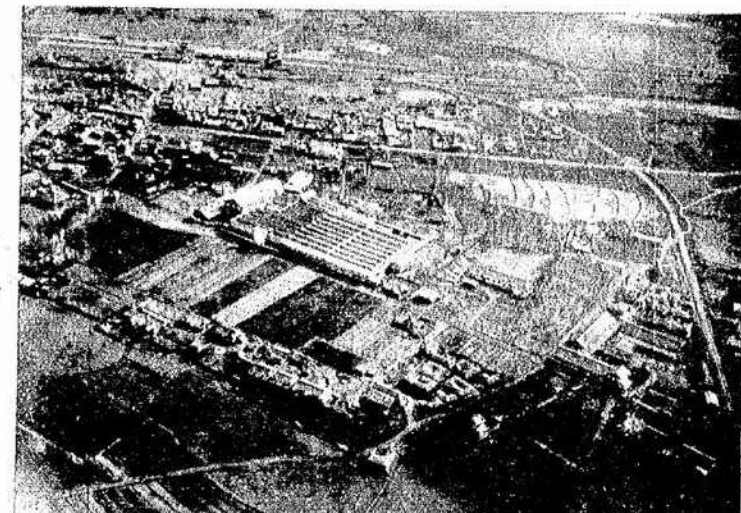
内地の人口自然増加率 昭和七年の内地に於ける人口の自然増加数は百萬七千三百九十八人であつて、人口千に對し一五・二〇人の割合となる。試みに自然増加率の高い府縣と低い府縣とを見ると次の如くなつて居る。

即ち内地の自然増加率の高い地方は、東北及び北海道等にして、低い地方は近畿に多い。

自然増加率の高い府縣

府縣名	昭和七年	同六年
青森縣	三・五	三・三
宮城縣	三・七	三・七
秋田縣	三・五	三・〇
北海道	三・三	三・〇
岩手縣	一・九	一・九
山形縣	一・六	一・六
福島縣	一・八	一・〇
新潟縣	一・七	一・五
群馬縣	一・七	一・七
山梨縣	一・七	一・七
東京府	一・七	一・七
神奈川縣	一・七	一・七
石川縣	一・七	一・七
島根縣	一・七	一・七

自然増加率の低い府縣



新工業地帯として興るる京外郊外永登浦

府縣名	昭和七年	同六年	府縣名	昭和七年	同六年
京都府	一・〇	一・〇	山口縣	二・八	二・八
高知縣	二・六	一・〇	奈良縣	二・六	二・六
大阪府	二・六	二・六	徳島縣	二・九	二・九

自然増加の多い地方と少ない地方 尙ほ府・郡・島別に就いては、最近の統計を缺くを遺憾とするが、拙著「朝鮮の人口現象」に據り、人口自然増加率の高い地方と低い地方とに就き、大正十年より同十四年に至る五箇年間の平均率を擧げて見ると、一箇年平均の人口自然増加千人に付二十二人以上の地方は三十箇所を算し、その十人以下の地方は三十七箇所に及んで居るのである。而して人口自然増加の高い所は概して沿海地方や山地帯に多く、人口自然増加率の低い所は、市街地やその接續地に多いことを示し、就中、當時の十二府中にて京城・仁川・群山・木浦・大邱・釜山・新義州・元山・清津の九府までがそれに屬し、殊に仁川、元山の二府は出生よりも死亡の方が多く、人口の自然減少を來して居る。

人口自然増加千人に付二十二人以上の地方

地方別	人口千に付自然増加數	地方別	人口千に付自然増加數
慶山郡	二・三	龍岡郡	三・五
清道郡	三・五	江州郡	三・五
蔚山郡	三・六	安州郡	三・五
金海郡	三・五	寧遠郡	三・五
		義州郡	三・五
		泰川郡	三・五
		寧邊郡	三・五
		博川郡	三・五

定州郡	三・五	朔州郡	三・四	端川郡	三・四
宣川郡	三・三	咸興郡	三・三	長津郡	三・三
鐵山郡	三・二	定平郡	三・二	豐山郡	三・二
龍川郡	三・一	高原郡	三・一	明川郡	三・一

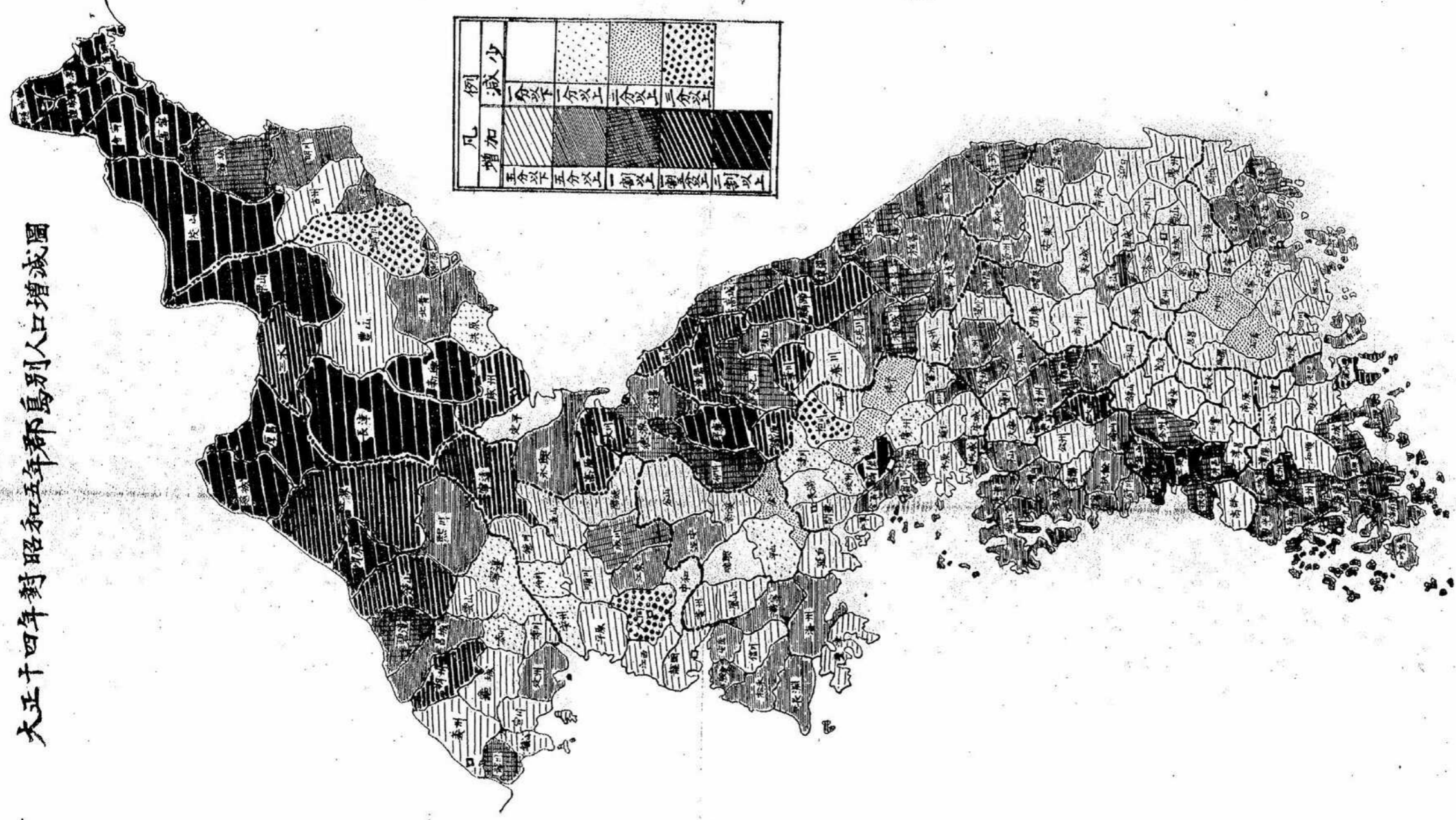
人口自然増加千人に付十人以下の地方

地方別	人口千に付 自然増加数	地方別	人口千に付 自然増加数	地方別	人口千に付 自然増加数
京城府	五・八	蔚山府	四・四	旌善郡	九・七
仁川府	一・三	全州郡	七・七	平昌郡	九・三
高陽郡	九・四	茂朱郡	九・元	原州郡	九・三
抱川郡	八・四	長水郡	九・二	横城郡	九・元
楊平郡	九・九	淳昌郡	八・九	華川郡	九・七
陰城郡	八・四	高敞郡	〇・五	元山府	一・六
忠州郡	九・六	沃津郡	八・三	清津府	七・〇
丹陽郡	五・八	木浦府	五・九		
論山郡	九・七	谷城郡	六・六		
洪城郡	八・七	靈岩郡	八・六		
		厚昌郡	九・三		

備考 △印は出生数よりは死亡数の多きものである。

府邑面の人口自然増加率 人口の自然増加率は、直接には出生・死亡・配偶・年齢・構成等に依り、間接には、地勢、氣候、産業、文化、生活、習慣等によりて影響を受け、その市街地と村落とでは最も明白にこれが

大正十四年對昭和五年郡島別人口増減圖



凡例	増加	減少
	五分以下	五分以下
	五分以上	五分以上
	一割以上	一割以上
	二割以上	二割以上
	三割以上	三割以上

人口の自然増加率は、直接には出生・死亡・配偶・年齢・構成等に依り、間接には、地勢、氣候、産業、文化、生活、習慣等によりて影響を受け、その市街地と村落とでは最も明白にこれが

裏面白紙

高低を現はすを例として居る。そこで私は曩に自大正十五年至昭和五年の五箇年間に於ける府・邑・面の出生率・死亡率・人口自然増加率を調査したことがあり、その結果として左の數字を得た。

府邑面別人口増加率調 (人口千人に付)

年	府			邑			面			計		
	出生率	死亡率	自然増加率	出生率	死亡率	自然増加率	出生率	死亡率	自然増加率	出生率	死亡率	自然増加率
大正十五年	三三・五	一八・八	一四・七	三三・五	一八・八	一四・七	三三・五	一八・八	一四・七	三三・五	一八・八	一四・七
昭和元年	三三・二	一八・八	一四・四	三三・二	一八・八	一四・四	三三・二	一八・八	一四・四	三三・二	一八・八	一四・四
昭和二年	出生率	死亡率	自然増加率	出生率	死亡率	自然増加率	出生率	死亡率	自然増加率	出生率	死亡率	自然増加率
	三三・四	一八・九	一四・五	三三・四	一八・九	一四・五	三三・四	一八・九	一四・五	三三・四	一八・九	一四・五
	三三・三	一八・九	一四・四	三三・三	一八・九	一四・四	三三・三	一八・九	一四・四	三三・三	一八・九	一四・四
昭和三年	出生率	死亡率	自然増加率	出生率	死亡率	自然増加率	出生率	死亡率	自然増加率	出生率	死亡率	自然増加率
	三三・三	一八・九	一四・四	三三・三	一八・九	一四・四	三三・三	一八・九	一四・四	三三・三	一八・九	一四・四
	三三・三	一八・九	一四・四	三三・三	一八・九	一四・四	三三・三	一八・九	一四・四	三三・三	一八・九	一四・四
昭和四年	出生率	死亡率	自然増加率	出生率	死亡率	自然増加率	出生率	死亡率	自然増加率	出生率	死亡率	自然増加率
	三三・三	一八・九	一四・四	三三・三	一八・九	一四・四	三三・三	一八・九	一四・四	三三・三	一八・九	一四・四
	三三・三	一八・九	一四・四	三三・三	一八・九	一四・四	三三・三	一八・九	一四・四	三三・三	一八・九	一四・四
昭和五年	出生率	死亡率	自然増加率	出生率	死亡率	自然増加率	出生率	死亡率	自然増加率	出生率	死亡率	自然増加率
	三三・三	一八・九	一四・四	三三・三	一八・九	一四・四	三三・三	一八・九	一四・四	三三・三	一八・九	一四・四
	三三・三	一八・九	一四・四	三三・三	一八・九	一四・四	三三・三	一八・九	一四・四	三三・三	一八・九	一四・四

出生率	三二四〇	三二七九	三六〇六	三二七五
死亡率	三三三〇	二〇三三	二二九四	三二七〇
自然増加率	八二二	一二四八	一六五二	一九八六

備考 府には十四府、即ち開城、咸興を含み、邑は昭和六年四月一日現在の四十二邑である。拙著「朝鮮の墜落」に據る。

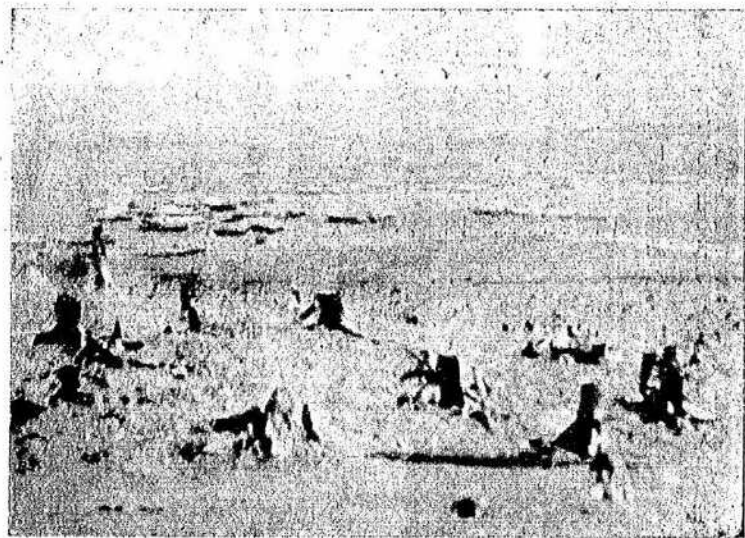
即ち五箇年平均の府・邑・面の調査では、出生率は面が最も高く、府が最も低く、死亡率は府が最も高く、邑が最も低く、結局自然増加率は村落たる面が第一位で、小市街地たる邑これに次ぎ、都會地たる府が最も低くなつて居り、大體に於てこれを通じ、その年齢構成と、配偶關係、及び生活、文化、醫療機關などが、出生率、死亡率、人口自然増加率に及ぼす影響を自ら看取することが出来る。

將來の人口豫測

將來の人口豫測を爲すに當りては、人口の自然増加率の外に、配偶關係、女の妊孕力、人口の年齢構成等が先づ考慮に入れられ、或は人口密度、人口の都市集中、移住人口數、婚姻率の高低、天災饑饉の周期研究等、各種の條件を加味して、算出せんとする學者があるが、いづれも一長一短ありて、未だ完全なりと認むるに足る學説はない。しかしながら、朝鮮の如く現に産業・交通・文化・生活等に一大發展飛躍が行はれ、それが爲めに延いて人口上幾多の異變を見つゝあり、殊に當局は頗る大規模なる朝鮮人の滿洲移住計畫をも樹立して居り、一方には南鮮地方より北鮮地方への移住奨励が問題となつて居るなど、將來の人口趨勢には相當變化が豫想される。されば斯かる際には、徒らに理論に因らばれ、小面倒なる技術的方法を用ゐて將來の人口推計を試

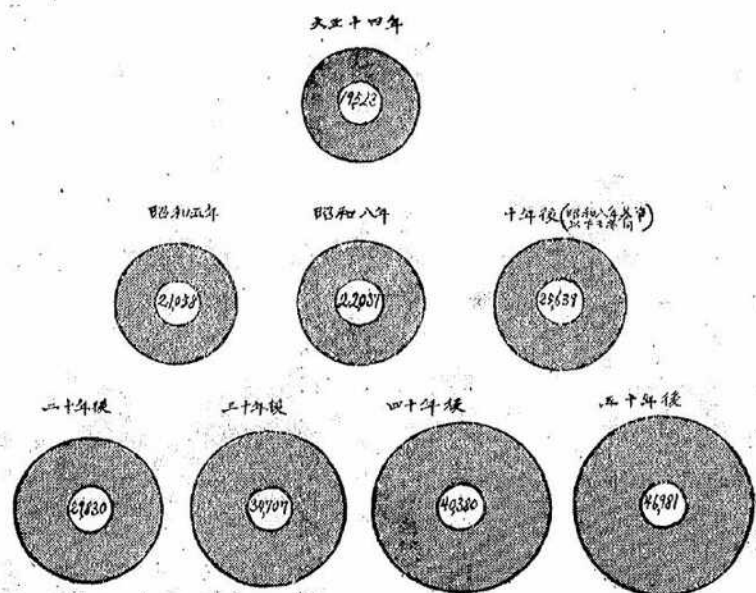
むる如きは、却つて大局を誤る懼れがある。そこで私は、(一)國勢調査人口による推計人口、(二)現住人口増加率による推計人口、(三)人口自然増加率による推計人口、この三者を計算して、簡單明瞭に將來の人口豫想をして見たいと思ふ。明日の天氣豫報さへも往々適中しないことがあるのに、極めて複雑微妙なる諸種の原因又は影響を受けて變動を生ずる人口増加數に關し、十年、二十年、三十年、乃至五十年後のことを、的確に豫測せんとするが如きは、到底不可能の業であるが、これに依りて朝鮮人口の大勢の推移は略ぼ見當をつけ得るであらう。

國勢調査人口による推計人口 從來の人口統計中、國勢調査は最も正確であるが、大正十四年簡易國勢調査人口と昭和五年國勢調査人口とを比較し、其の五箇年間に於ける平均一箇年の増加率を算出し、この増加率により將來の人口を推算して見ると次の如くなる。



落部田火るたれま替てし入火に地炎

國勢調査人口増加率による将来の推計人口
(千位以下四捨五入)



昭和八年末現住人口 二〇、七九一、三二一
 十 年 後 二四、一四七、八一九
 二 十 年 後 二八、〇四六、三五四
 三 十 年 後 三二、五七三、九六五
 四 十 年 後 三七、八三二、八三八
 五 十 年 後 四三、九四〇、五〇四

備考 増加率は前年末人口に對する割合である。即ち
 自大正十三年至昭和八年十箇年間の増加總數を
 各前年末人口の合計で除したるものである。

自然増加率による推計人口 移住人口を加へた
 人口増加率には甚だしき異動があるが、自然増
 加率は将来を豫測する上には最も正確とされて
 居り、自大正十三年至昭和八年十箇年間の平均
 一箇年間の人口自然増加率は〇・〇一四六五四
 〇五一となる。さればこの増加率を以て將來の
 人口を計算すると左表の通りである。

大正十四年十月一日現在人口 一九、五二二、九四五
 昭和五年十月一日現在人口 二一、〇五八、三〇五
 五箇年間の増加數 一、五三五、三六〇
 平均一箇年の増加率 〇・〇七八六四三九
 〇・〇一五二五二二九

この平均一箇年の増加率により、昭和八年十月一日現在人口を推算すると二二、〇三六、八四一人となる。そこで昭和八年十月一日現在人口と前記増加率とを基準として、將來の人口推計を算出して見やう。

昭和八年十月一日
 十 年 後 二二、〇三六、八四一
 二 十 年 後 二五、六三九、二七六
 三 十 年 後 二九、八三〇、三二四
 四 十 年 後 三四、七〇六、八七二
 五 十 年 後 四〇、三八〇、一六二
 四六、九八一、〇三四

現住人口増加率による推計人口 現住人口には年に依り増加率に甚だしき高低あるも、十箇年を通算すれば比較的正確に近いものが得られると思ふが、自大正十三年至昭和八年十箇年間の平均一箇年の現住人口増加率は〇・〇一五〇七五三四の割合となる。さればこの増加率で將來の人口を推算して見ると次の如くなる。

昭和八年末現住人口	二〇、七九一、三三二
十年後	二四、〇四八、九五二
二十年後	二七、八二六、五七二
三十年後	三二、一七五、一〇八
四十年後	三七、二一六、四三七
五十年後	四三、〇四七、二三九

將來の推計人口比較 將來の人口は、政治・經濟・交通・文化・衛生・其他の條件に影響されるから、端的に推測は下し難きも、假りに上記の三方法により算出したる將來の推計人口の比較表を次に掲げて見やう。三者とも多少計數を異にするも、今後人口増加を妨ぐべき特殊の事態の發生せざる限り、四、五十年の間に、朝鮮の人口總數は現在の約二倍内外となり、四千三百萬人から四千七百萬人位に増加する計算となるのである。

昭和八年	國勢調査增加率 (十月一日現在)	現住人口增加率 (十二月末日現在)	自然增加率 (十二月末日現在)
十年後	二二、〇三七	二〇、七九一	二〇、七九一
二十年後	二五、六三九	二四、一四八	二四、〇四九
三十年後	二九、八三〇	二八、〇四六	二七、八一七
四十年後	三四、七〇七	三三、五七四	三三、二七五
五十年後	四〇、三八〇	三七、八三三	三七、二一六

五十年後 四六、九八一 四三、九四一 四三、〇四七

これを要するに、日韓併合後に於ける朝鮮の文化的經濟的諸般の發展は實に迅速であるが、その人口の増加も亦前述の如く著大であり、且つ將來の人口推計は以上の如く大増加を見る計算となり、明治初年以後今日までに内地の人口増加を來したると略ぼ同様の勢ひを以て、朝鮮は人口的躍進を豫想され、更に産業上、交通上等に特殊の施設が行はるゝに至らんか、一層の人口増加が期待される。此に於てか朝鮮の將來を觀察すると、三十年乃至五十年の後には、朝鮮自體が内地の現在若くはそれ以上に人口増加に苦むに至るは必然である。殊に現在の人口密度の多少や耕地面積の大小のみを見て、將來の人口收容力を推測せんとするが如きは甚だしき謬想である。人口收容力の大小は面積の廣狹に依るにあらずして、その地味地質の優劣、天然資源の貧富、産業發達の程度、風土氣候の適否、國民勤怠の如何等に負ふ所が多いのであるから、朝鮮が内地と同程度に人口收容力ありとは何人も考へられぬであらう。果して然りとせば、我國の人口問題解決に就いて、一部の人達の考ふる如く、朝鮮に餘り多くを期待することは不可能である。斯くの如く觀じれば、我國の人口及び食糧問題解決は當然滿洲を目標とせねばならぬが、朝鮮もその産業開發の如何によりては、勿論現在以上に多々益々内地へ對して、食糧及び原料の供給を爲し得る地位に在る。しかしながら、朝鮮内の人口が増加し、文化が進み、生活程度が向上するに於ては、その消費が増進することも亦當然である。されば將來に處する爲めには、獨り原料品及び食糧品の増産計畫に止らず、農村問題、移民問題、都市問題、工業問題、労働問題、社會問題等、朝鮮の經濟政策及び社會政策は、須らく遠大なる抱負經營を以て施設經營に當らねばならぬ。

